

あめ そこ くし ぼる い せき
天 底 後 原 遺 跡

— 屋我地仲宗根線道路新設工事に係る緊急発掘調査報告 —



2006年 2月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

あめ そこ くし ぼる い せき
天 底 後 原 遺 跡

— 屋我地仲宗根線道路新設工事に係る緊急発掘調査報告 —

2006年 2月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

序

本報告書は、今帰仁村字天底における「屋我地仲宗根線道路新設工事」に伴って実施された埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果を収録したものです。

発掘調査は平成16年度に行い、その後平成17年度に資料整理を実施しました。今回調査の行われた一帯は台地上の微高地にあって、アミスガー周辺に広がる水田等の畑を経営するグスク時代から近世琉球・近代の集落遺跡であると考えられます。特に今帰仁村において、今帰仁城跡以外におけるグスク時代（およそ600～500年前）の様相の一端をつかめたことは、大きな成果であります。また、今回出土した多くの文化財は、我々の祖先達の生活や文化環境を知る上で貴重な歴史資料であります。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待します。

おわりに、本調査にあたり調査指導、報告書作成等で協力をいただいた諸先生方、また調査に参加協力くださった方々に記して御礼を申し上げます。

今帰仁村教育委員会
教育長 田港 朝茂

例 言

1. 本書は平成16年度に今帰仁村教育委員会が屋我地仲宗根線道路新設工事に伴って発掘調査を実施した「天底後原遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、沖縄県今帰仁村字天底565、566、567、568番地ほかに所在する。
3. 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。
松本 幡郎（元熊本大学教授） 渡辺 芳郎（鹿児島大学助教授）
新里 亮人（伊仙町教育委員会） 名島 弥生（慶應義塾大学大学院生）
4. 本書掲載の現場における遺構実測図、現場の撮影については玉城靖が行った。
5. 調査の記録及び出土遺物の保管は、今帰仁村教育委員会で行う。
6. 本書の作成・執筆・編集は玉城・宮城が行った。
7. 遺物の実測はスケールを1/1・1/2・1/3で統一した。遺構及び土層図は現場での実測を1/20で統一したが、本書掲載では1/100・1/50・1/40・1/20に縮尺を統一している。

目 次

第Ⅰ章 天底後原遺跡の概要

1 天底後原遺跡の位置と環境	2～3
2 天底後原遺跡の歴史概観	4～5
3 天底後原遺跡周辺の民俗祭祀空間	6

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯	8
2 調査経過	9
3 調査組織	10
4 調査地区	11

第Ⅲ章 層 序

13～14

第Ⅳ章 遺 構

1 概 要	16～17
2 S B 01	19
3 S K 661	20
4 S B 02	21～22
5 S X 1	23～31
6 S X 2	32

第Ⅴ章 遺 物

1 概 要	34
2 Ⅲ層及び遺構内出土遺物	35～45
3 Ⅱ層出土遺物	46～47
4 Ⅰ層出土遺物	48～53
5 遺物観察表	53～56
6 墨書資料について	57
7 自然遺物	58

第Ⅵ章 総 括

59～61

参考文献	62
------------	----

図 版	63～90
-----------	-------

報告書抄録	91
-------------	----

図 表 目 次

第1図	天底後原遺跡位置図	2
第2図	大井川沿いの文化財分布図	3
第3図	拝所位置図	6
第4図	天底後原遺跡調査地区設定図	11
第5図	遺構平面図及びセクション図	17
第6図	遺構詳細図S B01	19
第7図	遺構詳細図S K661	20
第8図	S K661出土遺物	20
第9図	遺構詳細図S B02	22
第10図	S X 1・S X 2 遺構図	23
第11図	S X 1 出土遺物 (1)	26
第12図	S X 1 出土遺物 (2)	27
第13図	S X 1 出土遺物 (3)	28
第14図	S X 1 出土遺物 (4)	29
第15図	S X 1 出土遺物 (5)	30
第16図	S X 1 出土遺物 (6)	31
第17図	S X 2 出土遺物	32
第18図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (1)	38
第19図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (2)	39
第20図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (3)	40
第21図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (4)	41
第22図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (5)	42
第23図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (6)	43
第24図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (7)	44
第25図	Ⅲ層及び遺構内出土遺物 (8)	45
第26図	Ⅱ層出土遺物	47
第27図	I層出土遺物 (1)	50
第28図	I層出土遺物 (2)	51
第29図	I層出土遺物 (3)	52
第30図	I層出土遺物 (4)	53
第1表	天底ムラの歴史年表	5
第2表	S B02柱穴観察表	21
第3表	出土遺物集計表	34
第4表	出土遺物観察表	53~56
第5表	S K661出土植物遺体	58
写真1	墨書資料	57

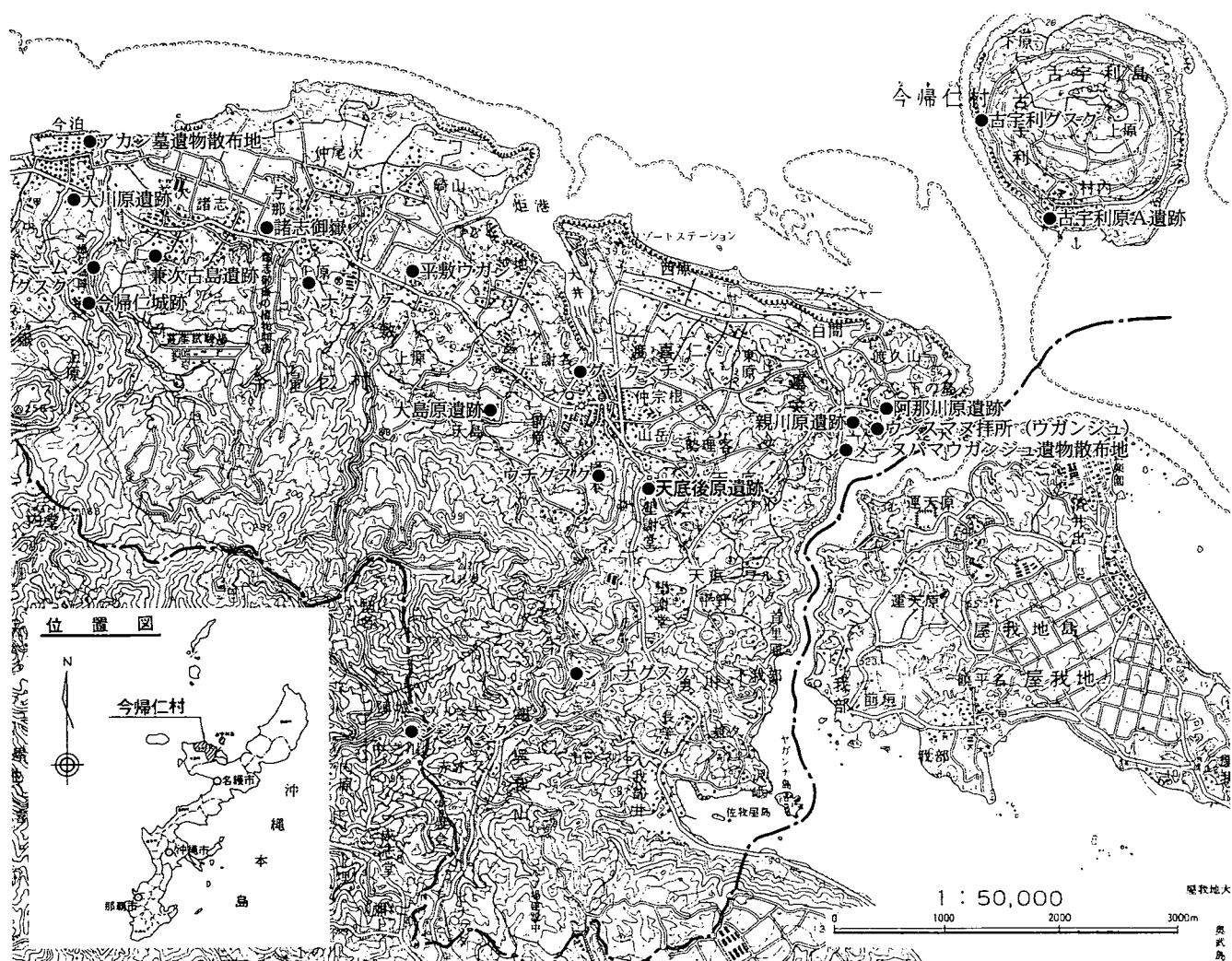
第 I 章

天底後原遺跡の概要

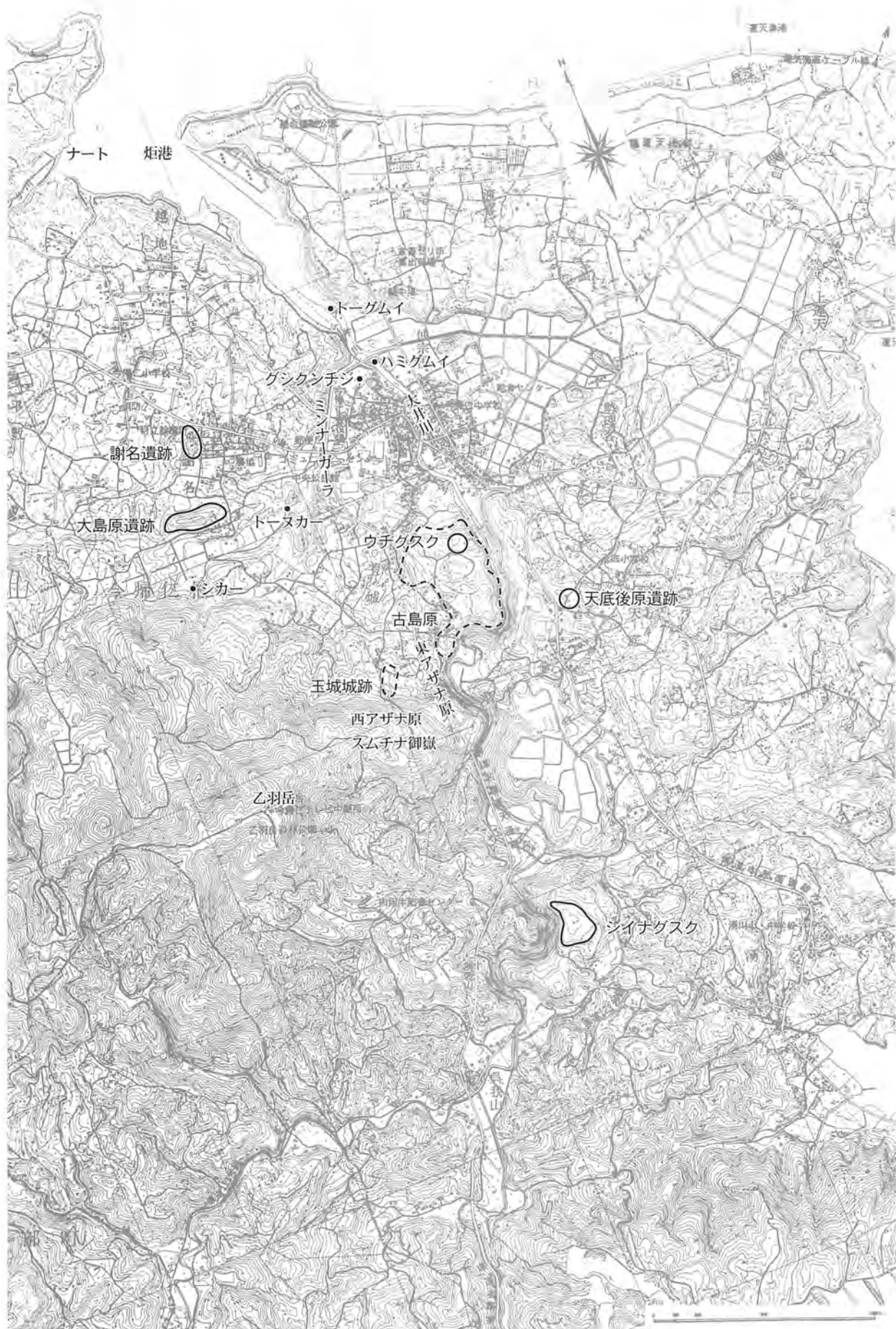
1 天底後原遺跡の位置と環境

今帰仁村は本部半島の北東半分を占め、西は本部町、南は名護市及び本部町と接する。東はワルミ海峡を隔てて屋我地島と対峙し、運天港の北側約2キロの地点には古宇利島を擁する（与儀1975）。天底後原遺跡は今帰仁村の東部に位置し、行政区は今帰仁村で、大字天底小字後原の台地上（標高約40～45m）に所在する（第1・2図）。この地域の地質は上位から琉球層群（琉球石灰岩・第四紀更新世）、国頭礫層（第四紀更新世・琉球層群と同時異層）、与那嶺層からなる。本調査地域は有孔虫やサンゴで形成された琉球層群琉球石灰岩（第四紀更新世）からなり、多孔質で帯水層としてはかなり有効である。沖縄各地の湧泉や井戸はこれに起因し、重要な水源となっている。遺跡周辺にも湧泉が発達し、ムラウチ側へ少し入ると、アミスガーという湧泉がある。このアミスガーには昭和30年に県指定天然記念物として指定されたシマチスジノリが生息する。

他に天底の特異な自然現象として、小字和呂目原の鍾乳洞（寺原）がある。この鍾乳洞は古生代ペルム系石灰岩の浸食により発達したもので、洞穴内にはつららや石筍が確認されている。ペルム系石灰岩は今帰仁と屋我地島の両方の海岸線に沿って分布しており、急な崖を形成している。



第1図 天底後原遺跡位置図（今帰仁村の主なグスクとグスク時代の遺跡）



第2図 大井川沿いの文化財分布図

2 天底後原遺跡の歴史概観

今帰仁村字天底は316世帯、人口770人（2005年11月末現在）である。戦前は農業と林業を生業とし、農作物としては芋、麦、大豆、米などがあったという。加えて天底は藍の名産地でもあり、重要な換金作物として昭和45年頃まで栽培されていた。現在ではサトウキビ、パインを中心に生産している（萩尾1982）。

もともと天底の故地は本部半島中央部に位置する本部間切伊豆味村付近にあったが1719年（尚敬7）に現在地に移動してきたといわれる（『球陽』）。また、1736年には呉我ムラが羽地間切に移動し、呉我ムラのあった場所に三謝原、古拝原、古呉我原の地名が付され天底ムラに組み込まれている。地理的に「天に近い盆地」（高いところにある窪地）にあったことからアミスク（天底）のムラ名が付けられたことが指摘され、アミスクのアミは天や高いところ、スクはグスクのスクに通じ、御嶽や拝所を意味すると言われる（仲原1997）。

史書では『琉球国高究帳』には「あめそこ村」として登場し、石高21石（田18石余、畠8石余）として確認できる。村内でも士族が多い村として知られており、寄留士族が散在する形で村を形成していたと考えられる。

集落は広い土地に展開し11の小字からなるが、大きく4つの集落に分かれている。特に公民館が所在する一帯はムラウチと呼ばれ、そのほかはサンタキ（山岳）、メーワルミ、クンジャドー（壑謝堂）と呼ばれている。これら4つの集落については、その形成過程が比較的鮮明に意識されている。大まかに記すと、「ムラウチは本部町の伊豆味をはじめとする他村落から12～15代前に寄留してきた」と伝えられる。最初に寄留したのが仲宗根姓（イガヤーと呼ばれる家）で、次に仲里姓（ジョウグチと呼ばれる家）、3番目が新城姓（アラグシヤーと呼ばれる家）と言われる。メーワルミは勢理客からの分家者により成立したといい、現戸主で3～4代になると言われる。またクンジャドーは湧川、我部、玉城などの出身者からなり、ここも3～4代と新しい集落である。一番新しい集落がサンタキで戦前は数軒家があったのみで、戦後ムラウチなどの分家者によって成立している（萩尾1982）。

天底後原遺跡は集落でもムラウチと呼ばれる後原に立地するが、ここは現在の集村域からはやや離れた場所にあたる。現在の集落の中心地は公民館や売店などが集まる場所で、小学校なども近隣に位置している。他方主要な拝所については集落の南側外田原とその周辺に位置している。最も中心的な聖地としてクシムイがある。これを中心にニガミヤー（根神屋）、ヌンドウンチ（ノロ殿内）、アミスガー、ウブガー、神アサギ、お宮など分布する。お宮は御嶽と呼ばれ、ヌンドウンチはムラウチに3番目に寄留したとされるアラグシクヤー（新城家）の娘が祀るものとされ、その娘がヌルと呼ばれる（萩尾1982）。天底ノロはムラ移動以前本部間切の天底にて、伊豆見ムラ、嘉津宇ムラの祭祀を管轄していたが、当村移転以後もこの慣習は受け継がれ第二次大戦前まで続いたとされる（高良2002）。これについては次節にて詳述する。

時代区分	年 代	天底ムラの主な出来事
貝塚時代	～ A.D. 1100頃	現在のところ先史時代遺跡は確認されていない。
古 琉 球	A.D. 1100頃～	
	1200年末頃	天底後原遺跡発見の最も古い遺物はこの頃のもの。
	1383年	山北王帕尼芝、明国王に使者を派遣し交易を行う（6回）。
	1396年	山北王珉、明国王に使者を派遣し交易を行う（1回）。
	1416年	山北王攀安知、明国王に使者を派遣し交易を行う（11回）。
	1416年	攀安知、尚巴志に滅ぼされる（一説には1422年）。
	1422年	尚巴志、次男尚忠を山北（今帰仁）監守として派遣する。
	1471年	『海東諸国紀』（琉球国之図）に「伊麻奇時利城」として今帰仁城が登場する。
近 世 琉 球	1400年～ 1500年頃	天底後原遺跡に人が居住する。
	1609年	薩摩侵攻で今帰仁城は焼き討ちにあう。
	1649年	『絵図郷村帳』に「あめそこ」が記載される。
	1635年～48年	『琉球国高究帳』に「あめそこ」が記載される。
	1666年	今帰仁間切を分割して伊野波（本部）間切を新設。
	1713年	『琉球国由来記』本部間切の項にて「天底村」が記載される。
	1719年	本部間切呉我山（伊豆味）地内にあったが、現在の場所に村移動する（『球陽』）。
	1742年	蔡温による今帰仁間切の竿入（御支配・検地）がなされる。
	1861年（咸豊11）	『農事御取締帳』に「天底掟」と記載される。
	1872年（明治5）	琉球藩が設置される。 天底村の田港家が保管する『向姓家譜』の最後の記事。系祖は九世 田湊里之子親雲上朝典〔嘉慶七年（1802）〕
近 代 沖 縄	1880年（明治13）	天底村の人口が336人・73戸（『沖縄県統計書』） 『県下各間切各島夫地頭以下役俸調』に「天底掟 仲里にや」と記載。
	1878年（明治21）	今帰仁小学校から分離して天底尋常小学校が創立。
	1879年（明治22）	琉球藩が廃され、沖縄県となる。 天底村の人口が402人・83戸（『沖縄県統計書』）
	1903年（明治36）	天底村の人口が587人・101戸（『沖縄県統計書』） 『砂糖消費税法改正之儀ニ付請願』を提出する。 『国頭郡今帰仁間切天底全図』が作成される。
	1919年（大正8）	天底小に高等科を置く。
	1920年（大正9）	湧川・玉城・天底の一部を割いて呉我山が分字する。
	1931年（昭和6）	天底村の人口が702人・148戸（『沖縄県統計書』）
	1941年（昭和16）	勢理客と仲宗根の一部を割いて渡喜仁が分字する。
	1945年（昭和20）	沖縄戦。沖縄県は壊滅状態となり、アメリカ軍の統治下に置かれる。6月17～18日謝名・越地以東の今帰仁村民は羽地へ疎開するよう米軍に命令され収容生活を余儀なくされる。10月31日帰村命令。
	1962年（昭和37）	天底、勢理客、渡喜仁、上運天、運天に簡易水道竣工。
戦 後 沖 縄	1970年（昭和45）	字天底の人口が853人、世帯数158。（『統計なきじん』創刊号）
	1972年（昭和47）	日本本土復帰。
	1980年（昭和55）	字天底の人口が765人、世帯数172。（『統計なきじん』第2号）
	1990年（平成2）	字天底の人口が796人、世帯数269。（『統計なきじん』第7号）
	2000年（平成12）	字天底の人口が746人、世帯数288。（『統計なきじん』）
	2005年（平成17）	字天底の人口が770人、世帯数316。（11月末『住民基本台帳』）

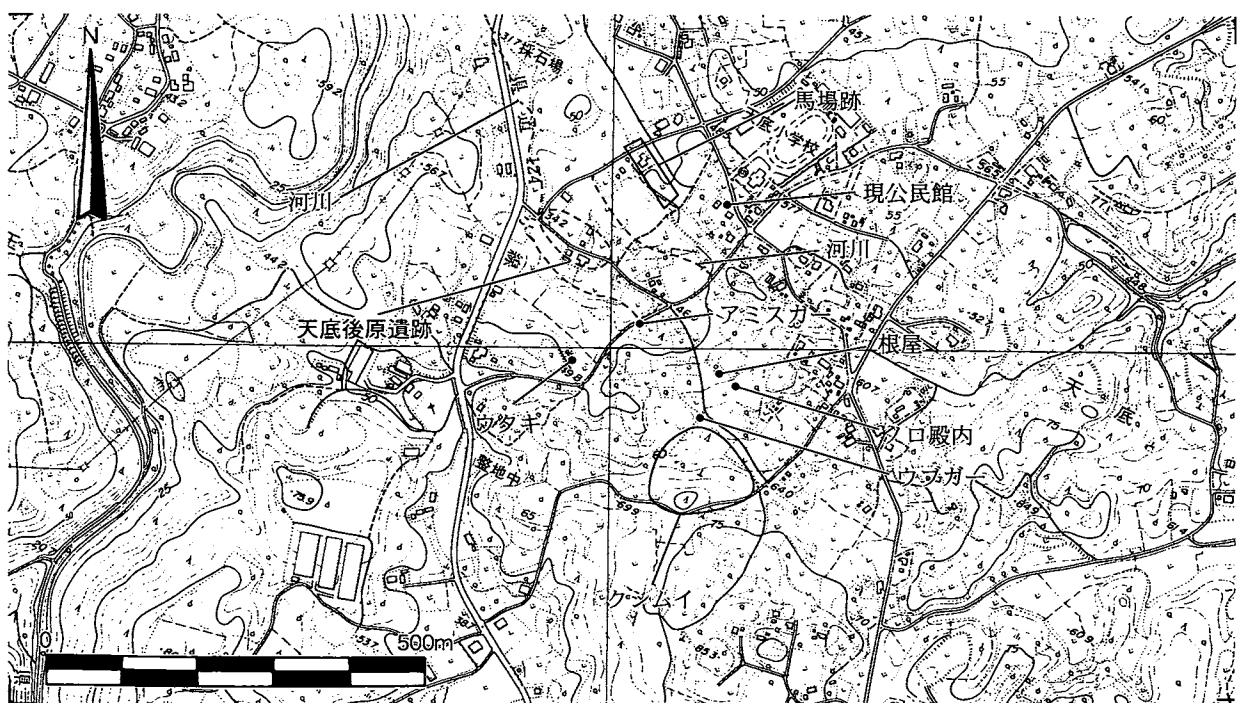
第1表 天底ムラの歴史年表

3 天底後原遺跡周辺の民俗祭祀空間

天底の主要な拝所はすべてムラウチの南側にある通称クシムイという社に所在する。オミヤ、アサギ、ヌンドウンチ（ノロ殿内）、ニガミヤー（根神屋）がそれらである。オミヤはとりわけ古老達の間ではウタキ（御嶽）と呼ばれたりもする。ヌンドウンチはアラグシヤー（新城家）の娘が祀るものとされ、その娘はヌルと呼ばれる。このヌルは本部町の伊豆味をも祭祀領域とし、カニヌル（兼ねノロ）とも称される。

天底には主に祈願の対象となっている3つの井泉がある。アサギのすぐ傍らにある井泉は普通ウブガーと称される。古老によればカーグワーとも言い、集落で一番古い井戸であり、天底に最初に寄留した5～6軒が共同で使用したものという。クシムイの北側にはアミスガーとイキガカーがある。アミスガーはその用途からウブガーであるとも言い、産湯に使うウブミジ（産水）や正月のミーミジ（新しい水）を汲んだ井泉とされる。アミスガーには昭和30年に天然記念物指定を受けたシマチスジノリが生息する。天底の年中行事を記すと、旧暦1月1日（ティタチウガン）、2月のウマチー、3月のウチマチ、4月タキヌウガン、5月のウマチー、6月のサーザーウェー、7月のワラビミチ、8月のシバシウガン、アラダムトゥ、10月のヒーマチヌウガン等がある（萩尾1982）。

他方、天底の方々からの聞き取り調査によって「この土地は別名按司屋敷とも呼ばれ、地元の名士が住んだ場所」と伝えられていることを確認することができた。天底後原遺跡の傍にも小さな祠には中南部あたりから毎年拝みに来る方がいるという。沖縄では先祖伝来の屋敷を引っ越す際に家は取り壊しても、「火之神」などの神様を祀る祠は屋敷地内に置いていくことがしばしば見受けられる。この祠もそのような習俗によって設置されたものと考えられるが、所有者や関係者を聞き取ることは出来なかった。



第3図 拝所位置図

第Ⅱ章

調査の概要

1 調査に至る経緯

村内における埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和56～58年度に遺跡の分布調査が実施されて以後、これに報告された遺跡を「周知の遺跡」とし、報告される遺跡については取り扱いに関して事前協議を図っている(上原ほか1984)。今回の調査は昭和56～58年度の調査では未見の遺跡である。平成10年2月18日北土第2926号において沖縄県北部土木事務所長より「屋我地仲宗根線整備事業に係る文化財の有無について」紹介があり、平成10年度今帰仁村教育委員会では道路を新設する約15kmにおいて踏査を行った。この際、天底後原568番地一帯においてグスク時代に相当する陶磁器等の遺物が散布しているのを確認することができた。今教社文第83号平成10年7月3日付けで、文化財保護法第57条の6第1項の規定により「遺跡発見の届出」を提出する。この時遺跡の種類を散布地としていたため、天底後原遺物散布地として以後開発調整を行った。今教社文第37号平成10年5月11日付けで、土木事務所長へは「屋我地仲宗根線整備事業に係る文化財の有無について(回答)」提出しており、天底後原遺物散布地がある旨回答している。平成10年度～平成13年度と土木事務所と協議を重ね、北土第2040号平成13年10月25日付けの書類では、文化財保護法第57条の第3項に基づいて「埋蔵文化財の発掘の通知」を提出するところとなる。村教育委員会では、遺跡の調査費の積算及び遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査を平成14年度に実施し、今教社文第156号平成14年10月31日付書類にて土木事務所へ「屋我地仲宗根線の建設工事における文化財の範囲について」報告を行う。このときの範囲確認調査の結果より、遺物包含層が良好な状態で残存するグスク時代～近世琉球期の集落遺跡であることを把握し、以後遺跡名称を「天底後原遺跡」へと変更を行った。

平成14年11月7日、今帰仁村教育委員会と北部土木事務所で「天底後原遺跡発掘調査に関する協定書」を締結し、これにより平成15年度に調査を実施し、平成16年度に資料整理を行うこととして協定を結んだ。しかし、実際には平成16年度には同事務所より依頼され継続調査していた古宇利大橋橋梁整備事業に伴う発掘調査を実施していた都合などから、天底後原遺跡の発掘調査を延滞して1年先延ばしとすることとなったため、平成16年度に「屋我地仲宗根線天底後原遺跡発掘調査業務委託」を受託し平成16年8月1日～平成17年2月28日まで現場における調査を実施した。

平成17年度は前年度に調査した資料の整理期間として「屋我地仲宗根線天底後原遺跡発掘調査業務委託」を受託した。平成17年5月27日～平成18年2月28日まで資料整理を行い、本報告書を刊行した。

2 調査経過

天底後原遺跡の発掘調査は平成16年8月11日に着手し平成17年2月28日をもって終了した。先ず調査に必要な現場事務所の設置、水道、電気などの引き込みを業者に依頼し行った。荒れ地となっていた調査区の草刈り作業などについては11月に調査補助員である与那嶺とともに行った。事前準備を完了した後に与那嶺重機に依頼、重機にて表土層除去を行った。11月29日から12月1日には調査予定地域について表土層の除去を完了することができた。その後除去後の地表面にグリッドを設定した。

先ず、掘削作業は除去しなかった表土層及び、過去に重機によって天地返しが行われた攪乱構を中心に人力によって除去した。Ⅰ-19では掘り下げてから数日経った12月8日にはⅡ層、Ⅲ層があらわれた。その一方で当初予定していたよりも攪乱が広い範囲に及んでいたⅠ-17では掘り下げに時間を要し、途中からバックホーを入れ更に掘り下げを行った。

全体的にⅠ層とⅡ層の除去を終えたのは12月いっぱいかかってしまった。遺構が検出された北側と南側では異なるものの、概ね1月から精査を行うことができた。最初に取りかかったのはⅡ層検出後の遺構で、10～40cmの大小様々なレキが集石する遺構である。近現代の遺物を多く含んでいることから、平板測量にてその範囲を明示し、速やかに遺構の完掘を行った。除去後その下層より土坑が検出された。

次に、褐色土層の下からはグスク時代の陶磁器等を含んだ黒色土を検出している。この黒色土層の上面においてもピットを確認することができた。検出面における遺構図を一端作成した。しかし、実際にはⅡ層（褐色土）とⅢ層（黒色土）のいずれの柱穴かの判断するのは困難で、遺構検出時に精査を行い資料整理においてⅢ層の遺構がⅡ層に判断されるケースも少なくない。なお、調査が進むにつれて平成14年度に行われた範囲確認調査地区外においても遺構が確認されるなど、事前の試掘調査では検出されなかったため調査区外とした地域である調査区北側（Ⅱ-17～20）においても遺構が分布する状況であった。事前確認調査の不足を露呈する結果となった。最終的に連番を付したピットの総数は約800を数えている。遺構をすべて精査し完掘するために、調査期間ぎりぎりまで時間を必要とした。もう一方で、発掘調査期間、特に2月の記録的な長雨により調査に遅れが生じたことも調査に時間を要した要因の一つである。特に本遺跡周辺の土は粘性が強く、水捌けが悪かったこともあり、再三水に悩まされることとなった。遺構の実測作業及び写真撮影を行い、最後に遺構検出面に保護砂を敷き詰め遺構の保護を行なった後、重機による埋め戻しを行い現場の作業を終了した。

資料整理は平成17年度に実施している。概ねの作業を11月までには完了することができたが、原稿の作成など印刷物にまとめるまで18年2月まで時間を要している。

3 調査組織

現場における発掘調査を平成16年度、出土品の資料整理及び報告書の刊行を平成17年度に実施した。発掘調査は下記の体制で実施した。

平成16年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会					
事業責任者	教育長	山城 清光				
	教育長代理	吉田 克己				
	社会教育課長	諸喜田展生				
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原 弘哲				
事務総括	文化財係長	當山 清巳				
	文化財係主事	玉城 寿				
調査担当者	文化財係専門員	宮城 弘樹	玉城 靖			
発掘調査アドバイザー		金武 正紀				
調査補助員	臨時職員	与那嶺 俊				
調査協力	松本 幡郎（元熊本大学教授）	新里 亮人（伊仙町教育委員会）				
	名島 弥生（慶應義塾大学大学院生）					
発掘作業員	臨時職員（五十音順）					
	新垣 正司	大城いち子	大城ヒデ子	嘉数美保子	新城 豊子	
	祖堅 弘子	玉城 京子	玉城留美子	田港 朝史	仲宗根 淳	
	仲宗根直美	仲田トミ子	平安兪美子	松本 貞子	宮里 初子	
	仲原シズエ	仲原美代子	具志堅 亮	小橋川 剛	仲村 毅	
資料整理	臨時職員（五十音順）					
	上間 恵子	玉城 静香	知念亜紀乃	西谷麻希子	仲里なぎさ	
	玉城 亜紀	与那嶺いずみ				

平成17年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

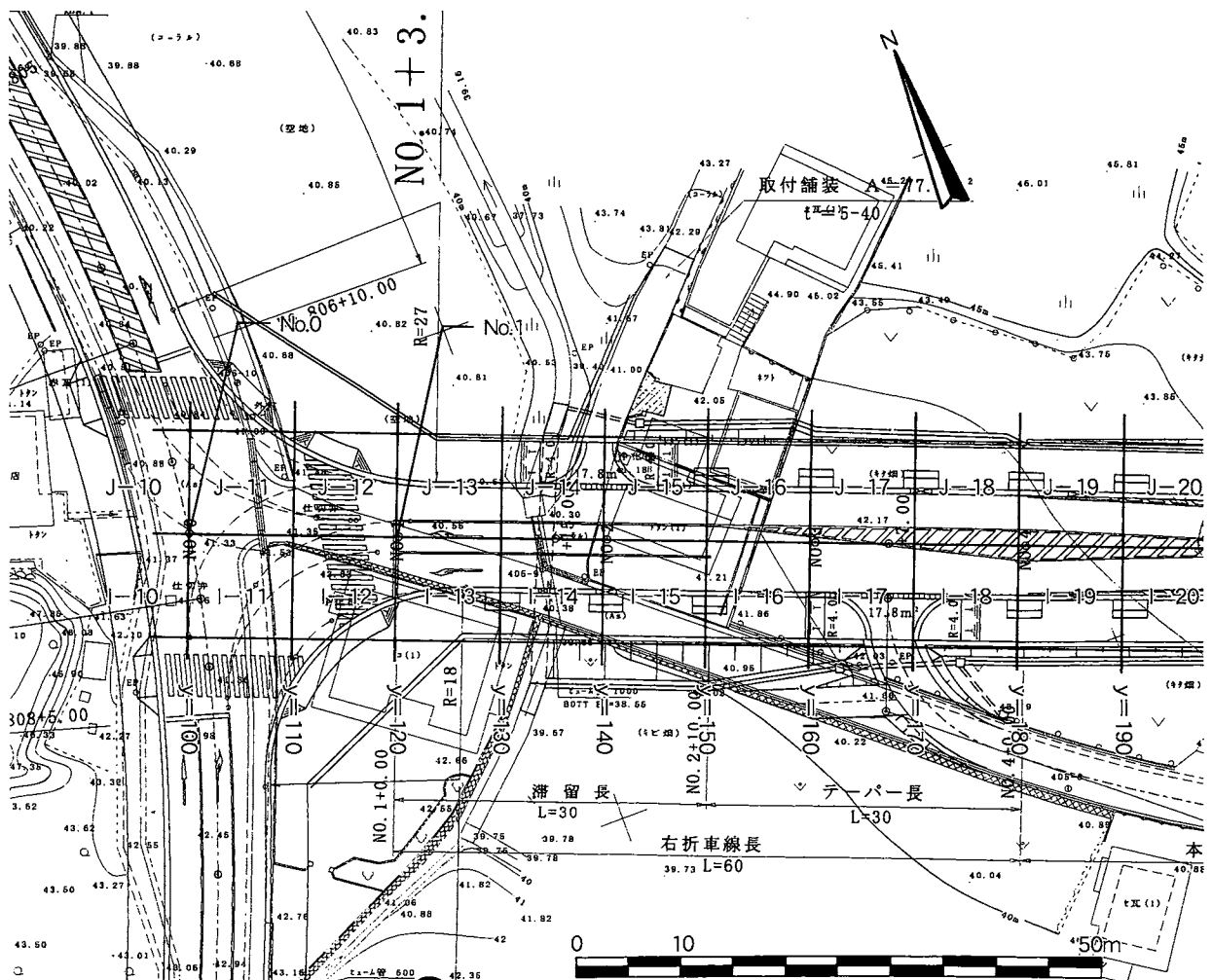
事業主体	今帰仁村教育委員会									
事業責任者	教育長					田港	朝茂			
	社会教育課長					諸喜田	展生			
	社会教育課長補佐					与那嶺	悟			
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長					仲原	弘哲			
事務総括	文化財係長					田港	朝津			
	文化財係主事					宮城	弘樹	玉城	寿	
調査担当者	文化財係専門員					玉城	靖			
発掘調査アドバイザー					金武	正紀				
調査補助員	臨時職員					与那嶺	俊			
調査協力	渡辺 芳郎（鹿児島大学助教授）				當山	清巳（村経済課）				
資料整理	臨時職員（五十音順）									
	上間 恵子	鈴木 美和	玉城 静香	松本 綾子	玉城 亜紀					

4 調査地区

天底後原遺跡発掘調査は、屋我地仲宗根線道路新設工事に伴い実施された緊急発掘調査である。調査は道路及び歩道を合わせた幅員20mを対象としている。このためグリッド設定にあたっては、道路のセンターライン（方向角 $111^{\circ} 05' 10.291''$ ）に合わせて行った。具体的には終点となるNo.0（ $X=74,190.045$ 、 $Y=47,870.443$ ）と道路センターのNo.1（ $X=74,182.850$ 、 $Y=47,889.093$ ）を基準線として調査区のセンターラインとした。その上で、本調査区の基準点を「J-10」として任意の座標値（ $x=100.00$ 、 $y=100.00$ ）を設定した。

(道路工事の座標) No. 0 = (調査時の座標) J - 10とNo. 1 = J - 12を直線で結んだラインを基線として、10m間隔で西から東へ11・12・13・・・、南から北へI・J・K・・・の数字、記号を用いた。各交点の杭はそれぞれ北西にある10m×10mの区画を指示している。

調査対象地区は試掘調査の成果などを鑑みて約400㎡を対象として、J-17～20、I-18～20のグリッドを調査地区に定め発掘調査を実施した。



第4図 天底後原遺跡調査地区設定図

第Ⅲ章

層 序

調査地点である天底後原遺跡は標高42mの微高地に立地する。遺跡の北側が高く、南側へと僅かに傾斜し低くなる。東側は迫地となり地元の方によれば、かつて川が流れていたとのことである。層序は平成14年度に行った試掘調査から概ね4つの堆積層に分層できることを確認していた。しかし調査を進めていく中、調査区東側で確認された暗褐色層（Ⅳ層）を追加し、最終的には地山まで含めⅠ～Ⅴ層の堆積層に分層を行った。

先ずⅠ層（表土層）は耕作土で、攪乱坑・覆土などもこれに含めた。遺跡は調査以前ではサトウキビや菊畑であったようで、所々に天地返しされたバックホーの爪痕が地山（Ⅴ層）まで至る状況であった。Ⅱ層・Ⅲ層が今回の主な調査対象の堆積層で前者が近世期に、後者がグスク時代に比定されると考えられる。但し、Ⅱ層については耕作されたためほとんど現況を保っておらず、Ⅰ層の耕作土の出土遺物を含めて大まかに近世～現代に比定される包含層として判断している。後述する遺構の検出においても上記の影響によって、Ⅱ層から掘り込んだ遺構か、Ⅲ層から掘り込んだ遺構のものかの判別も困難な状況であった。

地山はいわゆる国頭マージであるが、調査地区の北側では赤褐色土層の粘性のある堆積層で、調査地区南側では黄褐色を呈し調査地区内でも地山の様相は一様ではない。

以下調査地区の層序について箇条書きし所見をまとめる。

Ⅰ層－褐色混砂礫土層（10YR 4/6）。空きビン・ビニール等の現代遺物を含む表土層。耕作土、攪乱もこれに含めた。バックホーで除去。

Ⅱ層－褐色土層（7.5YR 4/4）。近現代の沖縄産陶器や本土産陶磁器の遺物を検出している。粘性は強い。

Ⅲ層－黒色土層（10YR 2/3）。中国産の陶磁器などの遺物を含んだグスク時代に位置づけられる層。微細な礫を多く含み粘性は強い。標高の高い調査区北側では薄く堆積し低い南側では厚く堆積する。

Ⅳ層－暗褐色土層（10YR 3/4）。Ⅲ層からⅤ層への漸移層。数cmの堆積となり調査区東側で確認されたのみである。遺物は確認されていない。

Ⅴ層－黄褐色土層（10YR 5/6）。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。

第Ⅳ章

遺 構

1 概 要

検出された遺構は柱穴が大多数でその分布は南側に集中している。但し、調査地区南側では多くの柱穴を確認することができたものの、北側と西側ではバックホーによって耕耘したと考えられる重機爪痕が多数確認されるなど、残存状況は決して良い状況ではなかった。攪乱を受けた地山は深く削り取られ、特に西側では大きな攪乱坑がある状態で実際にはこの部分にも遺構が分布していたと考えられる。このため建物跡の推定を行うための一つの障害となった。また検出された柱穴の中には削平を受けたと思われ、柱穴の深さが10cmに満たないものや、径が小さくなっているものも多く検出された。それでも、最終的には建物跡を2棟（要検討1棟含む）復元することができた。具体的には柱穴遺構の密度が低い北側に4本柱建物跡が1棟（SB01）、こちらは検討を要するが柱穴分布密度の高い中央側に母屋的建物を1棟（SB02）推定することができた。

土坑として確認できたのは1基（SK661）で、グスク時代に相当すると考えられる集石遺構（SX2）、さらに近現代の遺構として性格不詳の集石遺構（SX1）が検出されている。

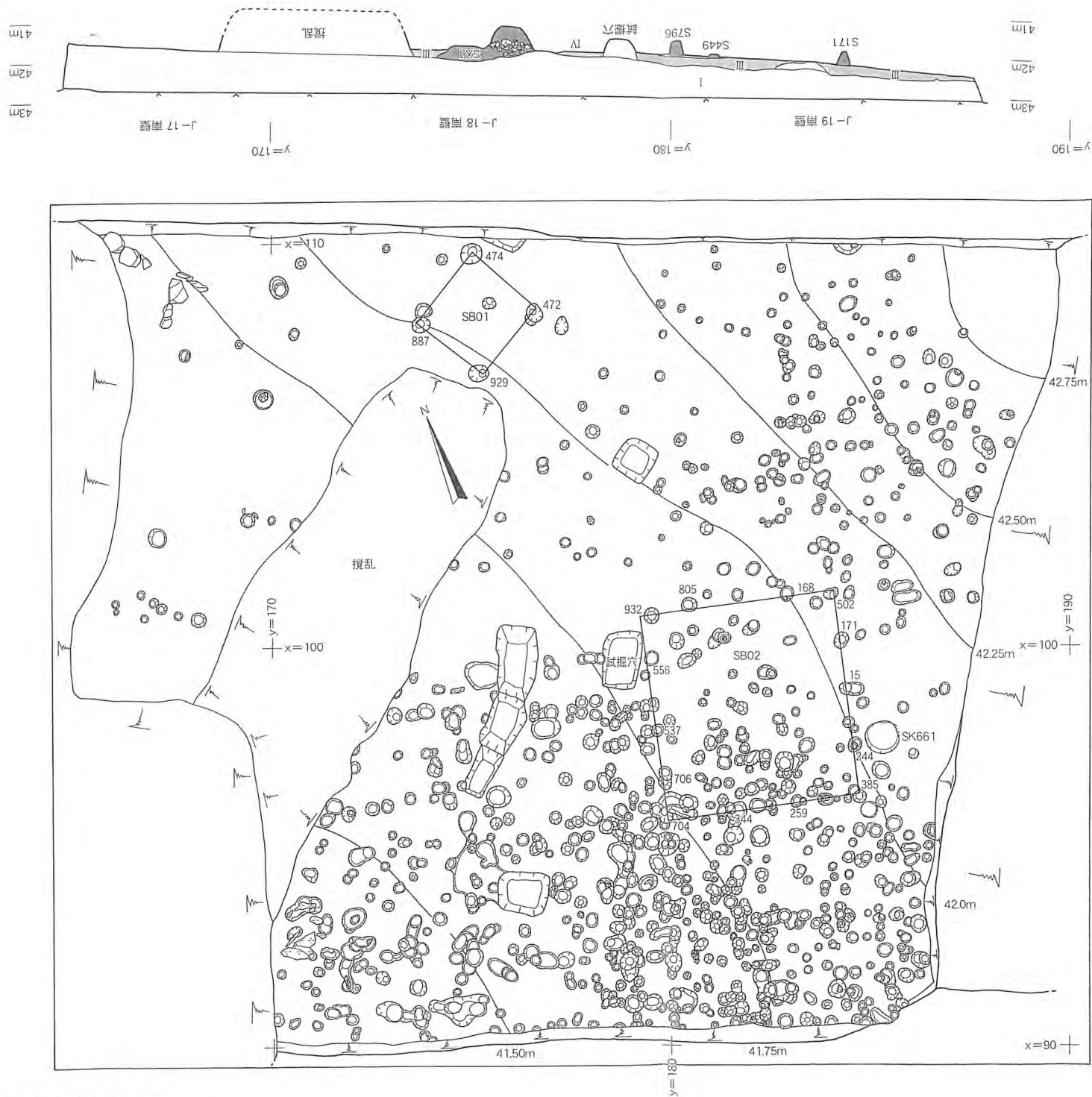
また、検出された柱穴807基（復元建物として使用した18基を含む）も、単純に解することはできない。理由は遺構が分布していた地域ではⅠ層を除去するとすぐにⅢ層が表れるため、Ⅱ層の分布が限定的で広がりを見せないことに起因する。このため本来Ⅱ層に伴うと考えられる柱穴と、Ⅲ層に伴う柱穴を区別し、Ⅱ層に伴う遺構をⅢ層の上面で確認できなかった。柱穴の多くはⅢ層を掘り下げた上で、Ⅳ・Ⅴ層の上面で確認していく結果となり、結果的に本来の調査目的であったグスク時代（Ⅲ層）の遺構と近世（Ⅱ層）の遺構を弁別することなく一括で報告する方法を採用している。実際には柱穴個々の堆積層や検出遺物から判別することも可能であるが、どちらとも区別できないものも少なくない。

ただし以下に紹介する遺構については詳細を検討し、遺構の帰属年代を遺物と検出状況から判断して詳述するように心がけた。

・遺構種別	遺構数
・掘立柱建物跡	2基 〔内訳：母屋1棟（※要検討） 高倉1棟〕
・土坑 1基	・グスク時代？の集石遺構 1基 ・近現代の集石遺構 1基

※上記遺構は下記の遺構によって構成される。

・柱穴 807基	・土坑 1基	・不明遺構 4基	・柱穴？ 4基
----------	--------	----------	---------



第5図 遺構平面図及びセクション図

2 SB01

〔名 称〕 SB01（掘立柱建物跡）

〔位 置〕 J-18

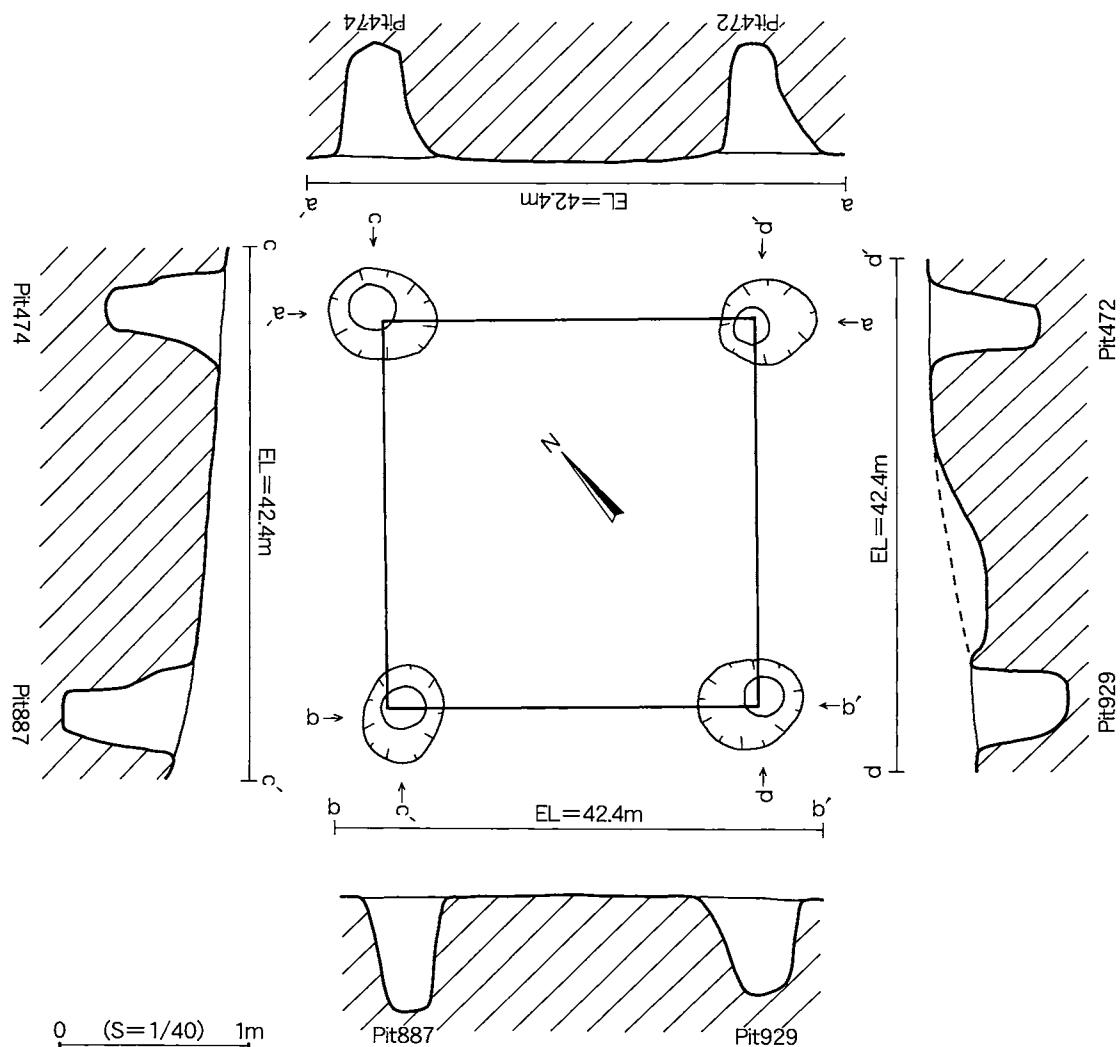
〔検 出 面〕 V層地山

〔遺構構成〕 柱穴4基

〔規 模〕 1間×1間（長軸204×短軸196cm）

〔所 見〕 Pit474・887・929・472で構成される掘立柱建物跡。柱穴の径は50cm～60cm程度となる。楔石は検出できなかった。Pit474・887でやや二段掘りの様に造られているが、全体として真っ直ぐに掘られている。Pit474・887・472はGLから約60cm掘りこまれているが、Pit929は前者に比して約50cmと浅く掘りこまれている。これは建物跡南側で攪乱が見られることから若干の削平を受けたことによると考えられる。覆土からの遺物は検出されていない。

〔遺構内堆積層〕 柱穴内の堆積層は暗褐色土にブロック状の赤土、褐色土、炭が僅かに混ざる。



第6図 遺構詳細図SB01

3 SK661

〔名 称〕SK661（土坑）

〔位 置〕J-19

〔検 出 面〕V層（地山）

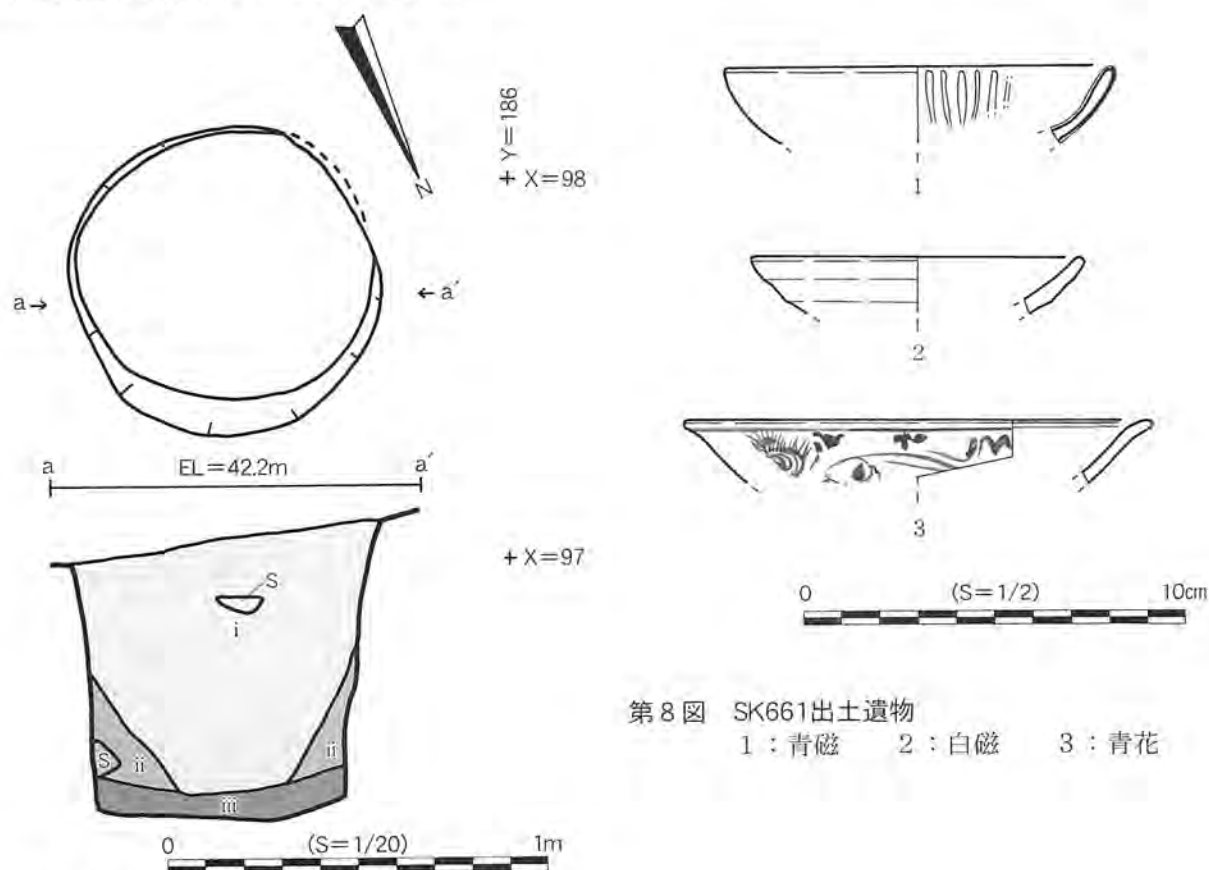
〔遺構構成〕土坑1基

〔規 模〕約80cmの円形、深さ約75cm

〔所 見〕SK661単独で構成される土坑で用途は不明である。規模は直径約80cmの円形の平面で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底面は平坦となる。覆土からは森田分類D群の白磁の小皿、篋描きの蓮弁を内面に廻らす青磁蓮弁直口皿が出土している。

〔遺構内覆土層〕土坑内の堆積層は i 層：暗褐色土にブロック状の明褐色土が僅かに混入、ii 層：暗褐色土にブロック状の明褐色土が僅かに混入（全体的に赤色に変色）、iii 層：黒褐色土でブロック状の明褐色土・褐色土・炭が僅かに混入（i・ii 層に比べて軟らかい）。

〔遺 物〕第8図1は青磁蓮弁直口皿で篋描きの蓮弁を内面に廻らす。2は白磁の小皿。森田分類D群に相当する。3は明代青花の外反皿で、外面には界線を2本、胴部には宝相華唐草文、内面は口縁部に界線を2本施す。同様の遺物が今帰仁城跡でも出土しており、見込みに玉取獅子文を施すタイプの皿である。



第8図 SK661出土遺物
1：青磁 2：白磁 3：青花

第7図 遺構詳細図 SK661

4 S B O 2

〔名 称〕 SB02（要検討・掘立柱建物跡） 〔位 置〕 I－18・I－19・J－18・J－19

〔検 出 面〕 V層地山

〔遺構構成〕 柱穴14基

〔規 模〕 4間×3間（長軸約502cm×短軸約474cm）

〔所 見〕 遺構について検出時及び完掘後に検討を試みた。本遺構は現場で検出時には判然としなかった。しかし完掘後に検討した結果、Pit932・805・168・502・171・15・244・385・259・344・714・706・537・556で構成される掘立柱建物跡を想定することができた。要検討の建物跡として報告する。柱穴の直径は約30cm～40cm程度となる。深いものでPit502の57cm、浅いものでPit556の18cmを測った。柱痕を確認できたものはなかったが、調査時に検出できなかった可能性も考慮する。柱穴の覆土は概して暗褐色で、炭が少量混ざるとともに赤土や明褐色土が微量に含まれている。

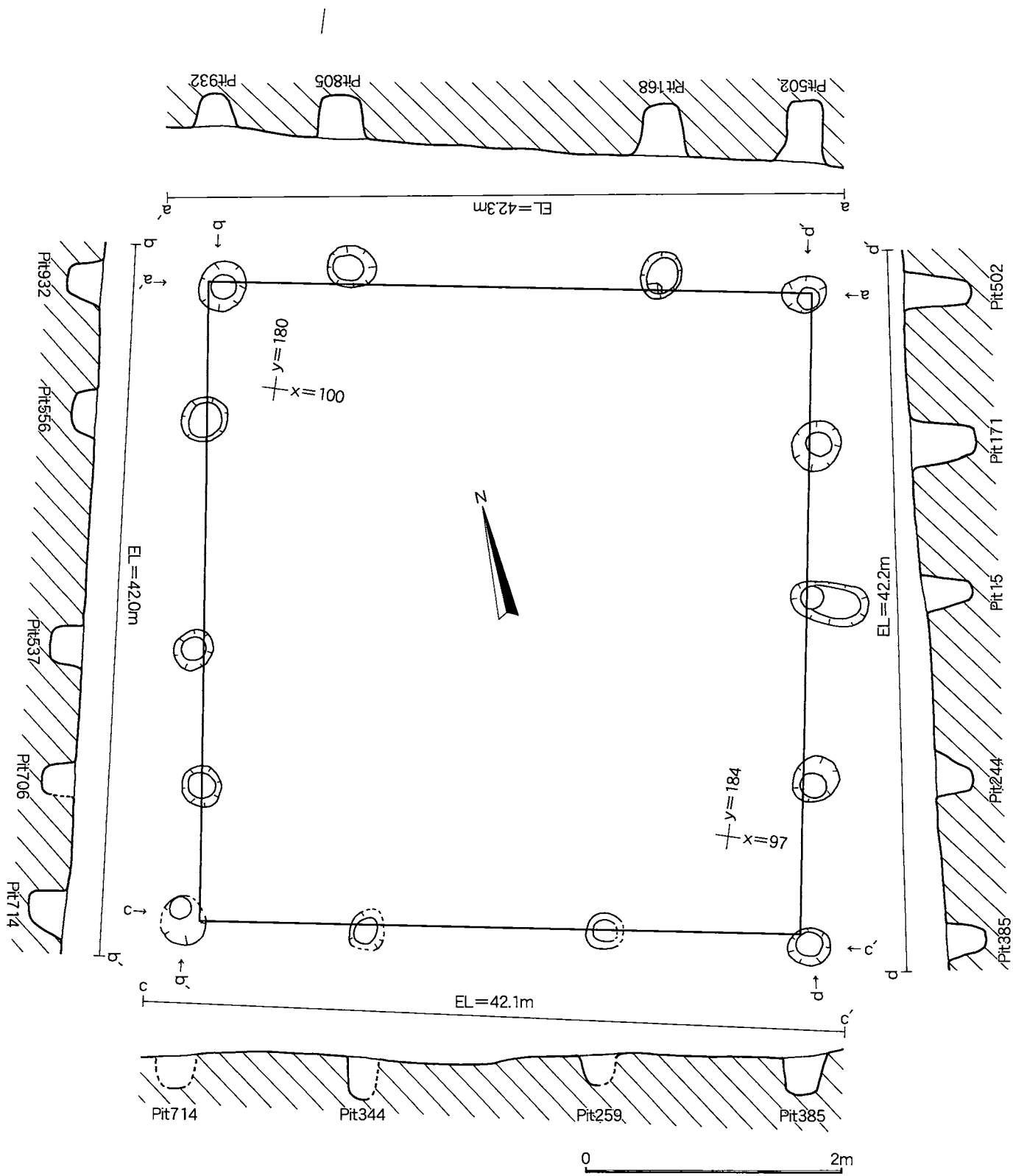
本調査区では数多くの柱穴を検出している。しかし検出時にはほとんどの建物跡を現場で組むことができなかった。検討を重ねた結果、唯一建物跡として復元できる可能性のある本遺構を要検討として断りながらも報告することをご了承頂きたい。

〔遺 物〕 遺物はPit15で青磁雷文帯碗、青花碗の口縁部小破片を各1点、Pit502で青磁口縁部小破片1点、Pit537で青磁無鎬蓮弁文碗胴部破片が1点得られている。小片のため図示していない。

〔遺構所見詳細〕 柱穴は検出時と完掘時に所見をまとめたものである。下記の通り報告する。

Pit	グリッド	埋土の観察	柱痕	遺物	楔石	計測値				
						長軸 (cm)	短軸 (cm)	GL (m)	底面 (m)	深さ (cm)
932	J－18	暗褐色。褐色土少量、赤土・炭が微量混ざる。（詳細不明）	？	なし	なし	40	36	41.75	－	－
805	J－19	暗褐色。褐色土少量、赤土・炭が微量混ざる。	なし	なし	なし	38	33	41.86	41.48	38
168	J－19	暗褐色。赤土多く混ざる。炭少量、褐色土微量混ざる。	なし	なし	なし	38	32	42.02	41.60	42
502	J－19	暗褐色。褐色土・赤土・炭が微量混ざる。	なし	有り	なし	35	28	42.11	41.54	57
171	J－19	暗褐色。赤土多く混ざる。炭少量、褐色土微量混ざる。	なし	なし	なし	41	36	42.11	41.55	56
15	I－19	暗褐色。褐色土・炭少量、赤土微量混ざる。（抜き取り痕有り？）	有り	有り	なし	61	31	42.03	41.61	42
244	I－19	暗褐色。炭少量、褐色土・赤土微量混ざる。	なし	なし	なし	38	34	41.95	41.64	31
385	I－19	暗褐色。褐色土・赤土・炭が微量混ざる。	なし	なし	なし	34	31	41.91	41.57	34
259	I－19	暗褐色。褐色土・炭少量、赤土微量混ざる。	なし	なし	なし	28	28	41.79	41.59	20
344	I－19	暗褐色。褐色土多く混ざる。赤土少量、炭微量混ざる。	なし	なし	なし	32	27	41.75	41.29	46
714	I－18	暗褐色。褐色土・赤土・炭が微量混ざる。	なし	なし	なし	39	35	41.74	41.43	31
706	I－18	暗褐色。褐色土少量、赤土・炭が微量混ざる。	有り	なし	なし	33	30	41.76	41.48	28
537	I－18	暗褐色。褐色土少量、赤土・炭が微量混ざる。	なし	有り	なし	32	30	41.76	41.44	32
556	I－18	暗褐色。褐色土少量、赤土・炭が微量混ざる。	なし	なし	なし	38	35	41.74	41.56	18

第2表 SB02柱穴観察表



第9図 遺構詳細図 SB02

5 SX1

〔名 称〕 SX1（不明遺構） 〔位 置〕 I-18・J-18

〔検 出 面〕 I層下部 〔遺構構成〕 SX1（集石遺構除去後、5基の土坑を検出）

〔規 模〕 長さ約10m、幅約1～2.5m

〔所 見〕 SX1単独で構成される用途不明の集石遺構。被覆はそれほどでもないが、約10～40cm 大小様々な礫が散布しており、大半は人頭大の大きさとなる。遺物も礫と同じく散在している。撤去後、その下からは長軸約150cm、短軸約100cm、深さ約60～70cmの土坑を5基検出した。土坑内からは上面の集石遺構と同様の礫や遺物がそれぞれ多量に含まれており、一連の遺構と考えられる。

〔遺構内堆積層〕 集石内及び土坑内覆土は褐色（7.5YR 4/4）で人頭大の礫を多量に含む。



第10図 SX1・SX2遺構図

〔遺物〕グスク時代の遺物はほとんど検出されず、大半を近世～現代の遺物で占める。以下、種別毎に特徴を述べる。

①白磁（第11図－1）

11－1は粗製の白磁碗底部資料。管見に及ぶ範囲で近似する資料として、今帰仁分類の内底無釉碗bを想定するが、高台の造りなどに相違点がある。高台はやや高く造り高台内も施釉する。素地は黄褐色で焼の悪い灰白色の釉を薄く施釉、見込みは蛇の目釉剥ぎ露胎とする。

②青花（第11図－2・3）

11－2は清朝期の青花小碗で、3は碗の資料である。いわゆる福建・広東系の製品と考えられる。年代的には、前者資料の類品が多良間島沖で難船したファンボッセ号（1857）の関連資料に見られる（宮城ほか2004）。また後者の類品としてマラッカ海峡の沈船DIANA号（1817）・インドネシア沖のTEK SING号（1822？）などで出土する。両者は概ね19世紀前半～中頃に流通する中国産の日用雑器と考えられる（野上2001）。他に3の類品で長崎万才町遺跡SK177から同様の清朝青花が出土している。このSK177は19世紀第3四半期段階に当てはめることができるとされる（堀内1999）。

③タイ産陶磁（第11図－4）

11－4は褐釉陶器で素地や釉調等の特徴からタイ産の陶磁器と考えられる。口縁部を欠くが、大型の壺で肩部に貼り付けの耳が付される。

④沖縄産施釉陶器（第12図、第13図1～8）

第12図は施釉陶器の碗・小碗・杯の資料で施釉の方法・器形にバリエーションが認められる。1・3・6～8は灰釉碗。1は底部から直線的に立ち上がる資料で、鉄絵による絵付けが施されるがモチーフは不明。3はやや丸みを帯びた体部から直線的に立ち上がり、口縁部は欠損。7・8は底部資料で見込みと外面腰部以下を露胎とする。2・4・5は白化粧後透明釉を施釉する碗で、2は巴文を体部に描く。4・5は無文、体部にやや丸みをもち口縁部は外反して成形される。9～12は底部資料で、いずれも見込みは蛇の目釉剥ぎとしている。

13・14は白化粧後透明釉を施釉する無文小碗資料で、13は底部から口縁部まで復元することのできる資料である。15～17は角杯資料で、15・16は白化粧後透明釉を施釉するいずれも底部から胴部までの資料である。

13－1は白化粧後透明釉を外面に施釉する。筒型の火取で底部から直角に立ち上がり、底部裏面に墨書で、「天底口 仲宗根口 四月」と記されている。墨書資料の出土例は古墓以外では希有な例である。2は注口のついた酒器でいわゆる「カラカラ」と呼ばれる。扁平な器形で口縁部を欠損するが、ソロバンの玉形状に膨らんだ外面胴部に線彫りで区画する。3は水注（要検討）の底部資料である。底部の一角に脚を取り付けた資料で三脚のうち一脚を破損する。4・6は大型の鉢でいわゆる「ワンプー」と呼称される器である。見込みを輪状に釉剥ぎし、口縁部はL字に折り曲げ水平にする。6は内面を白化粧後透明釉、外面を黒釉で掛け分ける。5は水注の胴上半で白化粧をおこなった後に呉須による絵付けが行われている。7は内外面に黒褐色の釉を施釉する鉢で、見込みを輪状に釉剥ぎする。また、口縁部上面も釉剥ぎし露胎とする。8は四耳壺でいわゆる「油甕（アンダガミー）」と呼ばれる器である。

外面に黒釉を厚く施釉、口縁部上面は釉剥ぎし露胎とする。内面には明瞭な轆轤痕を観察することができる。

⑤陶質土器（第13図－10・11）

13－10は、アカムヌーの甕口縁部資料と考えられる。11はアカムヌー急須などに付される耳の破片で、外側から孔を穿つ。

⑥沖縄産無釉陶器（第13図－9、第14図）

13－9は荒焼の壺で口縁部を逆L字状に折り曲げ頸部の立ち上がりが直線的となる。14－1は壺の底部から胴部にかけての資料。2は甕もしくは壺の底部と思われる。底部から胴部にかけて外開きに直線的に立ち上がる。3は肩部に耳を貼り付ける壺口縁部資料で、口縁部が玉縁状に肥厚する。4～10は擂鉢である。7～9は口縁部が残る資料で、共通して逆L字状に外に折り曲げ内面は櫛目を密に施し口縁部直下の櫛目はナデ消される。7は口縁部の幅が広く、上面に一条凹線が廻り外面の器面調整を丁寧に施す。8・9は胴部から直線的に立ち上がり、口縁部の幅は狭く胴部上端に一条稜が廻る。

⑦本土産陶磁器（第15図）

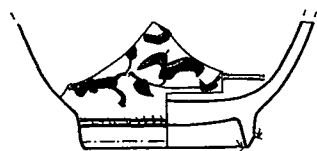
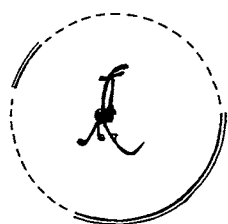
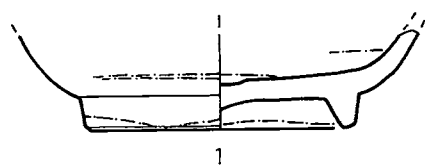
15－1～3は肥前磁器と思われる碗類。1は厚手の丸碗で外面に圈線と花卉を描く。2は小破片であるが素地・釉調から肥前とした。3は19世紀中頃に流通した肥前端反碗で、線描きのみで文様を表現する。4はクロム青磁の小碗で外面にはトビガンナによる文様を施す。5～7は底部から口縁部にかけてストレートに開く杯で、5はクロム青磁の杯、轆轤痕を明瞭に残す。6は高台内側を若干削り、その外側に波状文、さらに外底には「の」と銘を残す。もともと見込みには絵付けが残されていたが剥落している。7は内外面白色で高台をハの字に成形する。8・9は銅板転写によって絵付けがなされた磁器で、8は梅樹、笹、鞠、9は外面に牡丹を配する。10は一般的に「スンカンマカイ」と呼ばれる型紙摺りの碗で、口縁部は外反し外面に鶴丸文・竹文・点文を施文する。口縁部内側には花文・竹文・点文を帯状に廻らす。見込みには圈線・草花文を施し、また、重ね焼きの痕跡が認められる。11も同様に型紙摺りの皿で、口唇部に濃緑色の釉、内面に人馬・松・山等、外面に不明文様を配する。

⑧石器（第16図－1・2）

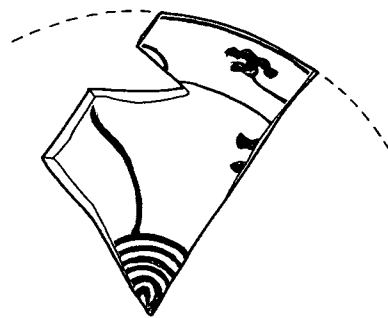
16－1は表面において滑らかな磨面を有し僅かに凹面をなす砥石。他に明瞭な使用痕は認められない。2は正面全体及び右側面が研磨されていることや緩やかに凹面を有することから同じく砥石としての用途が考えられる。

⑨銭貨（第16図－3）

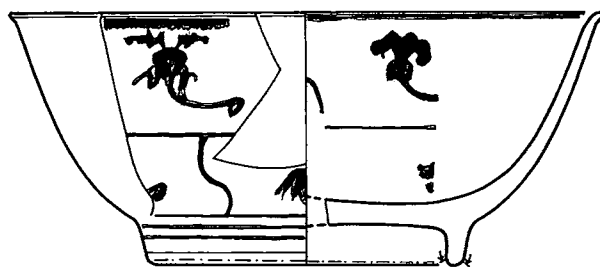
16－3は寛永通寶。一部左上端を欠損するが、文字が鮮明で判別可能である。



2

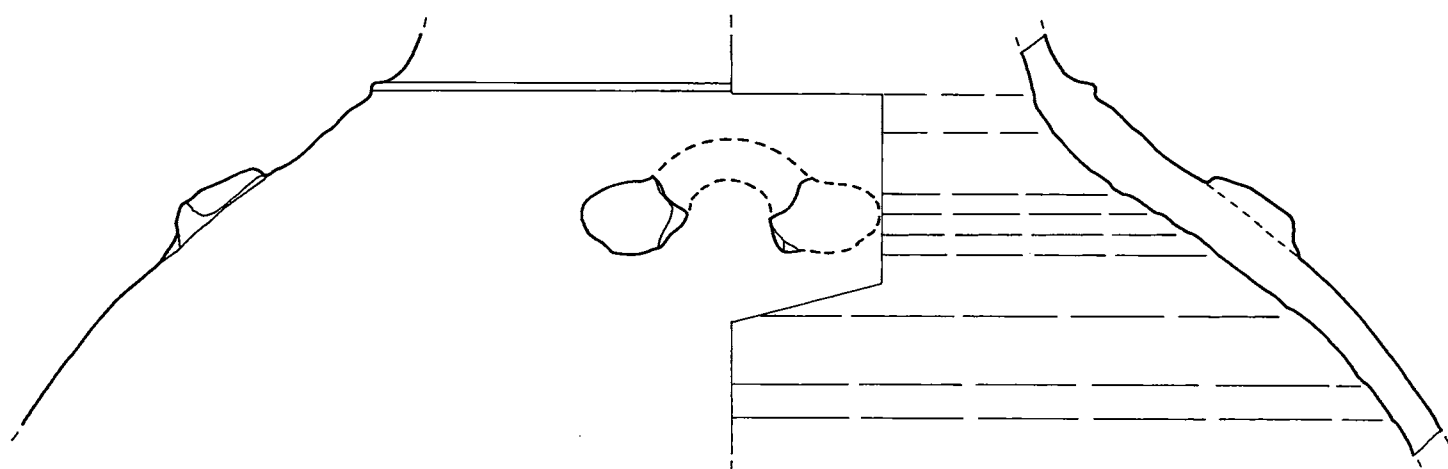


1



3

3



4

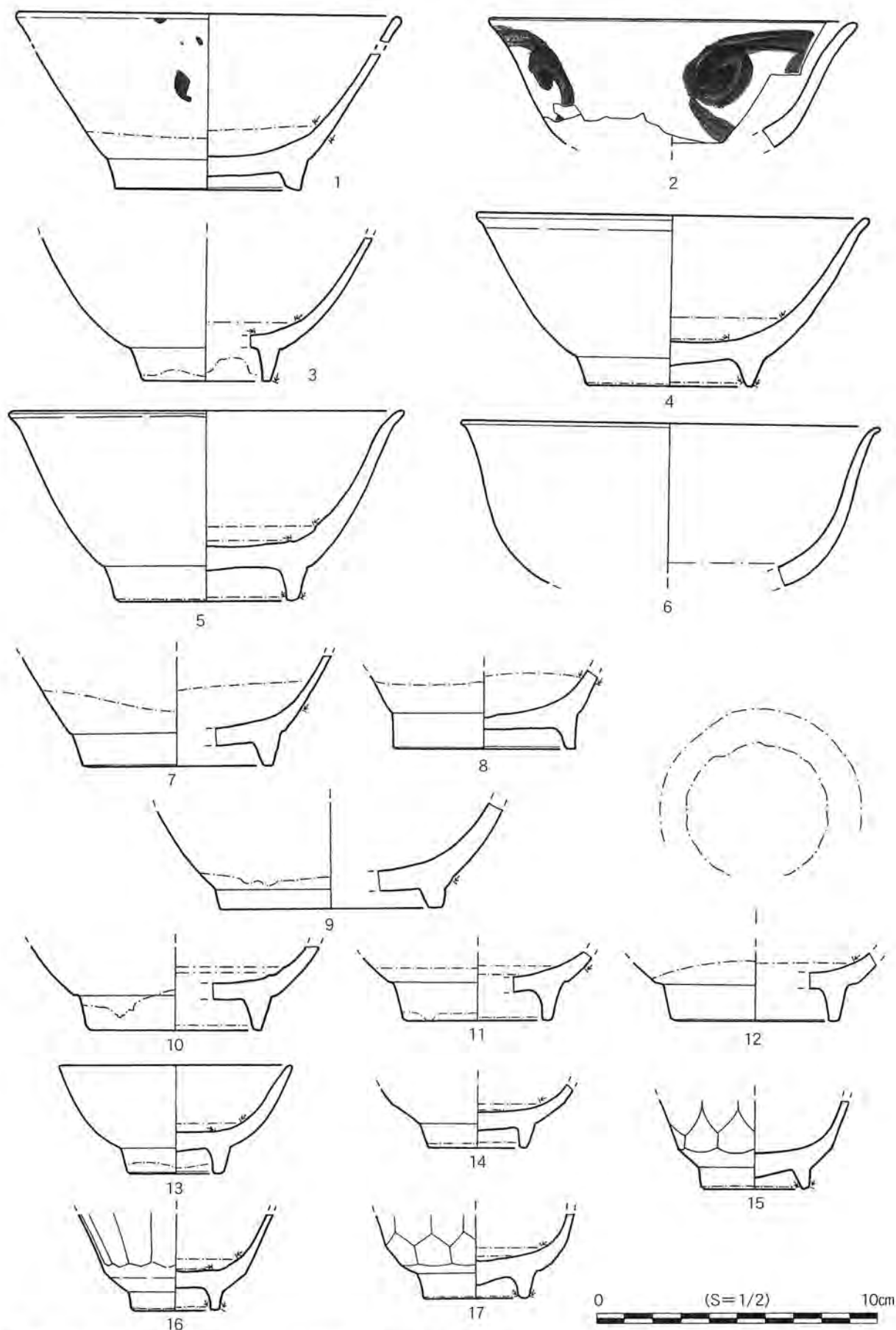
0 (S=1/2) 10cm

第11図 SX1出土遺物 (1)

1 : 白磁

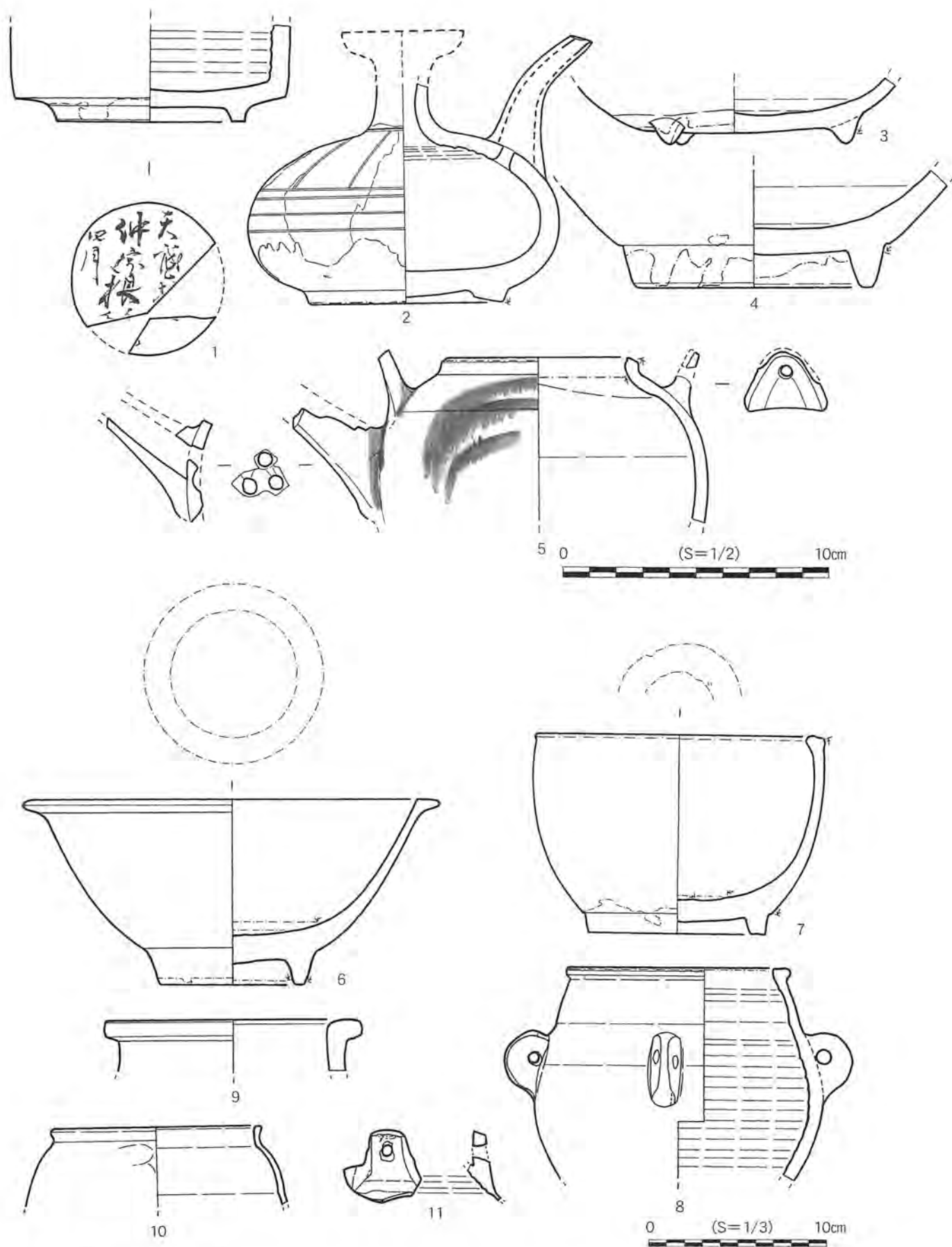
2・3 : 青花

4 : タイ産陶磁



第12図 SX1出土遺物 (2)

1～17：沖縄産施釉陶器

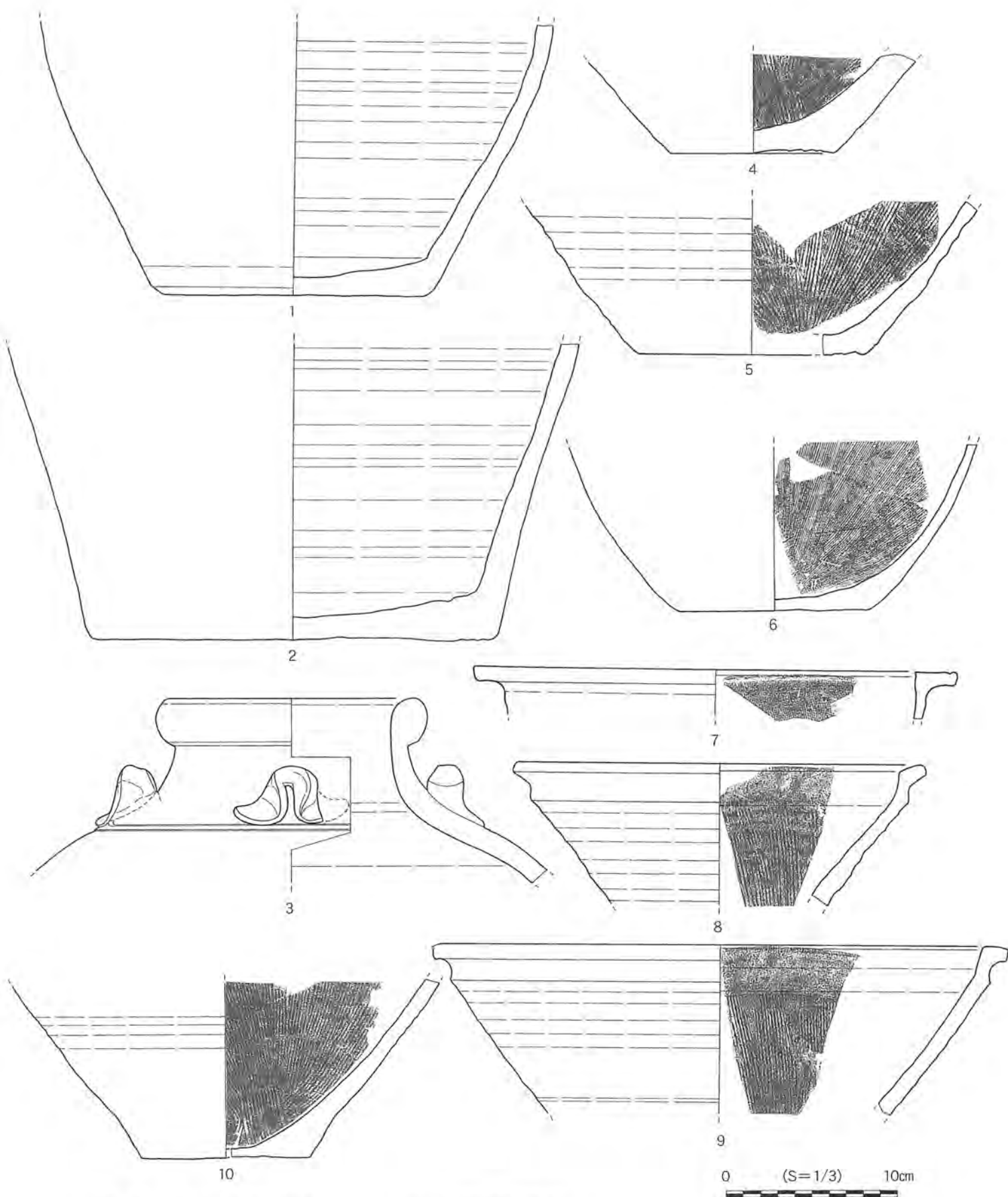


第13図 SX1出土遺物 (3)

1～8：沖縄産施釉陶器

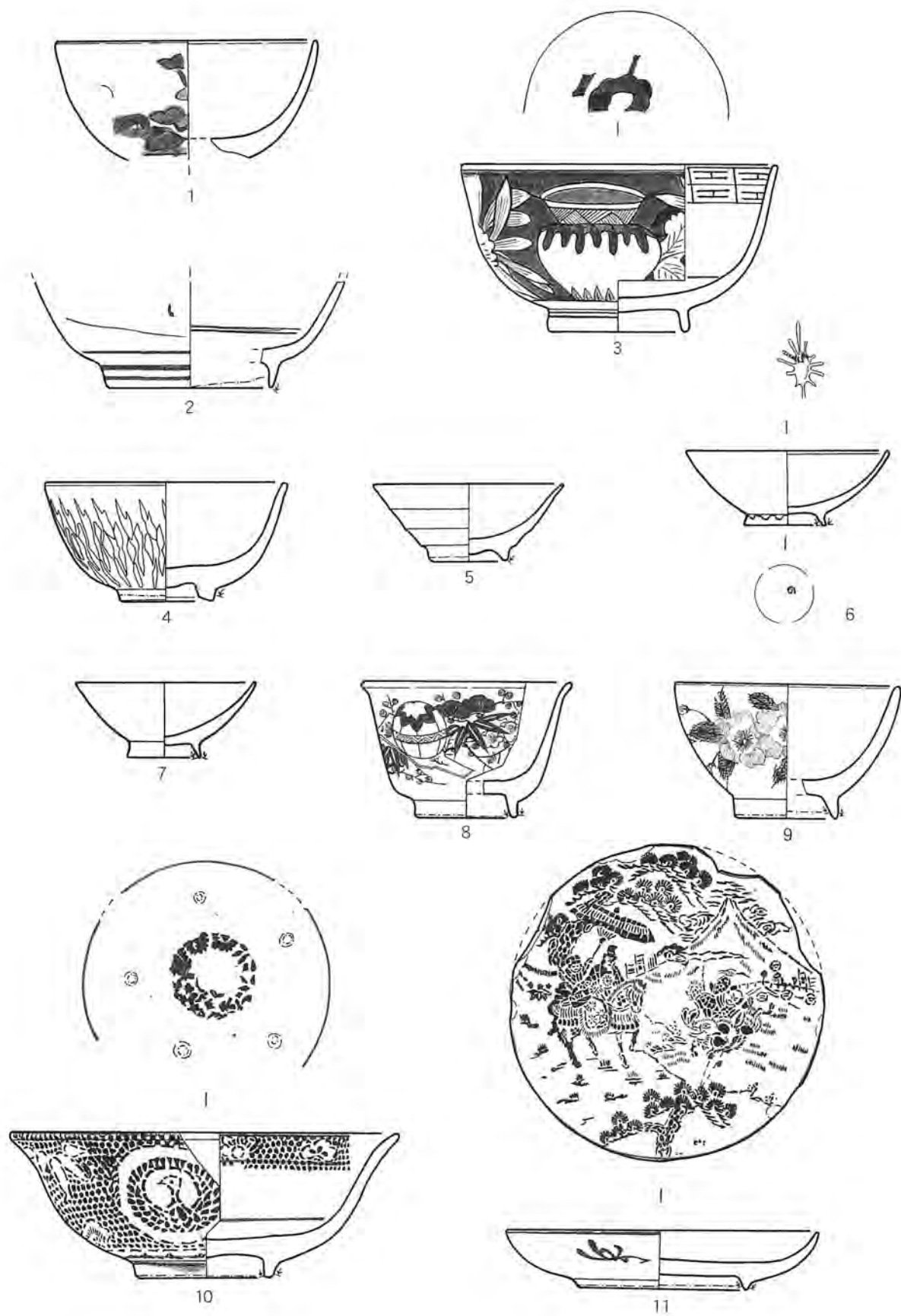
9：沖縄産無釉陶器

10・11：陶質土器



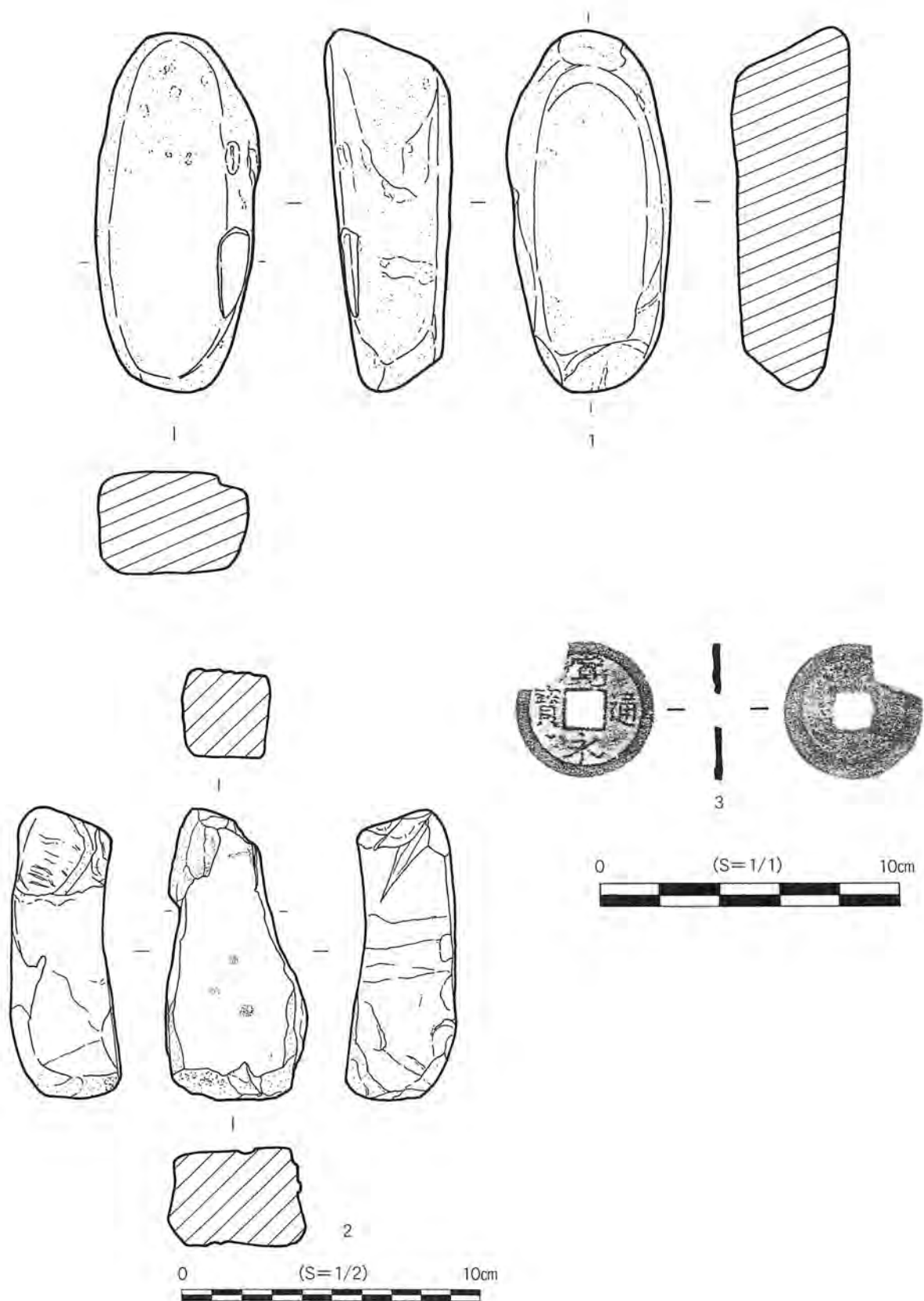
第14図 SX1出土遺物 (4)

1 ~ 10 : 沖縄産無釉陶器



第15図 SX1出土遺物 (5)

1～11：本土産陶磁器



第16図 SX1出土遺物 (6) 1・2：石器 3：錢貨

6 SX2

〔名 称〕 SX2 (不明遺構) 〔位 置〕 I-18

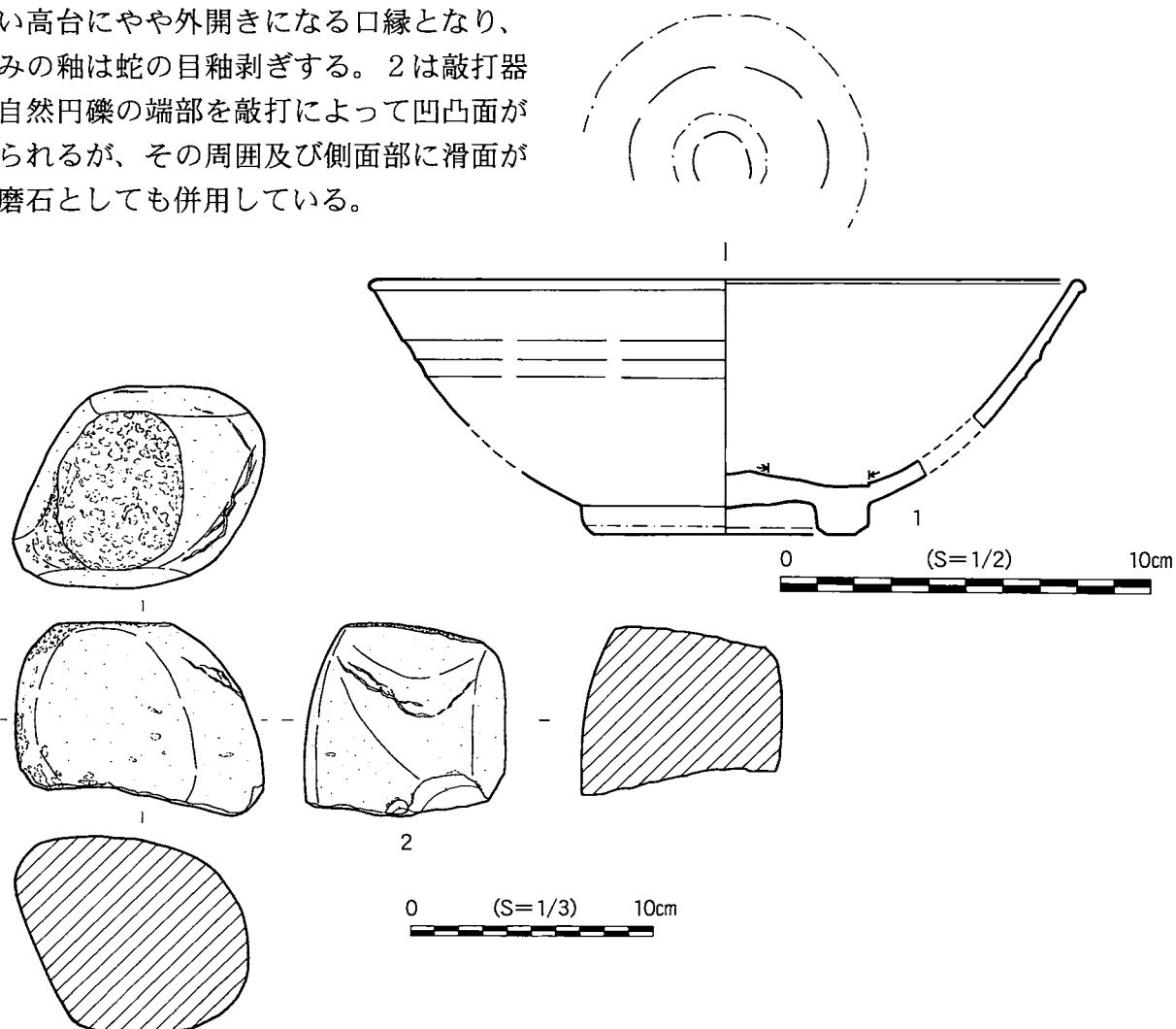
〔検 出 面〕 III層上面 〔遺構構成〕 SX2 (集石遺構)

〔規 模〕 長軸約4m、短軸約3m

〔所 見〕 用途不明の集石遺構。被覆は5～10cm程度の堆積で、SX1と同様に約10～40cm 大小様々な礫が散布しているが、大半は拳大の大きさとなる。遺物も礫と同じように散在している。SX1と隣り合っているが、遺構堆積層が褐色土と黒褐色土とそれぞれ異なり、出土遺物もグスク時代に限られた。

〔遺構内堆積層〕 集石内は黒褐色 (10YR 2/3)。

〔遺 物〕 17-1は青磁無文直口碗で、主郭で分類した白磁内底無釉碗dに酷似する。底径の広い高台にやや外開きになる口縁となり、見込みの釉は蛇の目釉剥ぎする。2は敲打器で、自然円礫の端部を敲打によって凹凸面が認められるが、その周囲及び側面部に滑面があり磨石としても併用している。



第17図 SX2出土遺物

1 : 青磁

2 : 石器

第V章

遺 物

1 概要

本章では前章までに報告した遺構内出土遺物以外の遺物について報告する。

天底後原遺跡で出土する人工遺物のほとんどが陶磁器である。主に15世紀中頃から16世紀頃に比定される中国陶磁と、それ以降の時代の沖縄産陶器が多く含まれている。本調査においてⅠ層～Ⅲ層までの遺物包含層を検出したが、重機等によって攪乱された箇所が多々あり良好な堆積状況とは言い難い。それでも比較的残りの良かったⅢ層及びグスク時代・近世琉球と思われる遺構内出土遺物と、Ⅱ層、Ⅰ層のそれぞれの包蔵物を整理し、細説を設け各層序毎に報告する。内訳は第3表に示すとおりである。

		Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			SX 1			SX 2			柱穴等			合計	
		口	底	他	口	底	他	口	底	他	口	底	他	口	底	他	口	底	他		
陶磁器	在地	土器	1					1												3	
		カムイヤキ								1										1	
		鍋等	215	106		16	13					18	35					4	3	410	
		碗		9									2							11	
		小碗	1	3		1							1							6	
		角杯	2	1																3	
		皿	2	1								1	3							7	
		鉢	4																	4	
		水鉢	14	5								2								21	
		鉢又は鍋	14	2															3	19	
		火取又は香炉		1								1	5							7	
		壺		36		1	2					2						1	2	44	
		瓶			8			2												10	
		蓋												2						2	
		カラカラ																		1	
		急須	4									1								4	
		湯飲み?																		3	
		搦鉢	20	3		3						4	9							39	
		壺	3	26		1	3					10	1						1	45	
		瓶	9			1														10	
		鉢	6			2														8	
		火取	2																	2	
		香炉	2																	2	
		蓋			5			1												6	
		壺	6			1						1								8	
		鍋	5									5							1	11	
		急須			1			1						1						3	
		器種不明	6			1						1								8	
		中国	白磁	3	3					1	1			1							9
	碗		5	8		4	1			3		1	1					5		28	
	皿		6																	6	
	器種不明		99	16		30	2		40	7		3			1	1		42	8	249	
	碗			1						1								1		3	
	杯		19	4		3	1		9	2								8	1	47	
	皿		1			1			3									1		6	
	燈			2					1											3	
	鉢		9						3											12	
	器種不明		6	2		2			2	1								4		17	
	碗		8			6			3			1						9		27	
	皿		5			3			1	1									1	11	
	小杯				3															3	
	瓶				1															1	
	蓋		33			6			1									2		42	
	器種不明		12	6		1	2							3				3		27	
	碗			2										1						3	
	清朝青花																			4	
	褐釉陶器		2	2																4	
	ベトナム タイ		緑釉																		1
		水注																		1	
		白磁			2															2	
		碗	2						1											3	
		褐釉		1							2	1								4	
		碗																1		1	
		皿		1																1	
		鉢																		1	
		瓶				1														1	
		鉢																		1	
		内野山																		1	
		唐津		1																1	
		鉢		1																1	
		肥前陶器?																		1	
		壺																		1	
		急須蓋																		1	
		関西系																		1	
		京焼	1																	1	
		薩摩?	1																	1	
		小碗	2											1						3	
		日本	クロム青磁											1							1
			杯											1							1
			碗		1																1
			産地不明	26	8		3	1				2	1								41
			小碗					1													1
			皿	11	4							4	1							20	
			杯	1	1							2								4	
			銅板転写	11	3			1				1								16	
			碗																	2	
	型紙摺り		1								1								2		
皿	1																2				
産地不明			1															2			
褐釉陶器																		2			
壺	1																	2			
陶磁器合計			581	260	22	88	28	4	66	17	1	63	67	3	1	1	0	82	20	1	1305
玉類	小玉				1				2									6		9	
	砥石	5				1			1			2						2		11	
	磨石								1						1					2	
石器	磨石								1											1	
	磨石								1											1	
金属製品	不明鉄製品	4							2									1		7	
	寛永通寶								1			1								2	
銭貨	不明	1																2		3	
	不明																			2	
陶磁器以外合計			10			2			8			3			1			11		35	

第3表 出土遺物集計表

2 III層及び遺構内出土遺物

第III層及び遺構内からは土器（壺）、徳之島産カムイヤキ（壺？）、青磁（碗・皿・杯・盤・鉢）、白磁（皿）、青花（碗・皿・小杯）、褐釉陶器（擂鉢）、タイ産褐釉陶器（壺）、石器、玉・銭貨、ジーファー等が出土している。柱穴遺構の覆土は主に暗褐色のグスク時代に相当すると考えられる遺構、ほかに褐色の覆土の柱穴遺構が確認されている。後者の遺構からは沖縄産の陶磁器、本土産の陶磁器等が得られており、本項ではこれも含めて報告する。

①土器（第18図－1）

18－1はグスク土器壺の口縁部で、粘板岩を混和材とする今帰仁城跡でも比較的によく見られる短頸で直口するタイプの土器である。内外面ともに指頭圧痕、ナデ調整を施す。

②カムイヤキ（第18図－2）

18－2はカムイヤキの胴部資料。破片のため器種は不明。内外面ともにタタキの後、横方向のナデ調整を施す。

③白磁（第18図－3～5）

3・4は森田分類E群に属する薄手の外反皿の資料で、高台の作りは逆三角形、白色堅緻の磁胎に淡灰白色の釉を畳付以外全面施釉する。18－5は淡灰白色の釉を全面施釉する口禿皿の底部資料。

④青磁（第18図－6～17、第19図、第20図、第21図1～8）

18－6は無鎬蓮弁文碗の口縁部資料。7・8はスタンプによる雷文を口縁部に施す資料。9～11は篋彫りによって雷文を施す資料で11の外面上段には篋彫りによる蓮弁、内面には刻花文を施す。12～14は篋彫りが雑になり、外面及び内面に花文、もしくはラマ式蓮弁文等を施したと推定される資料である。18－15～17、19－1～11は細蓮弁文碗。19－5・7は篋描きによる幅の狭い蓮弁を配し、それ以外はやや幅の広い蓮弁を配す。18－16・17は弁先も雑で弁尻も高台脇まで伸びずに粗造の印象が強い。19－4は釉も剥げ落ち粗造となる。19－12～14は無文外反碗の口縁部資料である。13は玉縁状口縁となる。15～18は無文直口碗資料である。15は口縁部外面には圈線を1条配する。20－1～5は青磁碗底部資料である。2は形態等から蓮弁が高台際まで及ばない細蓮弁文碗の底部と思われる。5は見込みに花文が押印される。6～10、21－1～3は青磁皿。20－6は口折れ皿で内底には双魚文のスタンプ、外面に蓮弁文を施す。7～10は腰折れ皿で7～9は口縁を刻み稜花とする資料。21－1は直口皿で内面に蓮弁を配す。4・5は青磁杯。4は内面に蓮弁文を配し外反する。6・7は青磁盤で、6は口折れの盤で口縁を刻み稜花とし、内面に篋描きの刻花文を施す。7は鐙縁となる。8は青磁鉢で大振りの資料で口縁部の内外面に1条圈線を施し、篋描きの刻花文を施す。

⑤タイ産陶磁（第21図－9）

21－9は褐釉陶器で素地や釉調からタイ産の陶磁器と考えられる。ノイ川窯系の大型の壺で、口縁部は大きく丸く肥厚し口縁上位に凹帯が廻る。

⑥褐釉陶器（第21図－10）

21－10は中国産の擂鉢。底部の造りが特徴的な資料。播り目は10本一組の櫛目となり底面より播り上げる形となる。輪積み痕が顕著に残っており、同様の資料が天界寺等で出土している（島・ほか2000）。

⑦青花（第22図、第23図－1～3）

22－1は外体面に豹皮文を施すいわゆる小野分類C群の碗胴部（小野1982）。2は外反した口縁部の外面に界線を1本、その下に鳥文？と草文、内底には草花文と圏線を2本施す。森分類のB₃類に似た碗である（森1995）。3・4は直口口縁の外面に波濤文と内面に界線を施す小野分類D群に相当する碗と思われる。6～8は外面もしくは内面に宝相華唐草文、内底に玉取獅子文が描かれ今帰仁城跡でもよく見られるタイプの皿である。9は内面に雷文？の様な文様が描かれるが、器形から判断するに6～8と同じようなタイプの皿と思われる。10は外面に崩れた波濤文が描かれる直口口縁の皿。11・12、23－1は青花小杯。11は腰折れで外面無文、内面に界線を施す。12は内底に草文と圏線、外面に界線を2本施す。23－1は端反り口縁の外面に花鳥折枝文？が描かれる。22－13・14、23－2・3は清朝青花。13は外面に寿字文、内面は釉を掻き取る。14は胴部に印花文と草花文を施し、内底を蛇目釉剥ぎする。23－2は外面に松、口縁部内外面に圏線を2本施す。3は直口口縁の口縁部内外面に圏線を2本、外面に丸状の文様を施す。

⑧本土産陶磁器（第23図－4～7）

23－4は18世紀後半の蛇の目釉剥ぎを施し、豊付は砂が付着する肥前染付皿。内面は線描きによって唐草と葉を表現し、その下に圏線を二本廻らす、見込みにはいわゆるコンニャク印判による五弁花文が装飾される。コンニャク印判は大橋編年IV期（1690～1780年代）に特徴的な技法として用いられる（大橋1990・ほか）。5は関西系の色絵蓋で、松が横にのびる様子を略した文様となる（18～19世紀）。6は京焼の色絵碗で、口縁部外面には退色著しいが朱色の絵付で菊花を、これも退色するが緑色の草文を縁取りせず、一筆描きによって装飾している。本州日本では一般的に京焼の出土事例は武家屋敷等の階層的に上の位の屋敷等で出土する傾向があるとされているとされる（渡辺、私信）。7は甕もしくは壺と思われる底部資料である。器壁は薄く、器内面に同心円状の当て具痕を明瞭に残す。朝鮮系の薩摩焼もしくは肥前陶器資料と考えられる（17世紀）。

⑨沖縄産施釉陶器（第23図8～10）

一般に「上焼」と称される。これら沖縄産陶器は褐色の覆土となる柱穴遺構内より検出された。確認できた器種は碗、瓶である。23－8は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり外反させる器形で、内外面に透明釉の施釉後、呉須を用いて簡略化した単純な草花文？を描く。9は腰部から口縁部にかけて緩やかなカーブで立ち上がり、口縁部で微弱に外反させ

る碗。白化粧後に透明釉を畳付以外に全面施釉する。見込みは蛇の目釉剥ぎする。10は藁灰釉を流し掛けた瓶の口縁部。頸部から口縁部にかけて広がり外反する。

⑩玉（第24図－1～8）

24－1～8はガラス製の小玉で、大きさに大小が認められる。今帰仁城跡主郭でb 2種と分類した20mm～5mmの丸玉（1～4）と、c種とした5mm未満の丸玉資料（5～8）に大別できる。色は水色（1・2・5・7）、透明（4・8）、紺藍色（6）、表面は黄色で芯は赤（3）がある。

⑪不明ガラス製品（第24図－9）

24－9はガラス製の不明製品である。火を受けており現況を保っていないため、玉製品が溶解して癒着したものか不明である。

⑫銭貨（第24図－10～12）

24－11は寛永通寶。10は腐食が著しく銘の判断ができない銭貨である。12は無文銭。

⑬青銅製品（第24図－13）

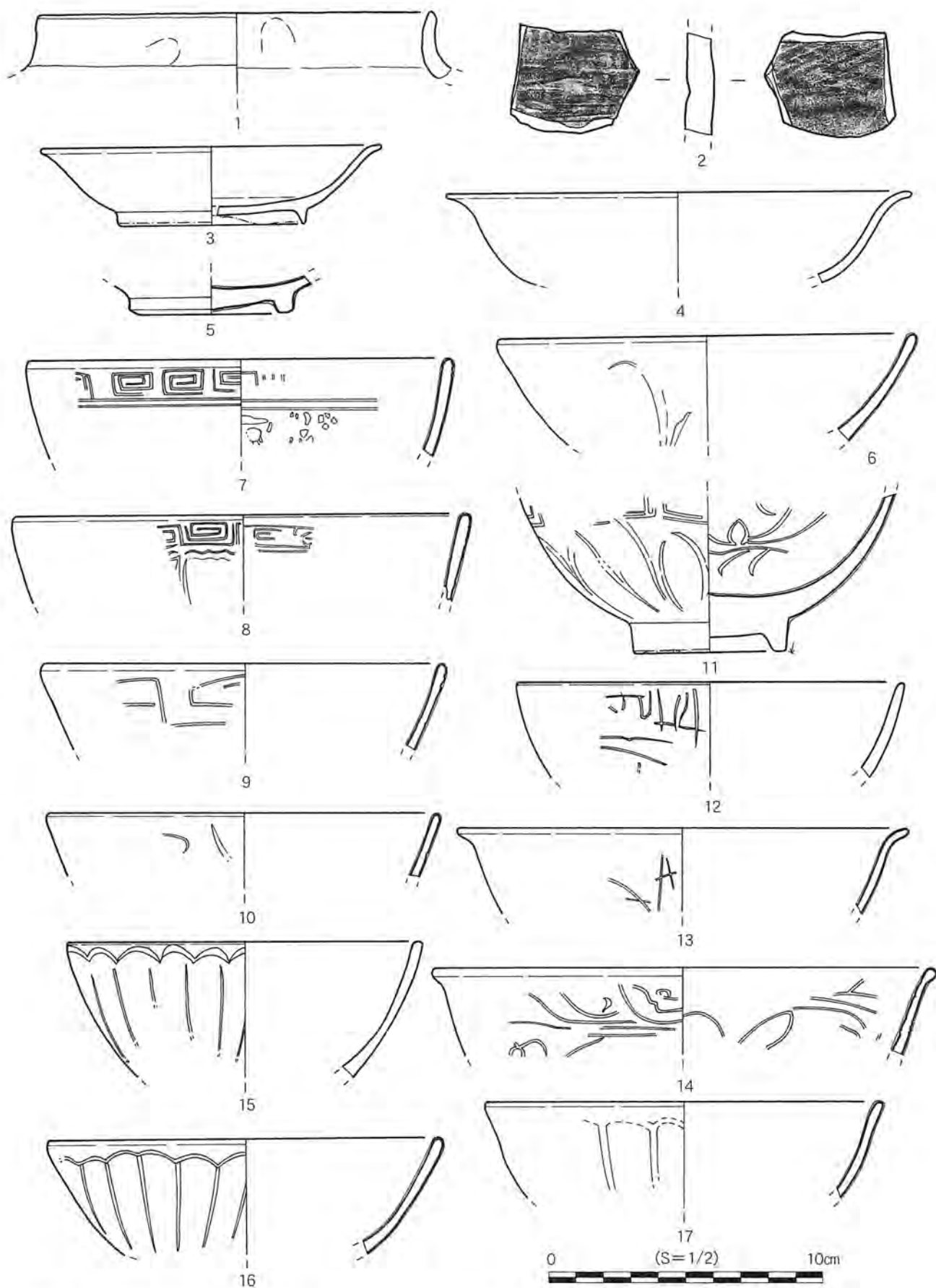
24－13は簪である。カブ、首、竿で構成される。カブは比較的大きい匙形で、何らかの要因でカブの途中で曲がっている。

⑭石器（第25図－1・2）

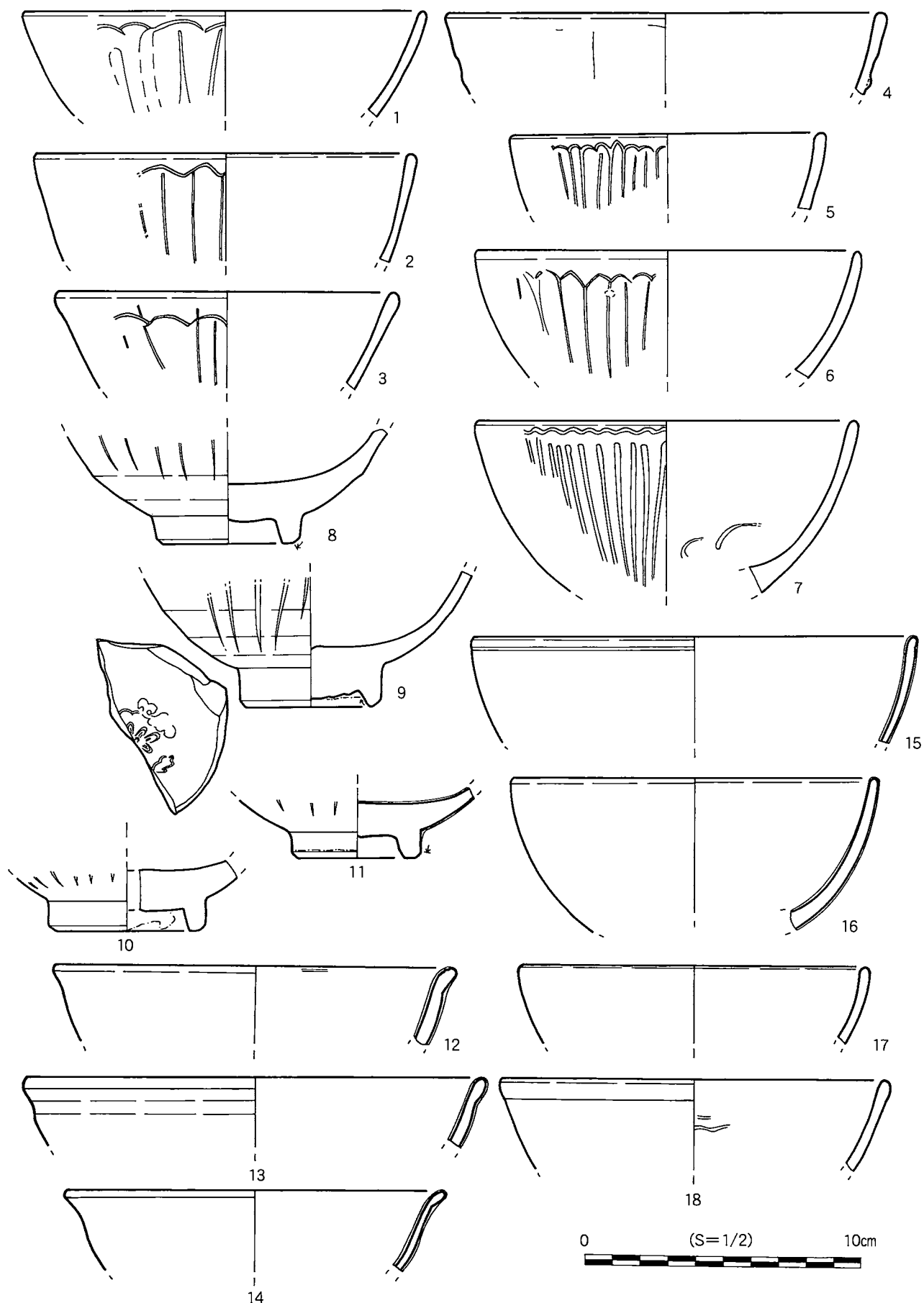
25－1は石鹼状の平面形を呈し、正面及び裏面の中央に縦約2.0cm、横約1.5cm（表側計測値）の浅い凹部（約2mm）を有する敲打器である。その周辺には滑面があり磨石としても使用していたようである。また上下端、及び両側面には敲打痕が認められる。2は砥石で、自然石に近い状態だが平坦面となる一箇所を作業面として使用している。

⑮鉄製品（第25図－3）

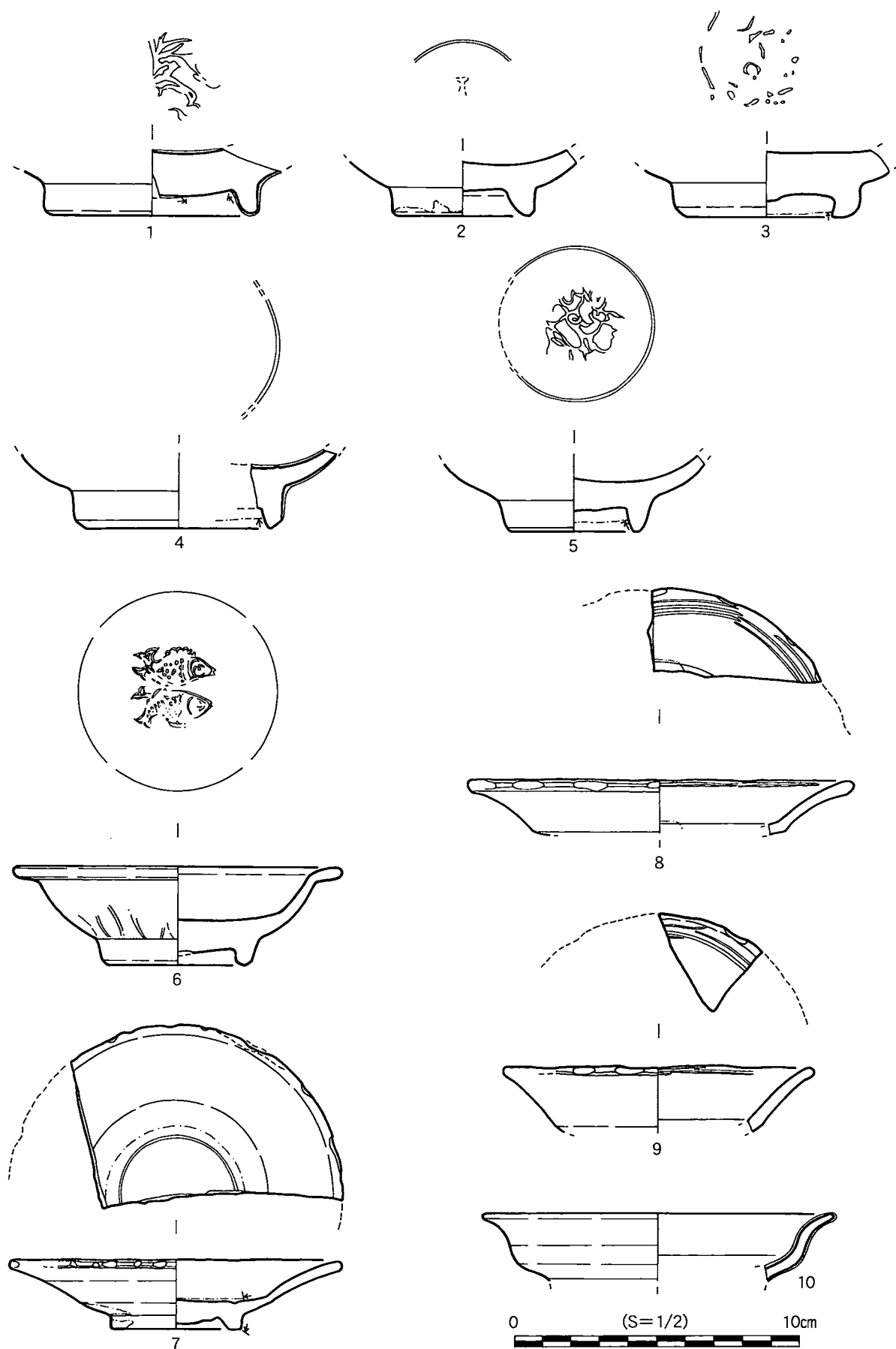
25－3は柄部を差し込む様なソケット状の製品である。錆の進行が著しく土も融着する。形態から農具等の一部分と想起させるが詳細については判然としない。



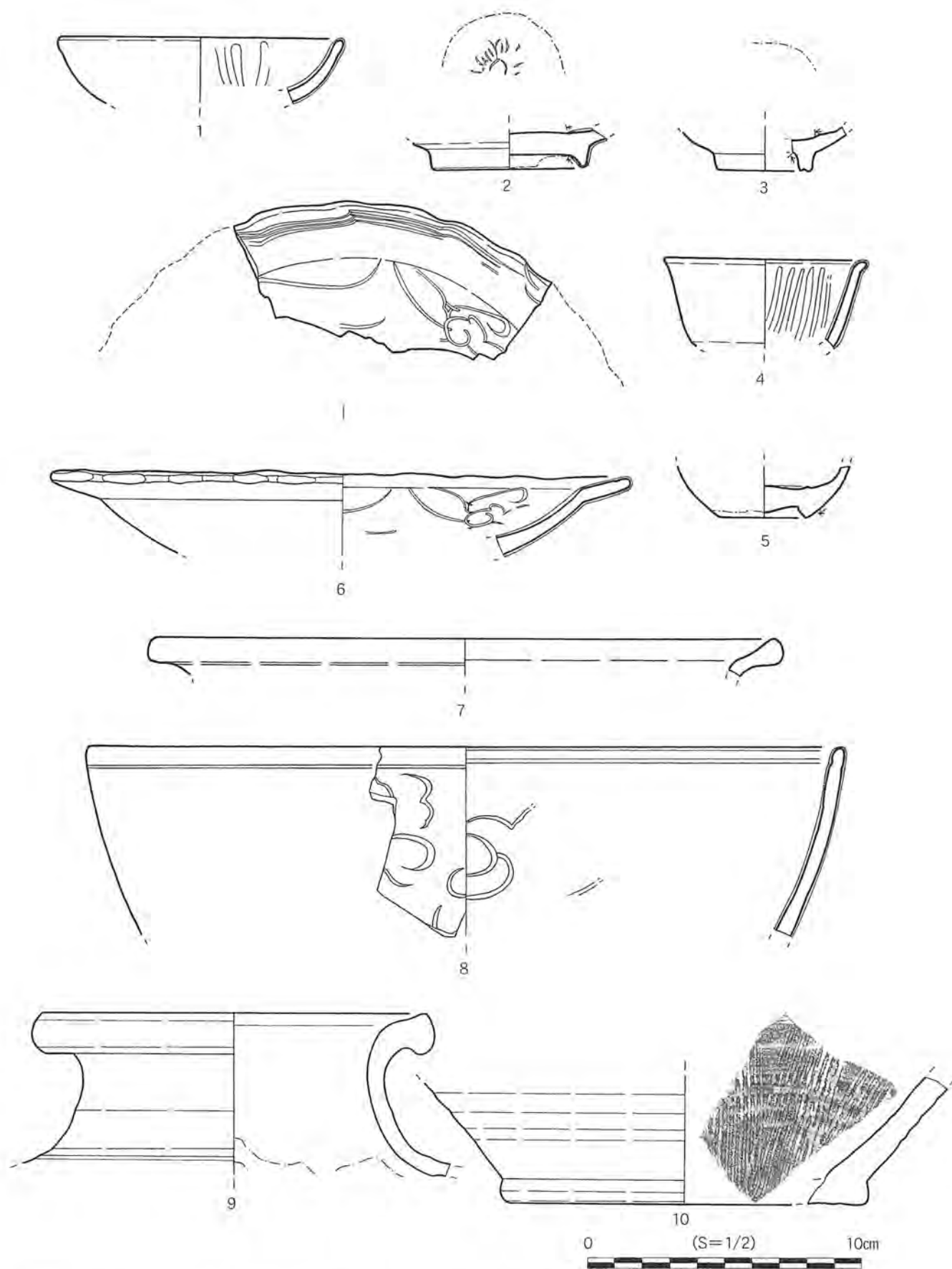
第18図 III層及び遺構内出土遺物 (1) 1:土器 2:カムイヤキ 3~5:白磁 6~17:青磁



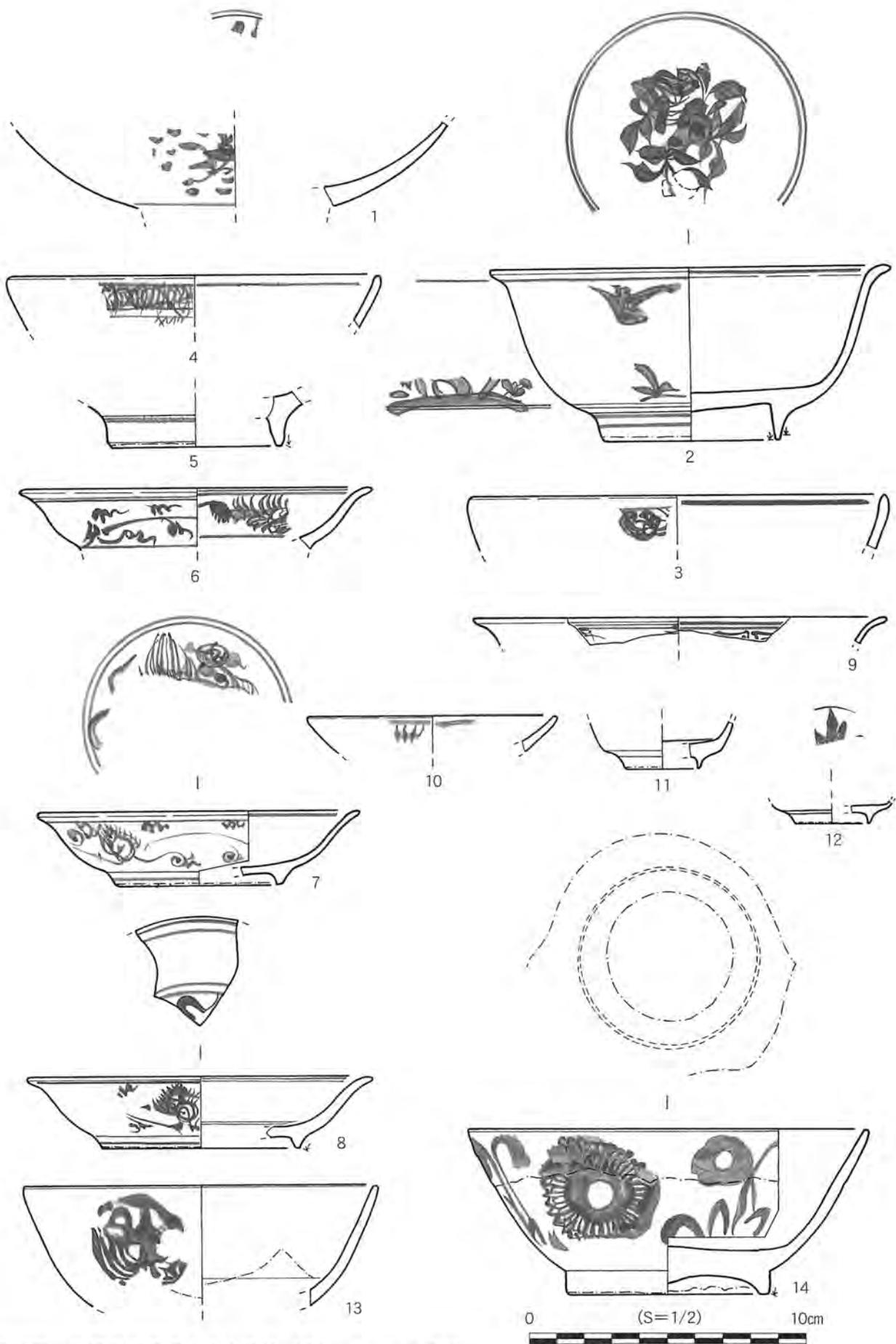
第19図 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（2） 1～18：青磁



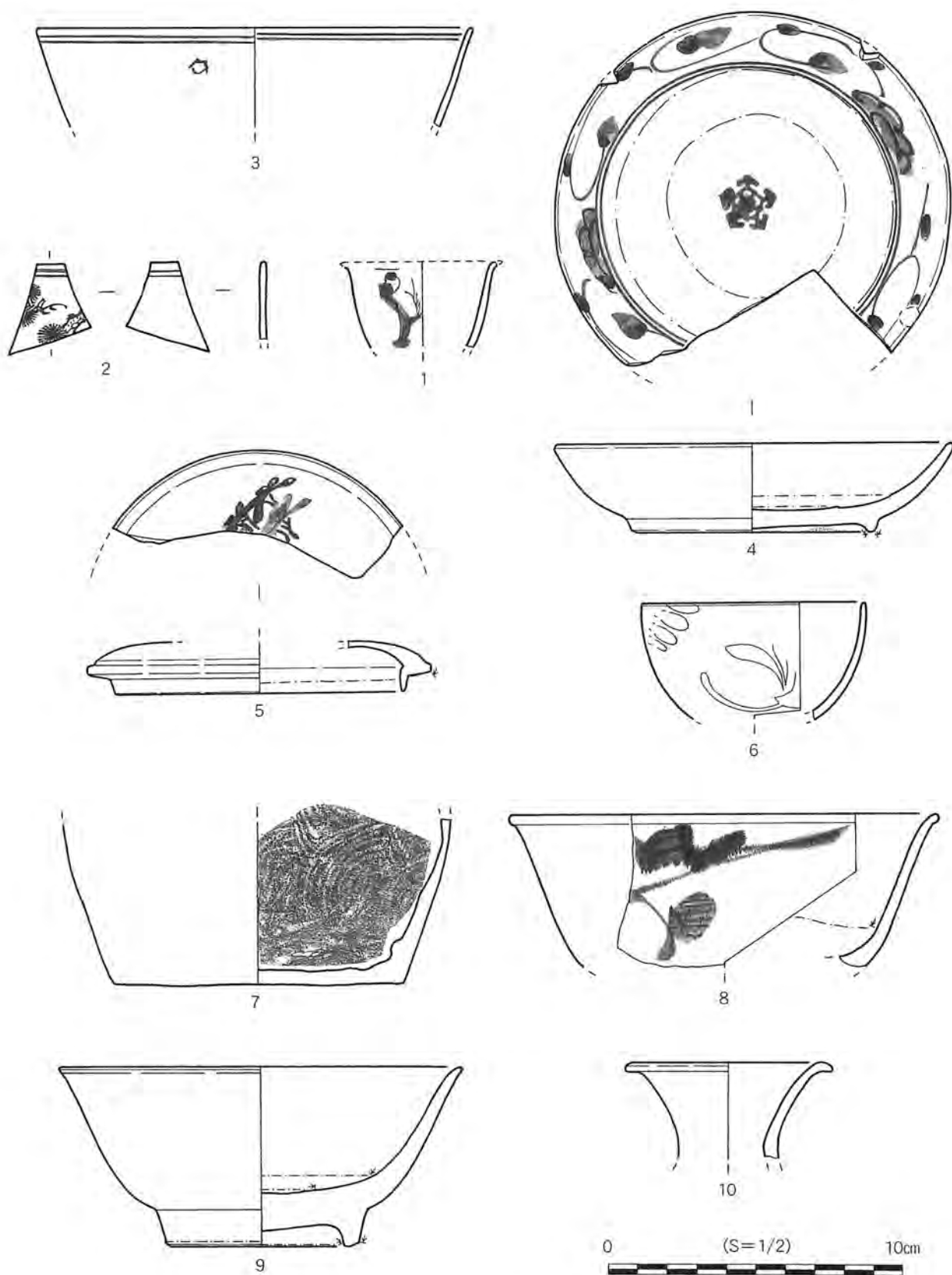
第20図 III層及び遺構内出土遺物（3） 1～10：青磁



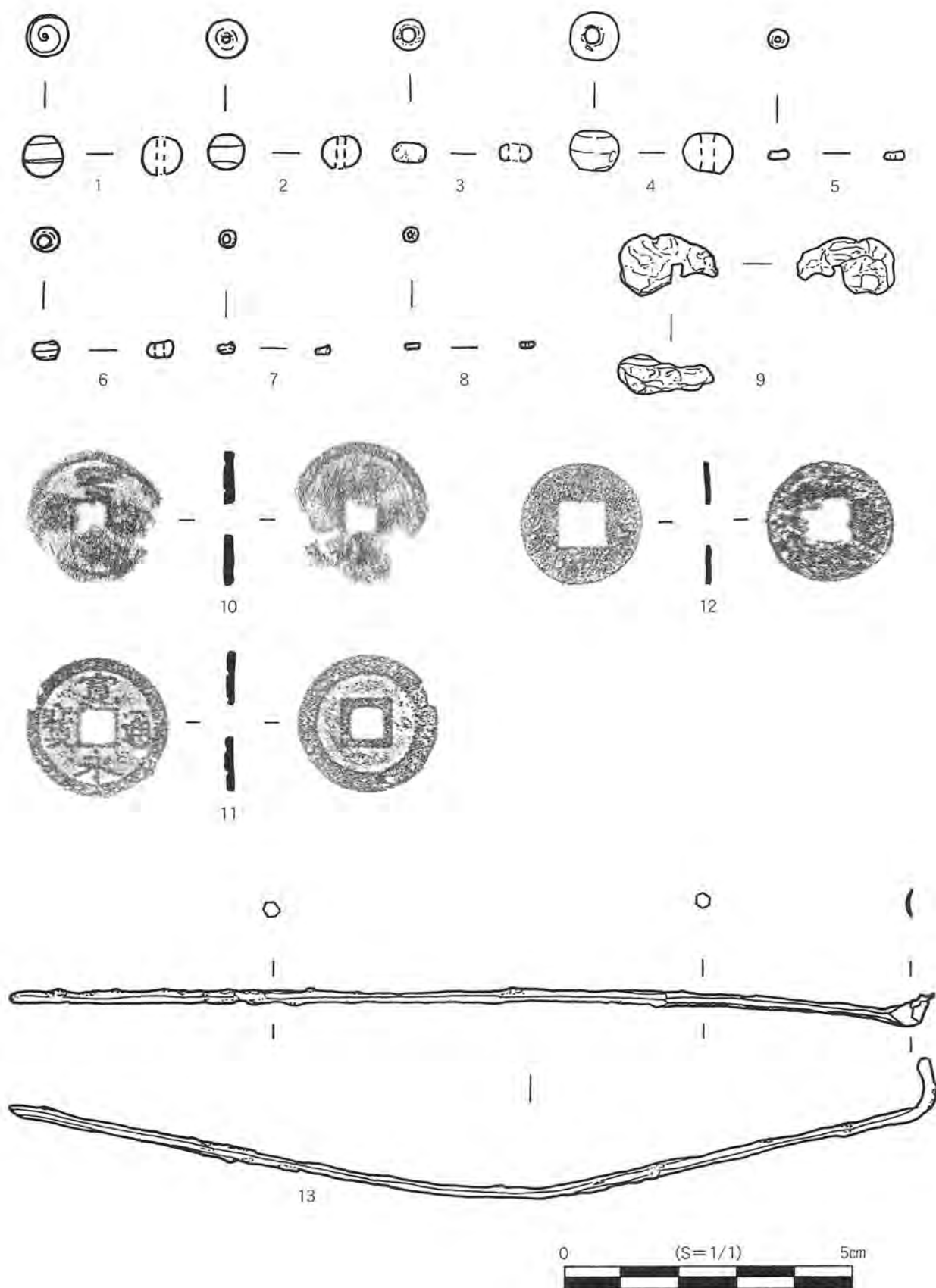
第21図 III層及び遺構内出土遺物(4) 1～8：青磁 9：タイ産陶磁 10：褐釉陶器



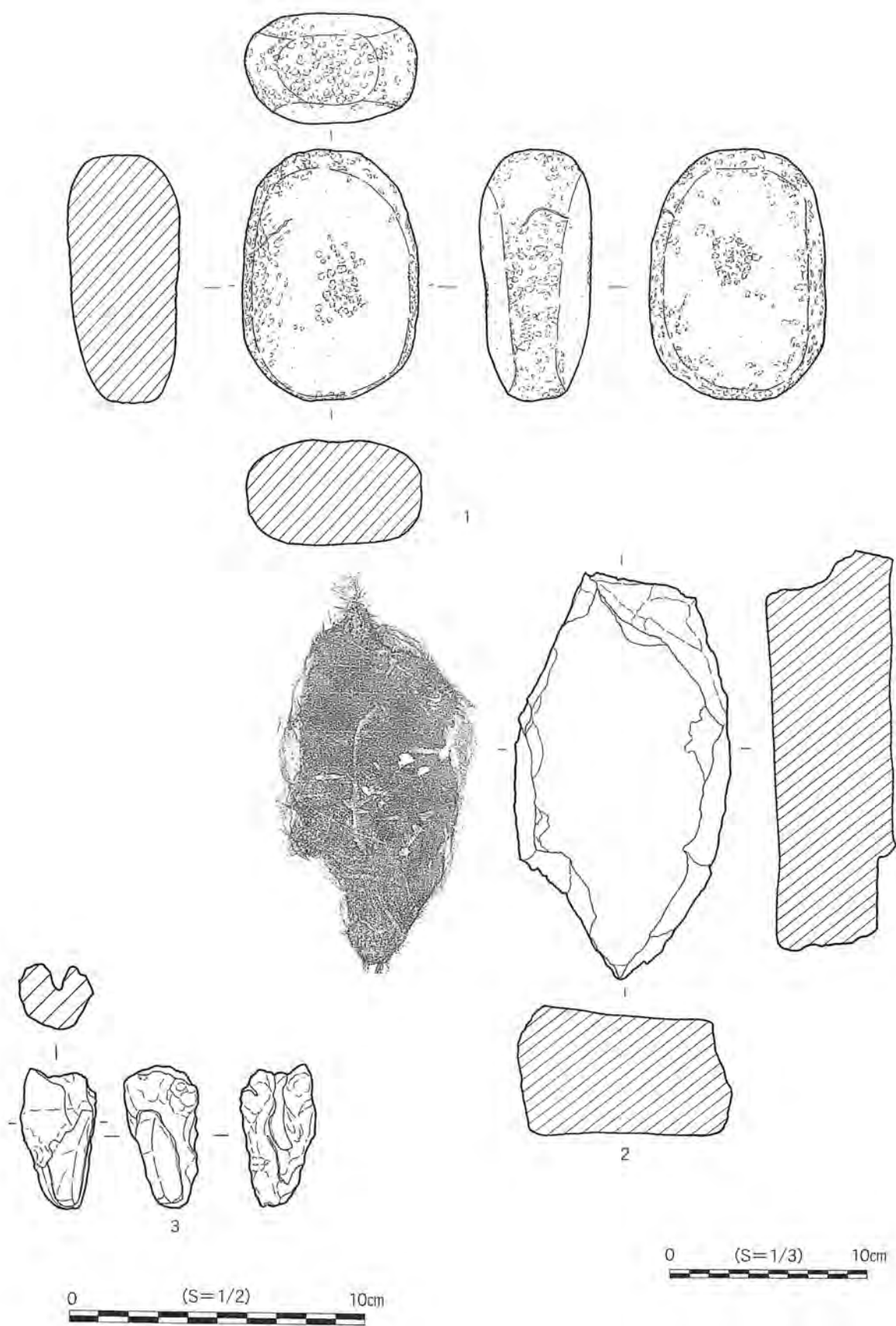
第22図 III層及び遺構内出土遺物 (5) 1~14: 青花



第23図 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（6） 1～3：青花 4～7：本土産陶磁器 8～10：沖縄産施釉陶器



第24図 III層及び遺構内出土遺物 (7) 1～8：玉 9：ガラス製品 10～12：銭貨 13：青銅製品



第25図 III層及び遺構内出土遺物（8） 1・2：石器 3：鉄製品

3 II層出土遺物

II層からは青花、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、石器が得られている。これら出土遺物はI層出土の遺物と変わらない。さらにII層のほとんどは耕作によって現況を保っておらず、I-19・J-19の一部のみで確認することができる限定的な分布状況であった。出土遺物等からおおまかに近世～近代に比定される包含層として判断した。

①青花（第26図－1・2）

26－1は瓶の胴部。圏線上段に唐草文？、下段に雲文？を描く。2は口縁部内面に圏線、見込みに圏線と不明文。外面には口縁部に圏線、胴部に草文を施す。

②本土産陶磁器（第26図－3・4）

26－3は胴部に網目文を施した肥前の瓶。素地は白色で失透明釉を掛ける（17世紀後半～18世紀前半）。26－4は一般に「くらわんか碗」と称される波佐見焼の碗で、高台に圏線、見込みに不明文様、素地は淡灰白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施す。

③沖縄産施釉陶器（第26図－5・6）

26－5は白化粧後に透明釉を施す角杯。6は瓶となる資料。頸部は長く口縁部は玉縁状を呈し黒褐色の釉を厚く施釉する。

④沖縄産無釉陶器（第26図－7～9）

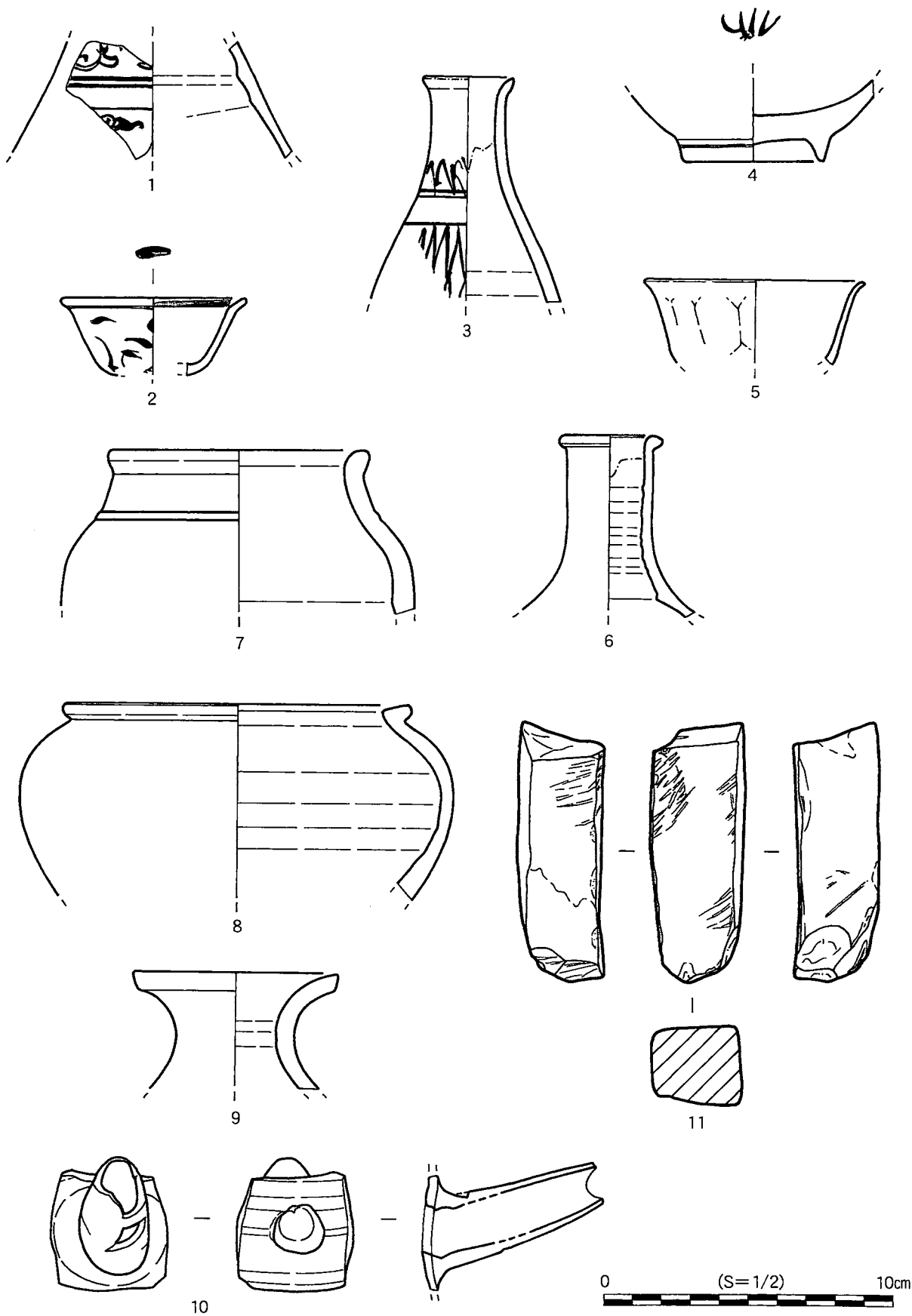
26－7は胴部上端からすばまり頸部をつくり外反する壺。胴部上端には波状沈線を施す。8は外面胴部上端に波状沈線を施す水鉢。胴部から口縁部にかけて大きく内湾し、折り曲げて折縁状とする。9は口縁部をラッパ状に外反させる瓶の口縁部破片。

⑤陶質土器（第26図－10）

26－10は一般的に「アカムヌー」と称される。急須の注口のみが残る。

⑥石器（第26図－11）

26－11は粘板岩製の砥石である。正面及び右側面に磨面を形成し、斜位に溝が刻まれる。



第26図 II層出土遺物 1・2：青花 3・4：本土産陶磁器 5・6：沖縄産施釉陶器
7～9：沖縄産無釉陶器 10：陶質土器 11：石器

4 I 層出土遺物

I 層からは青磁（碗・皿・杯・鉢）、白磁（碗・皿）、青花（碗・皿・杯）、褐釉陶器（壺）、ベトナム産白磁（碗）、本土産陶磁器（碗・鉢・壺）、沖縄産施釉陶器（碗・小碗・皿・火取り・酒注など）、沖縄産無釉陶器（壺・播鉢・火取りなど）、石器（砥石）、陶製品（キセル）、銭貨などが出土している。I 層は耕作土でサトウキビ畑等として使用されていた。そのため所々で攪乱されているがこれも含め報告する。

①青磁（第27図－1～9）

27－1・2は鎬蓮弁文碗で篋描きで幅広の蓮弁を描く。小破片のため口径はわからなかったが2は僅かに外反する。3は篋描きによる細蓮弁が密に施される。4は無文直口碗で外面に轆轤痕を観察することができる。5は無文の外反皿。6は外体面中央に陽圏線とその上段に簡略化した篋描きの蓮弁、内面にも同様の蓮弁を配する。7は外底無釉の皿底部。内底も輪状に掻き取り無釉とする。8は厚手の釉を畳付と外底以外に施釉する小碗。9は大振りの鉢の底部で厚手の釉を施釉、見込みに印花文を押印する。素地や釉などの特徴から第21図－8と同一個体と推定される。

②白磁（第27図－10～13）

27－10は粗製の白磁直口碗で内外面に明瞭な轆轤痕を残し、灰白色の透明釉を両面に施す。11も粗製の碗底部で、高台を逆ハの字状にし内底の釉を輪状に掻き取る。12・13は森田分類E群に属する薄手外反皿で、13は砂床焼成のために畳付に砂が付着する。

③青花（第27図－14～17）

27－14は口縁部内面に圏線を2本。外面も圏線を2本、その下の文様は不明。15の外面には腰部と高台に界線、見込みに界線を2本と不明文様を施す。16は口縁部外面に波濤文と界線、胴部に蕉葉文。口縁部内面に界線を施す。17は清朝青花小碗。外体面に梵字、圏線を施す。景德鎮窯系で18世紀後半に比定される（扇浦1999）。

④褐釉陶器（第27図－18～22）

18・19は産地不明の褐釉陶器壺。20は口縁部が略方形になる大型の壺で口唇部が僅かに凹む。21はすばまるように口縁部を成形し微弱に外反する。22は赤褐色の素地が特徴の壺の底部資料。

⑤ベトナム産陶磁（第27図－23）

27－23は白磁碗の胴部破片で白化粧後透明釉を施釉する。内面は二段の界線で区画しその下に型押しによる青海波文が見られる。

⑥本土産陶磁器（第28図－1～7）

28－1は肥前陶器の鉢と目される資料で、高台内の削りが深く真っ直ぐに削り出された高

台が特徴で、内底と外底の器壁はかなり薄くなる。蛇の目釉剥ぎ。2は二彩唐津の鉢底部。刷毛目による横線を施し白化粧後に銅緑釉を施釉する。見込みには砂目が残る（17末～18中頃）。3は京焼の碗で一筆描きによって笹文を絵付けする（18中頃以降）。4は内野山窯産と思われる銅緑釉の碗である。蛇の目釉剥ぎ。5は18世紀後半に流通したと考えられる肥前筒形碗。見込みに手描きによる五弁花、外面高台脇に鋸歯文、胴部文様は不明。6・7は産地不明の壺と碗で、6は短頸で玉縁状の口縁部を造る。茶褐色粗粒子の素地に藁灰釉？を掛ける。7は高台の造りは小さく内削りも浅い。高台脇は斜位に削り調整する。灰白色微粒子の素地に光沢のある緑灰色釉を腰部まで施釉する。

⑦沖縄産施釉陶器（第28図－8～16、第29図－1～4・8）

28－8は灰白色の素地に外面は黒釉を、内面は灰釉を掛け分けする。鉄釉を用いて見込み中央に丸文、内面胴部中央に圈線を施す。外面高台脇以下は露胎とし、蛇の目釉剥ぎする。畳付け及び見込みに白土が付着する。9は灰白色の素地に灰釉を施す。胴部以下は露胎。10は見込み部分を鉄釉、その上から灰釉を掛け分けする碗底部。蛇の目釉剥ぎする。11は内面を灰釉、外面は黒釉を掛け分けする。12は畳付・内底を除き黒釉を全面施釉する。13は直線的に立ち上がり口縁部を僅かに肥厚させる。残存部全面に濃緑色の灰釉を施釉する。14は口縁部を花卉状に仕上げる皿で残存部全面に鉄釉を掛ける。15・16は同一個体と思われる皿で、前者は口縁部資料、後者は底部資料になる。29－1は酒器の口縁部でいわゆるカラカラで、頸部を細く仕上げ口縁部上端を垂直に立ち上げる。2は直線的に立ち上がる筒型の火入れで口縁部内面から外面に黒褐色の釉（鉄釉単掛け）を施釉する。3・4は口縁部が内湾し丸く仕上げる鉢。3は著しく内湾し、内外面に黒釉を施釉する。29－8は外面胴部脇まで鉄釉を施釉する瓶。内面は無釉で轆轤痕が明瞭に残る。

⑧沖縄産無釉陶器（第28図－17、第29図－5～7・9～12）

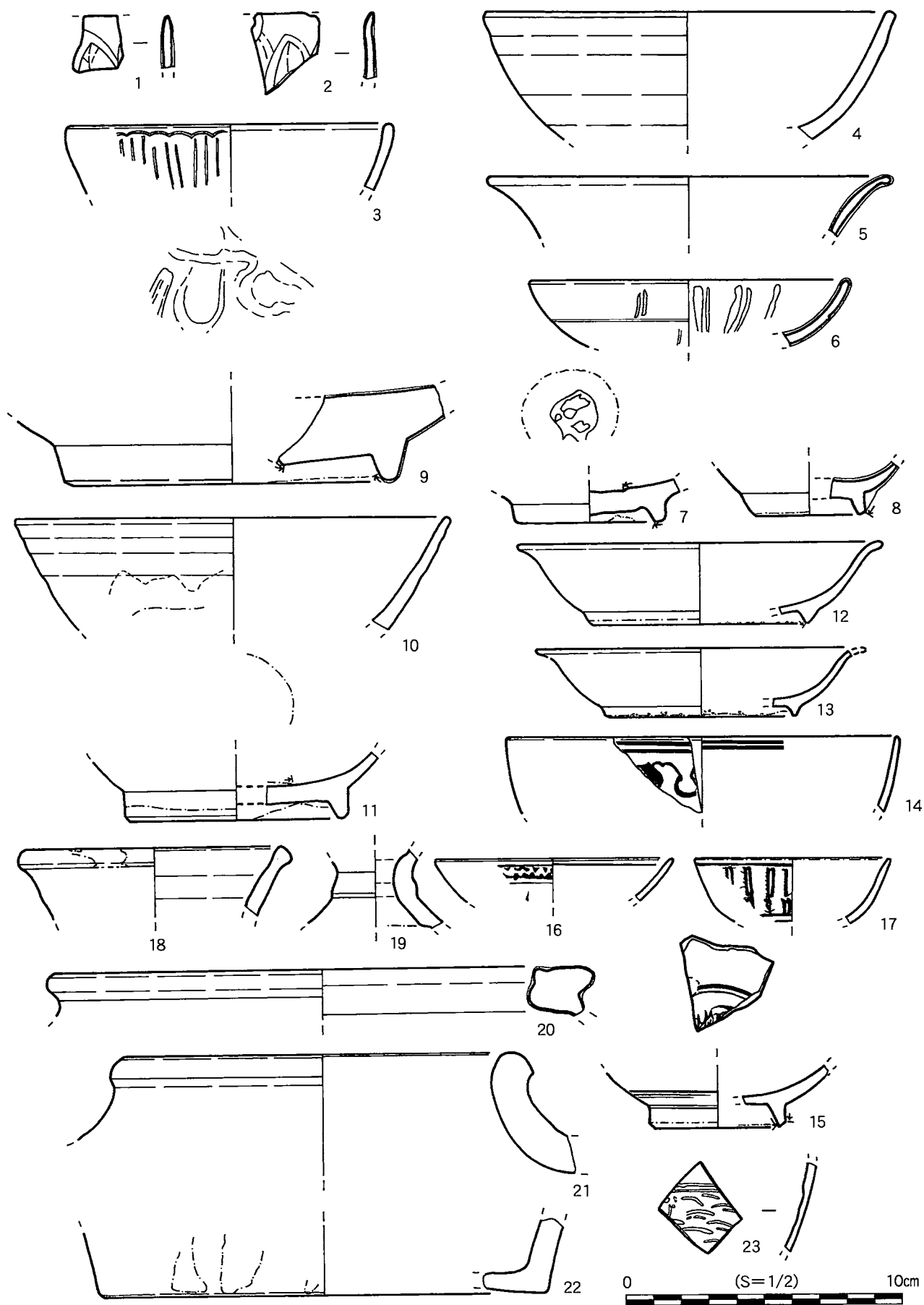
28－17は釉を施さない焼き締めの陶器碗。29－5は擂鉢で口縁部を逆L字状に折り曲げる。6は直線的に立ち上がる円筒状の器形で直口口縁となる火取。7は小壺で頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部を玉縁状に肥厚させる。口縁の下端部に1本と肩部に2本の凹線を廻らせる。9・10は蓋で底上面はドーム状に傾斜させ、端部を外側に張り出させる。撮み部分は皿形の器を伏せた形を呈する。11は口縁部をラップ状に強く折り曲げる壺で雑な造りとなる。12はヒール（火炉）と呼ばれる火鉢類である。肩部を「く」の字に折り曲げる。口唇部は平坦に整形しその直上に沈線を1条廻らす。また屈曲した肩部直下には把手を貼付する。

⑨石器（第29図－13・14）

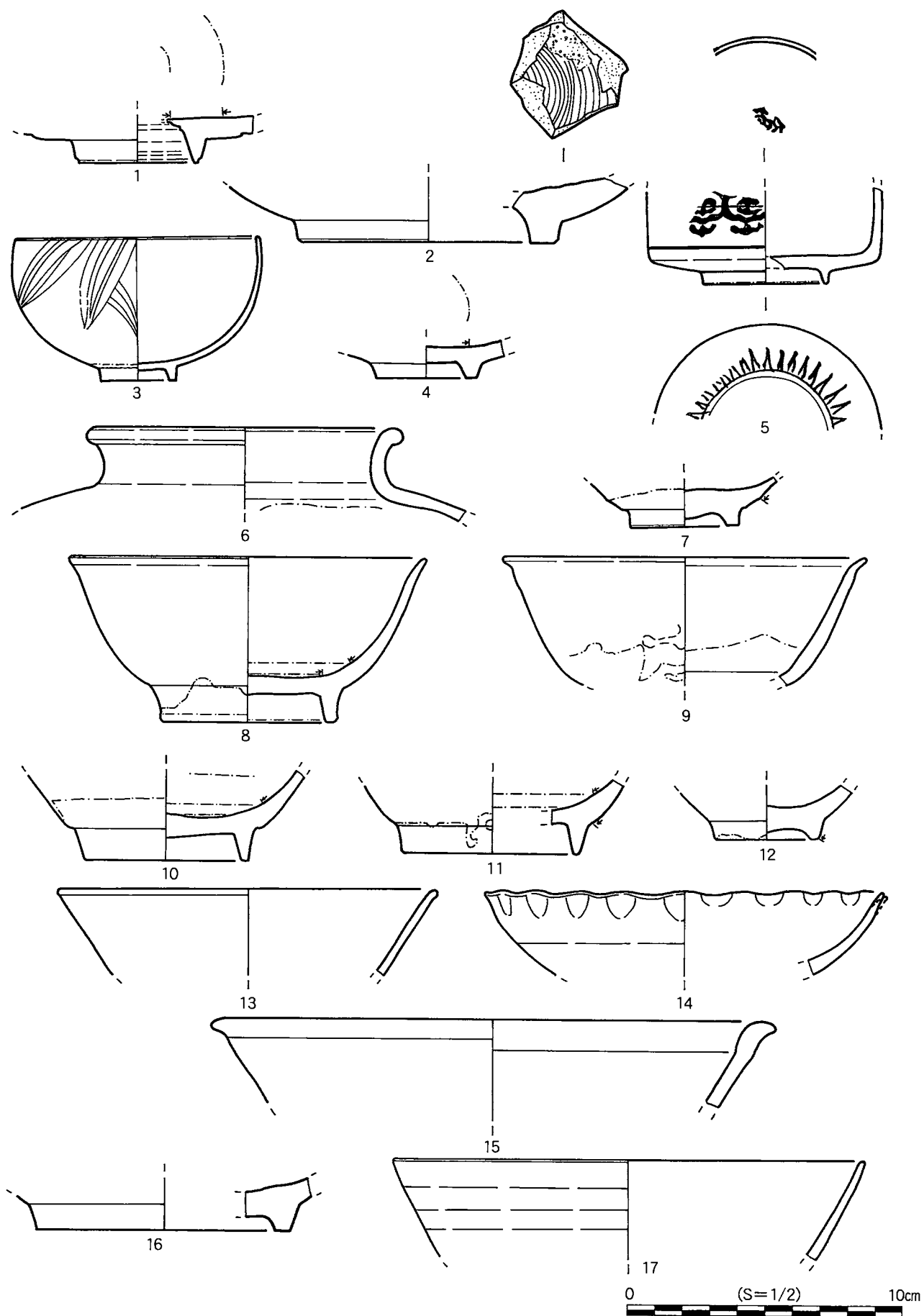
29－13は半分以上を欠損する砥石で、元の形状や大きさなどは不明であるが、残存部正面全体に研磨痕を有し緩やかな凹面を形成する。14は方柱状となる形状からいわゆる提砥とされるもので、志慶真門郭の報告では短冊状護符として報告している。大半を欠損すると思われるが、硬質の石材で断面略方形の製品となる（主郭分類a）。

⑩煙管（第30図－1～3）

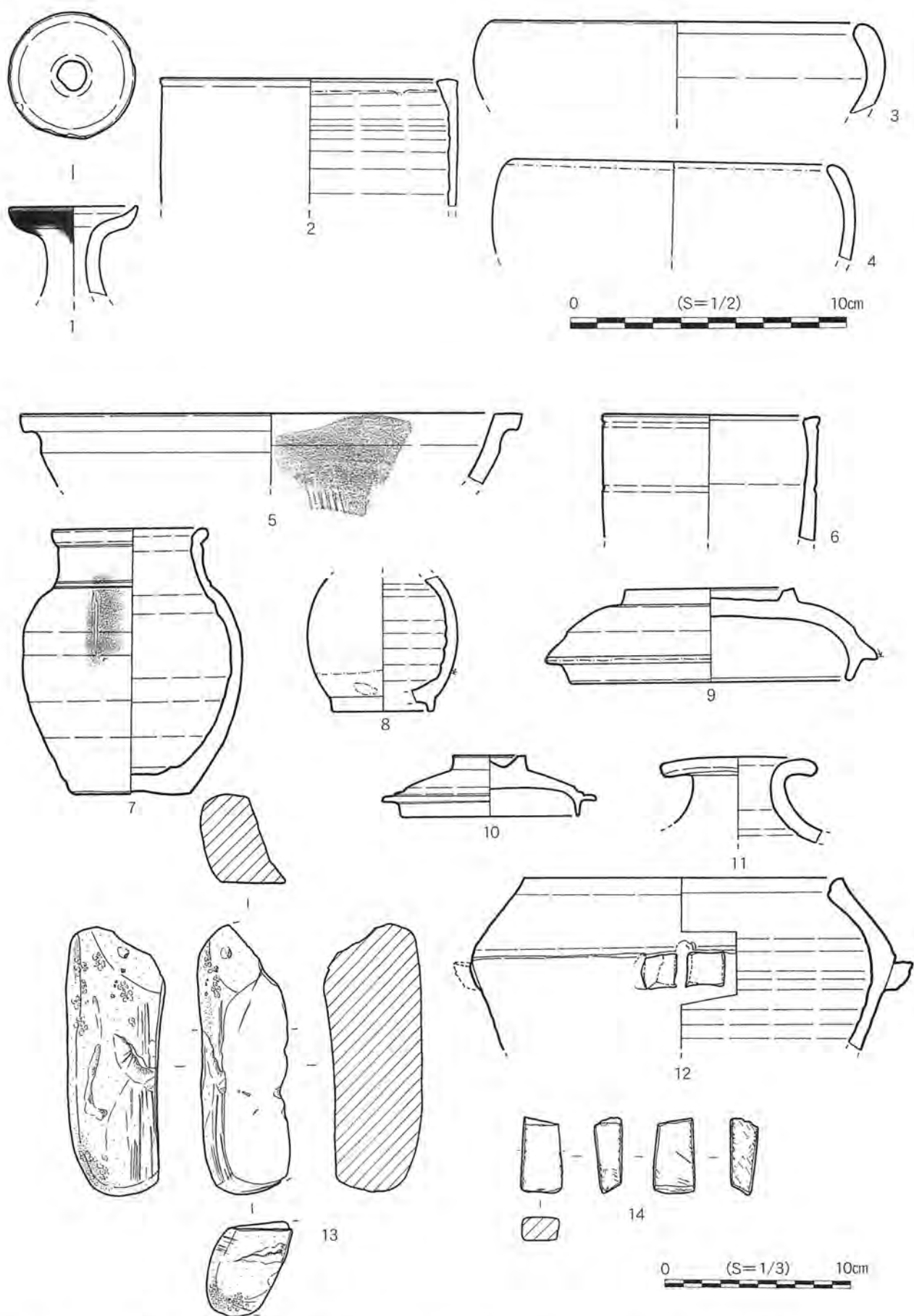
30－1は沖縄産無釉陶器製の雁首。羅字接続部分が一部欠損し、形態は面取りによって多



第27図 I層出土遺物 (1) 1～9：青磁 10～13：白磁 14～17：青花 18～22：褐釉陶器
23：ベトナム産白磁



第28図 I層出土遺物(2) 1～7:本土産陶磁器 8～16:沖縄産施釉陶器 17:沖縄産無釉陶器

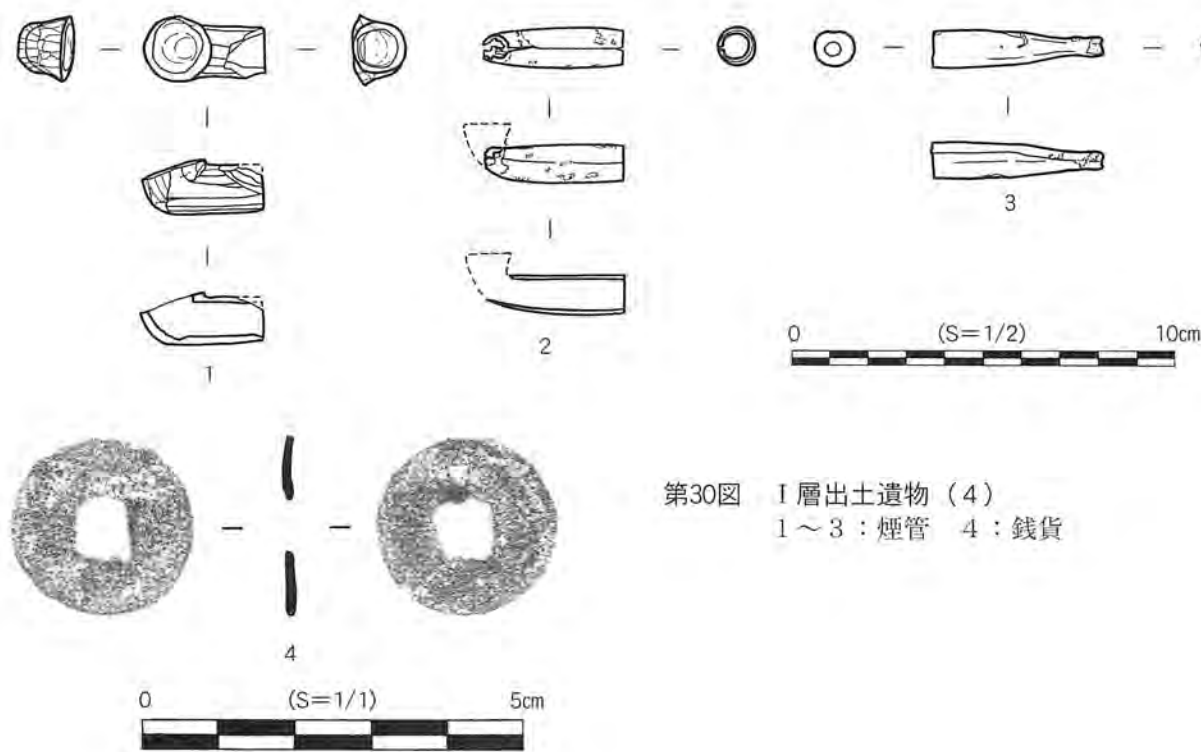


第29図 I層出土遺物(3) 1～4・8：沖縄産施釉陶器 5～7・9～12：沖縄産無釉陶器
13・14：石器

角形を呈する。2は青銅製の雁首。火皿は欠失し全体の腐食が著しく、所々に土が付着しこびり付く。3は青銅製品の吸口で口付が一部欠損する。全体的に青錆が目立ち土が付着しこびり付く。

⑪ 銭貨（第30図－4）

30－4は青緑色の錆に覆われ腐食が著しく判読できない。無文銭と思われる。



第30図 I層出土遺物（4）
1～3：煙管 4：銭貨

5 遺物観察表

遺物番号	グリッド	層位	遺構名	遺物No.	種別	形式	部位	計測値 (cm, g)			備考
								口径 外径	器高 厚さ	底径 重量	
8－1	I-18	－	SK661	299	青磁	皿	口縁部	10.3	－	－	
8－2	I-19	－	SK661	27	白磁	皿	口縁部	8.8	－	－	森田分類D群
8－3	I-18	－	SK661	260	青花	皿	口縁部	12.4	－	－	
11－1	I-18	－	SX1	174	白磁	碗	底部	－	－	7.2	
11－2	I-18	－	SX1	178	清朝青花	碗	底部	－	－	4.6	
11－3	I-18	－	SX1	20 137	清朝青花	碗	完形	15.6	6.6	8.0	
11－4	I-18	－	SX1	174	褐釉陶器	壺	胴部	－	－	－	タイ産
12－1	I-18	－	SX1	22 174	施釉陶器	碗	完形	13.8	6.3	6.6	
12－2	I-18	－	SX1	71 174	施釉陶器	碗	口縁部	13.2	－	－	
12－3	I-18	－	SX1	150	施釉陶器	碗	底部	－	－	4.5	
12－4	J-18	－	SX1	193	施釉陶器	碗	完形	14.0	6.1	5.9	
12－5	J-18	－	SX1	173	施釉陶器	碗	完形	14.1	6.8	6.3	
12－6	I-18	－	SX1	174	施釉陶器	碗	口縁部	15.0	－	－	
12－7	I-18	－	SX1	150	施釉陶器	碗	底部	－	－	6.8	
12－8	I-18	－	SX1	154	施釉陶器	碗	底部	－	－	6.5	
12－9	I-18	－	SX1	149	施釉陶器	碗	底部	－	－	8.0	
12－10	I-18	－	SX1	150	施釉陶器	碗	底部	－	－	6.2	
12－11	J-17	－	SX1	168	施釉陶器	碗	底部	－	－	5.4	
12－12	I-18	－	SX1	178	施釉陶器	碗	底部	－	－	5.9	
12－13	I-18	－	SX1	174	施釉陶器	小碗	完形	8.2	3.8	4.4	
12－14	I-18	－	SX1	155	施釉陶器	小碗	底部	－	－	3.6	
12－15	I-18	－	SX1	137	施釉陶器	角杯	底部	－	－	3.8	

第4表 出土遺物観察表（1）

遺物番号	グリッド	層位	遺構名	遺物No.	種別	形式	部位	計測値 (cm, g)			備考
								口径 外径	器高 厚さ	底径 重量	
12 - 16	I-18	-	SX1	174	施釉陶器	角杯	底部	-	-	3.2	
12 - 17	I-18	-	SX1	176	施釉陶器	角杯	底部	-	-	3.8	
13 - 1	I-18	-	SX1	174	施釉陶器	火取	底部	-	-	7.1	
13 - 2	I-18	-	SX1	174	施釉陶器	酒器	底部	-	-	7.3	
13 - 3	I-18	-	SX1	150	施釉陶器	水注	底部	-	-	6.8	もしくは香炉か?
13 - 4	I-18	-	SX1	174 176	施釉陶器	鉢	底部	-	-	8.7	
13 - 5	I-18	-	SX1	174 176	施釉陶器	水注	口縁部	7.5	-	-	
13 - 6	I-18	-	SX1	174	施釉陶器	鉢	完形	24.0	10.6	8.4	
13 - 7	I-18	-	SX1	174	施釉陶器	鉢	完形	16.5	11.3	9.9	
13 - 8	I-18	-	SX1	174	施釉陶器	壺	口縁部	12.2	-	-	
13 - 9	I-18	-	SX1	174	無釉陶器	壺	口縁部	14.6	-	-	
13 - 10	I-18	-	SX1	174	陶質土器	甕	口縁部	12.1	-	-	
13 - 11	I-18	-	SX1	174	陶質土器	急須	耳	-	-	-	
14 - 1	I-18	-	SX1	174	無釉陶器	壺	底部	-	-	15.4	
14 - 2	I-18	-	SX1	173	無釉陶器	甕	底部	-	-	23.7	もしくは壺か?
14 - 3	I-18	I	SX1	4 20 178	無釉陶器	壺	口縁部	14.8	-	-	
14 - 4	J-18	-	SX1	173	無釉陶器	槽鉢	底部	-	-	9.7	
14 - 5	I-18	-	SX1	196	無釉陶器	槽鉢	底部	-	-	13.3	
14 - 6	I-18	-	SX1	174	無釉陶器	槽鉢	底部	-	-	11.0	
14 - 7	I-18	-	SX1	156	無釉陶器	槽鉢	口縁部	28.5	-	-	
14 - 8	I-18	-	SX1	174	無釉陶器	槽鉢	口縁部	24.4	-	-	
14 - 9	I-18	-	SX1	174	無釉陶器	槽鉢	口縁部	34.2	-	-	
14 - 10	I-18	I	SX1	22 174	無釉陶器	槽鉢	底部	-	-	10.0	
15 - 1	I-18	-	SX1	150	肥前	碗	口縁部	9.1	-	-	波佐見?
15 - 2	I-18	-	SX1	174	肥前	碗	底部	-	-	5.8	
15 - 3	I-18	-	SX1	174	肥前	碗	完形	11.0	5.8	5.0	
15 - 4	I-18	-	SX1	174	クロム青磁	小碗	完形	8.4	4.2	3.3	
15 - 5	I-18	-	SX1	174	本土産陶磁	杯	完形	6.7	2.7	2.7	
15 - 6	I-18	-	SX1	174	本土産陶磁	杯	完形	7.0	2.6	2.7	
15 - 7	I-18	I	SX1	22 174	本土産陶磁	杯	完形	6.2	2.7	2.5	
15 - 8	I-18	-	SX1	174	銅板転写	小碗	完形	7.3	4.7	3.6	瀬戸・美濃?
15 - 9	I-18	-	SX1	174	銅板転写	小碗	完形	7.8	4.6	3.6	瀬戸・美濃?
15 - 10	I-18	-	SX1	162	型紙摺	碗	完形	13.5	5.1	4.8	砥部
15 - 11	I-18	-	SX1	174	型紙摺	皿	完形	10.8	2.1	5.9	
16 - 1	I-18	-	SX1	151	石器	砥石	-	12.1	3.4	340	
16 - 2	I-19	-	SX1	152	石器	砥石	-	9.6	3.1	211	
16 - 3	I-18	-	SX1	262	銭貨	寛永通宝	-	2.332	0.114	2.02	
17 - 1	I-18	-	SX2	73 158	青磁	碗	口縁部 底部	19.5	-	7.8	
17 - 2	I-18	-	SX2	163	石器	磨石	-	7.9	8.0	980	叩石としても併用
18 - 1	J-18	Ⅲ	-	-	土器	壺	口縁部	14.5	-	-	内外面に指頭痕を残す。内外面ともナデ調整。
18 - 2	I-19	Ⅲ	-	9	カムイヤキ	不明	胴部	-	-	-	内外面とも叩きの後、横方向のナデ調整。
18 - 3	I-18	Ⅲ	-	190	白磁	皿	完形	12.4	2.9	6.8	森田分類E群
18 - 4	I-18	-	S865	297	白磁	皿	口縁部	17.0	-	-	森田分類E群
18 - 5	J-18	Ⅲ	-	123	白磁	皿	底部	6.0	-	-	
18 - 6	I-19	-	S146	46	青磁	碗	口縁部	15.3	-	-	
18 - 7	I-19	-	S377	194	青磁	碗	口縁部	15.6	-	-	
18 - 8	J-18	-	S511	171	青磁	碗	口縁部	16.8	-	-	
18 - 9	I-19	Ⅲ	-	11	青磁	碗	口縁部	14.8	-	-	
18 - 10	J-19	-	S148	135	青磁	碗	口縁部	14.4	-	-	
18 - 11	I-19	Ⅲ	-	41	青磁	碗	底部	-	-	5.6	
18 - 12	J-19	-	S146	46	青磁	碗	口縁部	14.1	-	-	
18 - 13	I-19	Ⅲ	S399	193	青磁	碗	口縁部	16.4	-	-	
18 - 14	J-19	-	S147	47	青磁	碗	口縁部	18.3	-	-	
18 - 15	I-19	Ⅲ	S587 S220	109 189	青磁	碗	口縁部	13.0	-	-	
18 - 16	I-19	-	S12	111	青磁	碗	口縁部	14.5	-	-	
18 - 17	I-19	-	S339	142	青磁	碗	口縁部	14.6	-	-	
19 - 1	I-19	Ⅲ	-	65	青磁	碗	口縁部	14.7	-	-	
19 - 2	I-19	Ⅲ	-	71	青磁	碗	口縁部	14.0	-	-	
19 - 3	I-19	Ⅲ	-	57	青磁	碗	口縁部	12.5	-	-	
19 - 4	J-19	-	S440	139	青磁	碗	口縁部	16.1	-	-	
19 - 5	I-19	-	S922	300	青磁	碗	口縁部	11.5	-	-	
19 - 6	I-19	-	S209	-	青磁	碗	口縁部	14.0	-	-	
19 - 7	I-19	-	S284 S268	284 98	青磁	碗	口縁部	14.0	-	-	
19 - 8	I-18	-	S591	203	青磁	碗	底部	-	-	4.8	
19 - 9	I-18	Ⅲ	S637	206	青磁	碗	底部	-	-	5.1	
19 - 10	I-19	Ⅲ	-	70	青磁	碗	底部	-	-	5.2	

第4表 出土遺物観察表(2)

遺物番号	グリッド	層位	遺構名	遺物No.	種別	形式	部位	計測値 (cm, g)			備考
								口径 外径	器高 厚さ	底径 重量	
19 - 11	I-18	Ⅲ	—	192	青磁	碗	底部	—	—	4.4	
19 - 12	J-19	Ⅲ	—	39	青磁	碗	口縁部	14.7	—	—	
19 - 13	I-19	Ⅲ	—	9	青磁	碗	口縁部	16.8	—	—	
19 - 14	J-19	—	S796	—	青磁	碗	口縁部	14.0	—	—	
19 - 15	I-19	—	S206	85	青磁	碗	口縁部	16.4	—	—	
19 - 16	J-18	Ⅲ	S399	195	青磁	碗	口縁部	13.4	—	—	
19 - 17	J-19	—	S151	50	青磁	碗	口縁部	12.8	—	—	
19 - 18	I-19	—	S6	101	青磁	碗	口縁部	14.2	—	—	
20 - 1	I-18	—	S573	256	青磁	碗	底部	—	—	7.5	
20 - 2	I-19	—	S33	—	青磁	碗	底部	—	—	5.0	
20 - 3	J-19	Ⅲ	—	37	青磁	碗	底部	—	—	6.5	
20 - 4	I-18	—	S561	196	青磁	碗	底部	—	—	6.4	
20 - 5	I-19	—	S432	197	青磁	碗	底部	—	—	4.8	
20 - 6	I-18	—	S687	217	青磁	皿	完形	11.6	3.5	5.3	
20 - 7	J-18	—	S508	172	青磁	皿	完形	11.8	2.5	4.6	
20 - 8	I-18	Ⅲ	—	215	青磁	皿	口縁部	13.6	—	—	
20 - 9	I-18	—	S792	288	青磁	皿	口縁部	11.0	—	—	
20 - 10	I-19	Ⅲ	—	72	青磁	皿	口縁部	12.4	—	—	
21 - 1	I-18	—	S756	241	青磁	皿	口縁部	10.5	—	—	
21 - 2	I-18	—	S551	198	青磁	皿	底部	—	—	5.7	
21 - 3	I-19	Ⅲ	—	63	青磁	皿	底部	—	—	3.4	
21 - 4	I-19	—	S309	116	青磁	杯	口縁部	7.5	—	—	
21 - 5	J-18	Ⅲ	—	123	青磁	杯	底部	—	—	3.2	
21 - 6	I-19	Ⅲ	S230	75	青磁	盤	口縁部	21.4	—	—	
21 - 7	I-18	Ⅲ	—	215	青磁	盤	口縁部	23.5	—	—	
21 - 8	I-18	Ⅲ	—	170	青磁	鉢	口縁部	28.0	—	—	
21 - 9	J-19	Ⅲ	—	40	褐釉陶器	壺	口縁部	14.8	—	—	タイ産
21 - 10	J-18	Ⅲ	—	12	褐釉陶器	擂鉢	底部	—	—	13.0	
22 - 1	J-18	Ⅲ	—	123	青花	碗	胴部	—	—	—	小野分類C群
22 - 2	I-19	—	S12	102	青花	碗	完形	14.5	6.4	6.5	
22 - 3	I-18	—	S733	244	青花	碗	口縁部	15.1	—	—	小野分類D群
22 - 4	I-18	Ⅲ	—	177	青花	碗	口縁部	13.6	—	—	小野分類D群
22 - 5	J-17	Ⅲ	—	127	青花	碗	底部	—	—	6.4	
22 - 6	I-18	Ⅲ	—	220	青花	皿	口縁部	12.8	—	—	
22 - 7	I-19	—	S265	87	青花	皿	完形	11.7	2.7	6.1	
22 - 8	I-18	Ⅲ	—	84	青花	皿	完形	12.5	2.6	7.2	
22 - 9	I-18	Ⅲ	—	190	青花	皿	口縁部	15.0	—	—	
22 - 10	I-18	—	S21	174	青花	皿	口縁部	9.2	—	—	
22 - 11	I-19	Ⅲ	—	63	青花	小杯	底部	—	—	2.8	
22 - 12	I-18	—	S774	273	青花	小杯	底部	—	—	2.8	
22 - 13	I-19	—	S5 S261	55 100	清朝青花	碗	完形	12.9	—	—	
22 - 14	I-18	Ⅲ	S628	190 216	清朝青花	碗	完形	14.5	6.1	7.2	
23 - 1	I-18	—	S683	228	青花	杯	口縁部	5.5	—	—	
23 - 2	I-18	—	S536	226	清朝青花	碗	口縁部	—	—	—	
23 - 3	I-19	—	S536	253	清朝青花	碗	口縁部	14.9	—	—	
23 - 4	I-18	Ⅲ	S536	254 255 190	肥前	皿	完形	13.6	3.1	8.4	
23 - 5	I-18	—	S5	112	関西系色絵	急須	蓋	—	—	9.8	
23 - 6	I-18	—	S536	226	京焼	碗	口縁部	9.7	—	—	
23 - 7	I-18	—	S833	97	薩摩or肥前	壺	底部	—	—	10	薩摩もしくは肥前
23 - 8	I-18	—	S705	232	施釉陶器	碗	口縁部	7.3	—	—	
23 - 9	J-19	—	S170	49	施釉陶器	碗	完形	13.8	6.2	6.6	
23 - 10	I-18	—	S833	281	施釉陶器	瓶	口縁部	7.0	—	—	
24 - 1	I-19	—	S328	103	玉	ガラス製	—	0.748	0.695	0.64	孔径：0.098
24 - 2	J-19	—	S117	42	玉	ガラス製	—	0.631	0.568	0.35	孔径：0.159
24 - 3	I-19	Ⅲ	—	180	玉	ガラス製	—	0.552	0.353	0.18	孔径：0.241
24 - 4	I-19	Ⅲ	—	179	玉	ガラス製	—	0.815	0.633	0.61	孔径：0.260
24 - 5	I-18	—	—	224	玉	ガラス製	—	0.319	0.155	0.01	孔径：0.087
24 - 6	I-18	—	—	222	玉	ガラス製	—	0.436	0.265	0.06	孔径：0.204
24 - 7	I-18	—	—	259	玉	ガラス製	—	0.301	0.163	0.01	孔径：0.129
24 - 8	I-19	Ⅲ	—	128	玉	ガラス製	—	0.255	0.131	0.01	孔径：0.069
24 - 9	I-19	—	S366	286	ガラス製品	ガラス製	—	—	—	0.92	
24 - 10	I-19	Ⅲ	—	67	銭貨	不明	—	2.432	0.184	2.21	
24 - 11	I-18	Ⅲ	—	218	銭貨	寛永通宝	—	2.478	0.158	2.52	
24 - 12	I-19	—	S408	223	銭貨	不明	—	2.193	0.143	1.13	
24 - 13	I-19	Ⅲ	—	181	青銅製品	ゾーファー	—	15.9	—	3.98	
25 - 1	J-17	Ⅲ	—	261	石器	磨石	—	13.0	5.4	1150	叩石としても併用
25 - 2	J-19	—	S485	263	石器	砥石	—	20.7	6.1	2180	
25 - 3	I-19	Ⅲ	—	66	鉄製品	不明	—	4.9	2.5	36.26	(計測値＝長さ・幅・重量)
26 - 1	I-19	Ⅱ	—	7	青花	瓶	胴部	—	—	—	

第4表 出土遺物観察表（3）

遺物番号	グリッド	層位	遺構名	遺物No.	種別	形式	部位	計測値 (cm、g)			備考
								口径 外径	器高 厚さ	底径 重量	
26 - 2	I - 19	II	-	61	青花	杯	口縁部	6.4	-	-	
26 - 3	I - 19	II	-	7	肥前	瓶	口縁部	3.2	-	-	
26 - 4	I - 19	II	-	7	波佐見	碗	底部	-	-	4.8	
26 - 5	J - 19	II	-	14	施釉陶器	角杯	口縁部	7.1	-	-	
26 - 6	J - 19	II	-	29	施釉陶器	瓶	口縁部	3.6	-	-	
26 - 7	J - 18	II	-	8	無釉陶器	壺	口縁部	9.1	-	-	
26 - 8	I - 19	II	-	61	無釉陶器	水鉢	口縁部	12.0	-	-	
26 - 9	J - 18	II	-	13	無釉陶器	瓶	口縁部	7.1	-	-	
26 - 10	I - 19	II	-	7	陶質土器	急須	注ぎ口	-	-	-	
26 - 11	I - 18	II	-	62	石器	砥石	-	8.5	2.1	152	
27 - 1	J - 17	I	-	124	青磁	碗	口縁部	-	-	-	
27 - 2	I - 18	I	-	22	青磁	碗	口縁部	-	-	-	
27 - 3	全域	I	-	5	青磁	碗	口縁部	11.9	-	-	
27 - 4	J - 19	I	-	25	青磁	碗	口縁部	15.0	-	-	
27 - 5	I - 19	I	-	19	青磁	皿	口縁部	14.8	-	-	
27 - 6	I - 18	I	-	22	青磁	皿	口縁部	11.7	-	-	
27 - 7	全域	I	-	3	青磁	皿	底部	-	-	5.5	
27 - 8	I - 19	I	-	15	青磁	杯	底部	-	-	4.0	
27 - 9	全域	I	-	5	青磁	鉢	底部	-	-	12.2	
27 - 10	I - 18	I	-	20	白磁	碗	口縁部	15.9	-	-	
27 - 11	I - 18	I	-	22	白磁	碗	底部	-	-	8.1	
27 - 12	I - 19	I	-	19	白磁	皿	完形	13.3	3.0	13.3	森田分類E群
27 - 13	I - 18	I	-	23	白磁	皿	底部	-	-	7.0	森田分類E群
27 - 14	全域	I	-	5	青花	碗	口縁部	14.3	-	-	
27 - 15	全域	I	-	1	青花	碗	底部	-	-	5.1	
27 - 16	全域	I	-	3	青花	皿	口縁部	8.7	-	-	
27 - 17	全域	I	-	4	清朝青花	杯	口縁部	7.2	-	-	
27 - 18	I - 19	I	-	19	褐釉陶器	壺	口縁部	10.0	-	-	
27 - 19	I - 18	I	-	22	施釉陶器	壺	頸部	-	-	-	
27 - 20	全域	I	-	4	褐釉陶器	壺	口縁部	20.0	-	-	
27 - 21	I - 18	I	-	23	褐釉陶器	壺	口縁部	14.4	-	-	
27 - 22	全域	I	-	4	褐釉陶器	壺	底部	-	-	16.2	
27 - 23	J - 19	I	-	21	白磁	胴部	-	-	-	-	ベトナム産
28 - 1	J - 18	I	-	126	肥前	鉢	底部	-	-	4.4	
28 - 2	全域	I	-	3	唐津	鉢	底部	-	-	9.2	
28 - 3	I - 19	I	-	15	京焼	碗	完形	9.2	5.2	3.2	
28 - 4	I - 18	I	-	74	内野山	碗	底部	-	-	4.3	
28 - 5	I - 18	I II	-	263	肥前	碗	底部	-	-	4.6	
28 - 6	I - 18	I	-	20	本土産陶磁	壺	口縁部	11.5	-	-	薩摩か?
28 - 7	全域	I	-	3	本土産陶磁	碗	底部	-	-	3.8	
28 - 8	J - 19	I	-	25	施釉陶器	碗	完形	13.0	6.1	6.4	
28 - 9	全域	I	-	6	施釉陶器	碗	口縁部	13.3	-	-	
28 - 10	J - 18	I	-	26	施釉陶器	碗	底部	-	-	6.0	
28 - 11	I - 18	I	-	20 22	施釉陶器	碗	底部	-	-	6.5	
28 - 12	I - 19	I	-	15	施釉陶器	小碗	底部	-	-	3.8	
28 - 13	I - 19	I	-	7	施釉陶器	碗	口縁部	13.9	-	-	
28 - 14	I - 18	I	-	22	施釉陶器	皿	口縁部	14.5	-	-	
28 - 15	全域	I	-	6	施釉陶器	皿	口縁部	20.5	-	-	
28 - 16	全域	I	-	4	施釉陶器	皿	底部	-	-	9.2	
28 - 17	I - 18	I	-	74	無釉陶器	碗	口縁部	17.2	-	-	
29 - 1	I - 18	I	-	20	施釉陶器	酒注	口縁部	5.1	-	-	
29 - 2	J - 17	I	-	124	施釉陶器	火取	口縁部	10.8	-	-	
29 - 3	全域	I	-	5	施釉陶器	鉢	口縁部	13.6	-	-	
29 - 4	J - 18	I	-	126	施釉陶器	鉢	口縁部	11.6	-	-	
29 - 5	I - 18	I	-	20	無釉陶器	播鉢	口縁部	27.7	-	-	
29 - 6	I - 19	I	-	15	無釉陶器	火取	口縁部	12.0	-	-	
29 - 7	I - 19	I	-	4	無釉陶器	壺	完形	8.5	14.6	6.6	
29 - 8	全域	I	-	5	施釉陶器	瓶	底部	-	-	5.6	
29 - 9	全域	I	-	5	無釉陶器	壺	蓋	9.2	5.1	15.3	
29 - 10	I - 18	I	-	74	無釉陶器	壺	蓋	4.1	3.4	9.8	
29 - 11	I - 19	I	-	19	無釉陶器	壺	口縁部	8.6	-	-	
29 - 12	全域	I	-	4	無釉陶器	火炉	口縁部	17.5	-	-	
29 - 13	全域	I	-	3	石器	砥石	-	14.6	4.9	447	
29 - 14	J - 19	I	-	28	石器	砥石	-	4.1	1.3	23.8	
30 - 1	I - 18	I	-	126	陶製品	キセル	雁首	3.16	-	5.26	
30 - 2	J - 18	I	-	26	青銅製品	キセル	雁首	3.73	-	4.02	
30 - 3	I - 18	I	-	22	青銅製品	キセル	吸口	4.43	-	3.37	
30 - 4	I - 18	I	-	-	銭貨	不明	-	2.427	0.143	1.68	

第4表 出土遺物観察表（4）

6 墨書資料について

第13図-1で報告した資料について本節で詳述する。

白化粧の後、透明釉を外面に施釉する筒型の火取もしくは香炉で、底部裏面に墨書で文字が書かれている。墨書された内容は仲原弘哲氏によって以下のように判読できるのではないかとご指摘いただいた。

記載内容は三行あって縦書き、「天底□」「仲宗根□」「四月」と読める。

1行目の天底はおそらく「村」が続くと推定される。

2行目の仲宗根に続く文字は竹冠までが判読できるので、書き込めるスペースはやや狭いが登之を崩して書き込み「筑登之（ちくどうん）」が続くと推定される。

以上の推測から「天底村 仲宗根筑登之 四月」が推定を含む判読内容である。

先ず一行目の「天底村」は1719年に本部間切から移って以後、今帰仁間切から今帰仁村への改称のあった明治41年（1908）の字天底になるまで使用された呼称である。このことから1719～1908年までの記載である可能性が高い。次に2行目「仲宗根筑登之」は、人名で筑登之が首里王府の位階名称及び称号で、赤冠、正従九品とされる。また、一般に嫡子、次男などによって差はあるものの28歳までには定年を迎える（宮里1983）。このことから記載された「仲宗根」が士族で、若い頃の記載であることが推定される。参考まで天底村の文献に登場する仲宗根姓を見ていく。天底村の「仲宗根」について確認できる資料として明治36年の『砂糖消費税法改正之儀二付請願』（仲原1990）がある。この中には天底村の先人たちの人名と住所、生年月日、士族平民の身分を知ることができる。この中に仲宗根姓が2人登場するがいずれも平民の記載である。一方伝承より、本部から12～15代前に寄留したと伝えられる「仲宗根（イガヤー）」の存在も見逃せない。

以上のことを鑑みると仲宗根家は最初に寄留したと伝えられるイガヤーの系統もしくは、『砂糖消費税法改正之儀二付請願』に登場する仲宗根家の祖先や親戚筋が当該資料を残した家であることが想定される。文字資料の示す年代観は村移動した1719年から、称号が用いられなくなる沖縄における廃藩置県の明治12年（1879）までの4月に記載と想定される。更に遺物そのものの年代観として、白化粧土に透明釉という特徴を持つことから、白化粧土の登場を18世紀末～19世紀とする見解（家田1998）を参考に上述の所見と合わせると、1700年代の末頃から1879年までの製品としておよそ100年の間までに製作記載された資料として紹介することができると思う。



写真1 墨書資料

7 自然遺物

本遺跡から獣魚骨や貝殻などの出土は小片で、わずかながらS X 1やI・II層に見られるのみであった。但し、無いといっても現場における肉眼で遺物を取り上げるPick up法による検出が見られなかったので、フローテーション法等による微細遺物の検出を目的とした方法では別である。

S X 1及びI・II層で得られた貝類遺体と脊椎動物遺体は、前者がシャコガイや巻き貝の破片資料で、表面が風化し種別の判断は困難であった。最小個体数でも10個内の少数である。後者はウシもしくはウマと想定される遊離歯の破片資料が多く見られたが、これも数個体の資料と想定される。III層から出土した貝類及び脊椎動物遺体は皆無であった。

次に調査時にサンプリングしていたSK661 (I-19) の土坑内の堆積層について16リットルの土壌を採集した。乾燥後、専用水槽に沈め、沈殿したものと浮いた物に別け回収を行った。SK661はIII層の遺構と想定されグスク時代の自然遺物の検出を期待し分析を行った。沈殿した遺物には獣魚骨などの回収を期待したが、こちらでも良好な結果を得ることができなかった。以前実施した今帰仁城跡周辺遺跡では魚骨の細片やウロコなどを回収する事ができたので、この結果がSK661に限る現象なのかについては更に資料数を増やすことが必要である。浮遊した遺物には炭化植物が含まれていた。以下に炭化植物遺体の同定結果を概述する（第5表）。同定は本来専門家による分析を依頼するべきであると考えるが、今回は宮城が肉眼と双眼実体式の顕微鏡を使用し行った。回収できた202点の植物遺体のうち36点の同定を行うことができた。同定することのできたものではアワ（36%）、コムギ（31%）、キビ（22%）、コメ（8%）、オオムギ（3%）であった。これまでに実施した今帰仁城跡周辺遺跡と比べてみると、周辺遺跡ではアワ（45%）、コムギ（39%）、オオムギ（7%）、キビ（3%）、コメ（2%）の順で本遺跡と近い値をみせている。以上の結果から天底後原遺跡の栽培植物の消費傾向はグスク時代の当該地域における一般的な動向と考える。

地 区	SK661					
層	i 層				iii層	
土 量	7リットル				9リットル	
	完 形 (粒)	破 片 (片)	完 形 (粒)	破 片 (片)	推定個体 (MNI)	百分率 (n=36)
コ メ	2	1	0	0	3	8.33%
コ ム ギ	3	1	6	1	11	30.56%
オオムギ	0	0	1	0	1	2.78%
ア ワ	18	2	4	0	13	36.11%
キ ビ	5	0	3	0	8	22.22%
小 計	28	4	14	1	36	
同定不明	89		66			
植物遺体数総計	121		81			
植物遺体分布密度 (遺体数／リットル)	17.2		9			

第5表 SK 6 6 1 出土植物遺体

第Ⅵ章

総 括

前章までに天底後原遺跡の発掘調査の成果について紹介してきた。最後に若干のまとめをして結びとしたい。

先ず遺跡の使用年代について考えてみたい。層序では概ねⅢ層とⅡ層が本遺跡を形成した主要な堆積層で、Ⅲ層がグスク時代、Ⅱ層が近世琉球から近代に該当すると考えられる。詳しく見ていくと、先ずⅢ層に含まれる遺物は古手の資料としてグスク土器、カムイヤキ須恵器、白磁口禿皿が出土している。これらの出土遺物は13世紀後半から14世紀初め頃に比定される今帰仁城跡主郭第Ⅸ層及び第Ⅶ層、今帰仁村シイナグスクなどの出土傾向に近似することから13世紀後半から14世紀前半頃を上限として考えることができる。しかし出土量は多くない。主な陶磁器は白磁では森田分類E群、青磁では雷文帯碗、細蓮弁文碗、青花では明代のものが主体となることから、概ね15世紀から16世紀に比定されるのではないかと推測される。Ⅲ層とともに報告した遺構内の遺物には清朝磁器や本土産の陶磁器類も散見されるため、17世紀の資料も含まれる可能性も皆無とはいえないものの、積極的に17世紀まで含めるとするほど出土量は多くない。むしろ後述するⅡ層の遺構として解することが無難と考える。Ⅱ層の出土資料は沖縄産陶磁器や本土産の磁器が出土する。堆積層も薄く判然としないが、遺構内出土の本土産陶磁器などをⅡ層の遺物として分別することが可能であれば、Ⅱ層及び遺構内新手資料を一つの時期に設定することが可能と考える。即ちⅡ層出土の沖縄産陶器や本土産陶磁器、清朝磁器などから概ね17世紀後半が上限と考えられる。下限については少量だが近代の磁器などを含むため19世紀終わりから20世紀を含む可能性が考えられる。また、遺構として検出されるS X 1の年代観もⅡ層と近いことから、お互いの堆積状況に切り合いがないため判断に苦慮するところであるもののⅡ層の遺構もしくはそれに後続する遺構と考えられる。以上年代についてまとめると、Ⅲ層が15・16世紀に、Ⅱ層及びS X 1が17世紀後半から20世紀初め頃に比定されると考えられる。Ⅲ層とⅡ層をスムーズに結ぶような古手の沖縄産陶器が検出されていないので、そこには断絶があったのではないだろうか。そう考えると、Ⅲ層を15世紀頃から16世紀のグスク時代に展開した集落と考え、一端当該地域での生活が廃絶されて以後、再び利用されたのを1719年、18世紀初め頃の本部間切からの天底村の移動に伴った集落として考えることもできる。

遺構はⅢ層の時期に比定される柱穴とⅡ層に比定される柱穴が混在し、最終的にはⅤ層の上面で確認する形で検出した。このため、本来は詳細にこれを検討し個別に報告するべきであるが、判然としない状況での報告となった。概して柱穴は調査区の南東側に偏在し集中している。また調査地域の南側は迫地となりかつて小川が流れていたことを考えると、屋敷の分布した地域において迫地の開発を行い経営したのではないかと想定する。柱穴の粗密と四本柱の掘立柱建物跡(高倉)との関係では今帰仁城跡周辺遺跡でも看取することができた。本調査地域でも柱穴の密な空間(調査区南東側)に母屋(主屋)、粗な空間(調査区北西側)で推定高倉が分布する状況であった。

出土遺物の特徴を見ていく。先ず陶磁器から、Ⅲ層では約97%が中国産で、僅かに在地土器やカムイヤキ須恵器、タイ産のものが含まれる。この傾向はこれまでの今帰仁城跡や今帰仁城跡周辺遺跡の傾向と一致する。但し、器種組成を見ていくと、碗・皿以外の器種は希少で盤や鉢が数点得られるだけである。(注記:Ⅲ層からの出土遺物ではないものの、この時期に比定される遺物として明代の青花の瓶やベトナム産の白磁碗などが出土している。)次にⅡ層では25片が沖縄産陶器で、続いて本土産陶磁器5片、中国産52片(口縁部破片数)となり、

前代のⅢ層と大きく組成が異なることが看取できる。また器種でも碗・皿に限らず瓶や注口などが出土し豊富な状況が認められる。またこれと合わせてS X 1の出土遺物についても見ていくと、更に沖縄産陶器の器種組成が豊富であることがわかる。陶磁器以外の遺物では、砥石や磨石などの石器と若干の鉄製品が出土している。銭貨ではⅢ層より判読不明の中国銭?や寛永通宝が出土している。後者の寛永通宝がⅢ層で取り上げられている点がⅢ層の年代についての疑問点として残るものの、僅か1点のみであることから、Ⅱ層として本来取り上げられるもので、発掘時のミスである可能性を指摘しておく。Ⅲ層からはこの他に簪や玉類も出土している。玉はいずれも小さなガラス製の丸玉である。なお、Ⅰ層からの出土ではあるが煙管の雁首や吸い口が出土しており、Ⅱ層の資料と考えることができるのではないだろうか。

食料残滓として推定される炭化植物遺体や貝類遺体、脊椎動物遺体について記す。Ⅲ層の脊椎動物遺体として僅かにウシ・ウマの遊離歯細片が得られているが、個体数は多くない。回収された貝類は皆無であった。炭化植物遺体としてSK661を検討した結果、コムギ・アワを主体とした植物遺体を確認することができた。Ⅱ層でもⅢ層同様に僅かにウシ・ウマの遊離歯細片が得られるが、個体数は少ない。回収された貝類はシャコガイが見られるがこちらも細片と風化が著しく判別は困難であった。植物遺体は未検証である。またほぼ同時期として判断されるS X 1にはウシ・ウマの歯以外にも骨片が得られるが同定には至っていない。貝類も同様だがいずれにせよ出土数は多くない。植物遺体についても未検証である。

以上、発掘調査で確認された、遺構、遺物から天底後原遺跡について総括した。天底後原遺跡一帯の開発は13世紀頃の遺物が散見されることからその時代まで遡る可能性も考慮する。しかし遺跡の地点における陶磁器の主体が15世紀頃はじまることを考えるとこの時期に恒常的な生活を認めることができるだろう。17世紀初め頃にはこの生活痕跡は一端終焉を迎え、その後1719年の天底ムラのムラ移動後に当該地域に人が住み始めたと考えられる。この人々の中には墨書陶器に記載された「天底村 仲宗根筑登之 四月」銘の存在から仲宗根家との関係を推定させる。しかし、この家も最終的には20世紀の初め頃にはどこかへ移り住み別の土地へ引っ越したとみられる。今回調査地点となった場所に近接してある祠はこの屋敷に住んだ人達が先祖伝来の地を参拝するために設置した火之神の祠と考えられる。居住地を移して以後本遺跡は畑として利用され、2005年に道路として利用されるという変遷を追うことが出来るのではないだろうか。

最後になったが、今回の調査は今帰仁村におけるグスク時代から近世・近代における土地利用や集落の実体について確認することのできる希有な事例である。これまで村内では今帰仁城跡を中心に調査を進めてきた。これに対し今回調査した天底後原遺跡は近世の事例を含む一般村落とでも言うべき、城郭から離れた集落の様相を知ることができる結果となった。しかし最後まで、伝承される「按司屋敷」と遺跡の関係を追求することはできなかった。あるいはⅢ層の堆積層を残した人が当該地域の按司とされるような人物だったのだろうか。伝承される記憶と、遺跡との関係については不可思議な所も多いものの、興味が惹かれる。記録保存として行った天底後原遺跡の発掘調査の成果が、今後天底や今帰仁ひいては琉球史を研究する上で重要な資料として活用されることを期待したい。

参 考 文 献

〈あ〉

- 家田 淳一 1998年「沖縄のやきもの－概説－」『沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館
- 上原 静・ほか 1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育委員会
- 上田 秀夫 1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野 正敏 1982年「14～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 扇浦 正義 1999年「長崎出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』No.19 日本貿易陶磁研究会

〈さ〉

- 坂本 磐雄 1989年『沖縄の集落景観』九州大学出版会 p218
- 島 弘・ほか 2000年『天界寺跡』那覇市文化財報告書第43集 那覇市教育委員会
- 白木原和美 1978年「クガニイシ」『法文論叢』第41号 熊本大学法文学部

〈た〉

- 高良 倉吉 (編) 2002年『沖縄県の地名』日本歴史地名大系48 平凡社

〈な〉

- 仲原 弘哲 1990年「天底」『今帰仁研究【今帰仁のムラ・シマ】』vol.1 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原 弘哲 1997年「天底」『今帰仁研究【今帰仁の地名－字名と小字－】』vol.7 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 野上 建紀 2001年「沈船資料にみる明末～清朝磁器」『貿易陶磁研究』No.21 日本貿易陶磁研究会
- 今帰仁村教育委員会編 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集
- 今帰仁村教育委員会編 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集

〈は〉

- 堀内 秀樹 1999年「江戸遺跡出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』No.19 日本貿易陶磁研究会
- 萩尾 俊章 1982年「あめそこ」『沖縄国頭の村落（上巻）』新星図書出版

〈ま〉

- 森田 勉 1982年「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森 毅 1995年「16・17世紀における陶磁器の様相と染付の変化－大阪の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会
- 宮城 弘樹・ほか 2004年「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的研究」『沖縄埋文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 宮里 朝光 1983年「筑登之」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社

〈や〉

- 与儀 銀一 1975年「地誌概要」『今帰仁村史』今帰仁村史編纂委員会

写真図版



平成16年度 発掘調査関係者



図版1 空から見た天底後原遺跡



図版2 着手前（西から東）



図版3 調査状況（東から西）



図版4 完掘状況（西から東）



図版5 完掘状況（南から北）



図版6 I-19 北壁セクション



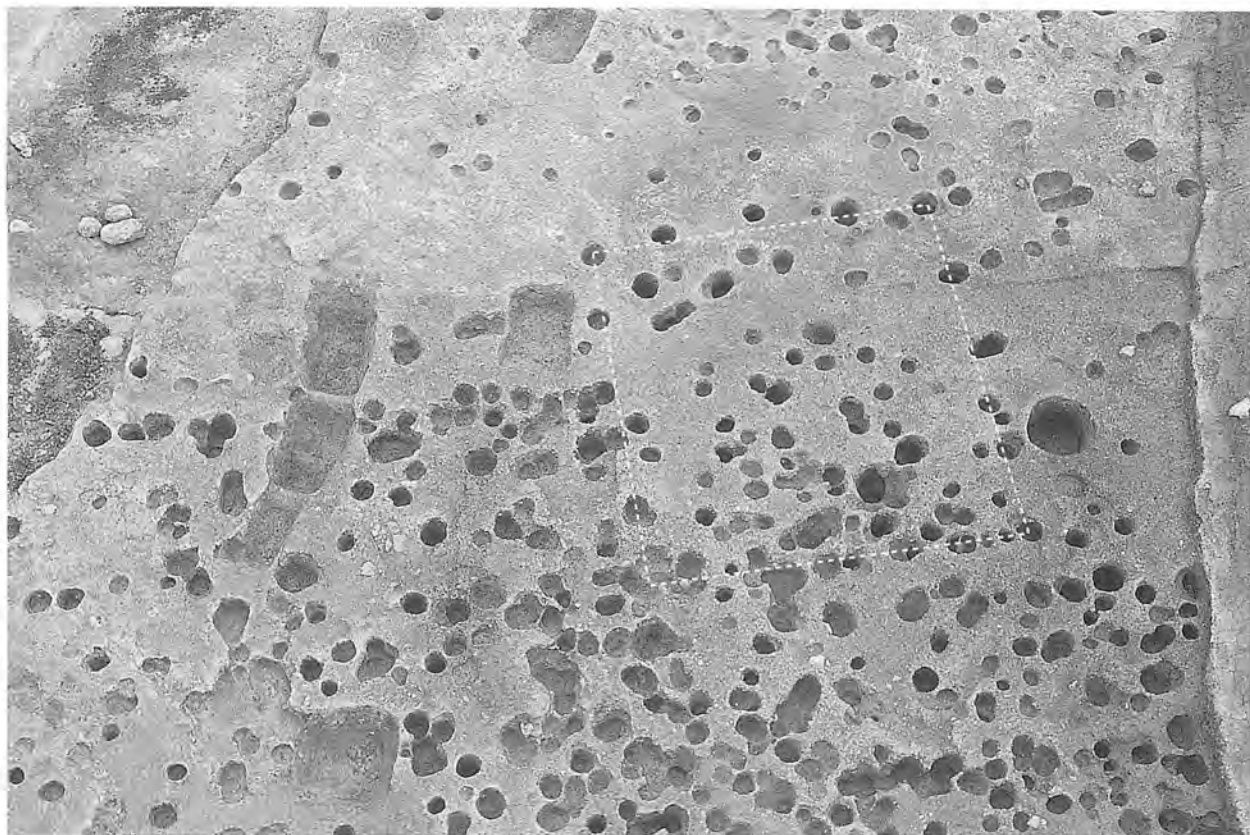
図版7 SB01



図版 8 SK661 半裁状況



図版 9 SK661 完掘状況



図版10 SB02 完掘状況



図版11 SX1・SX2 遠景（南から北）



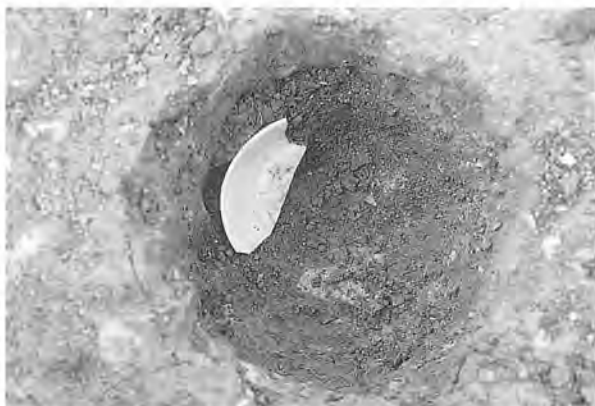
図版12 SX1・SX2 近景（北から南）



図版13 SX1 断面



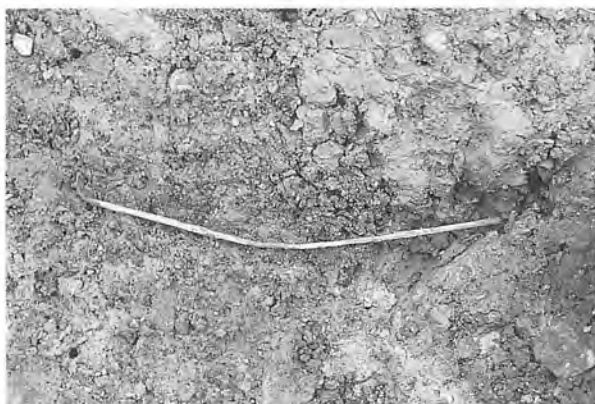
図版14 青磁皿出土状況 (20-7, Pit508)



図版15 青花皿出土状況 (22-7, Pit265)



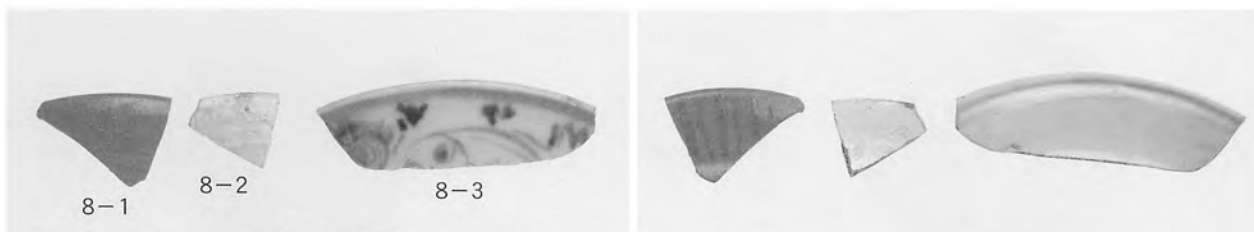
図版16 青花碗出土状況 (22-2, Pit12)



図版17 ジューファー出土状況 (24-13, III層)



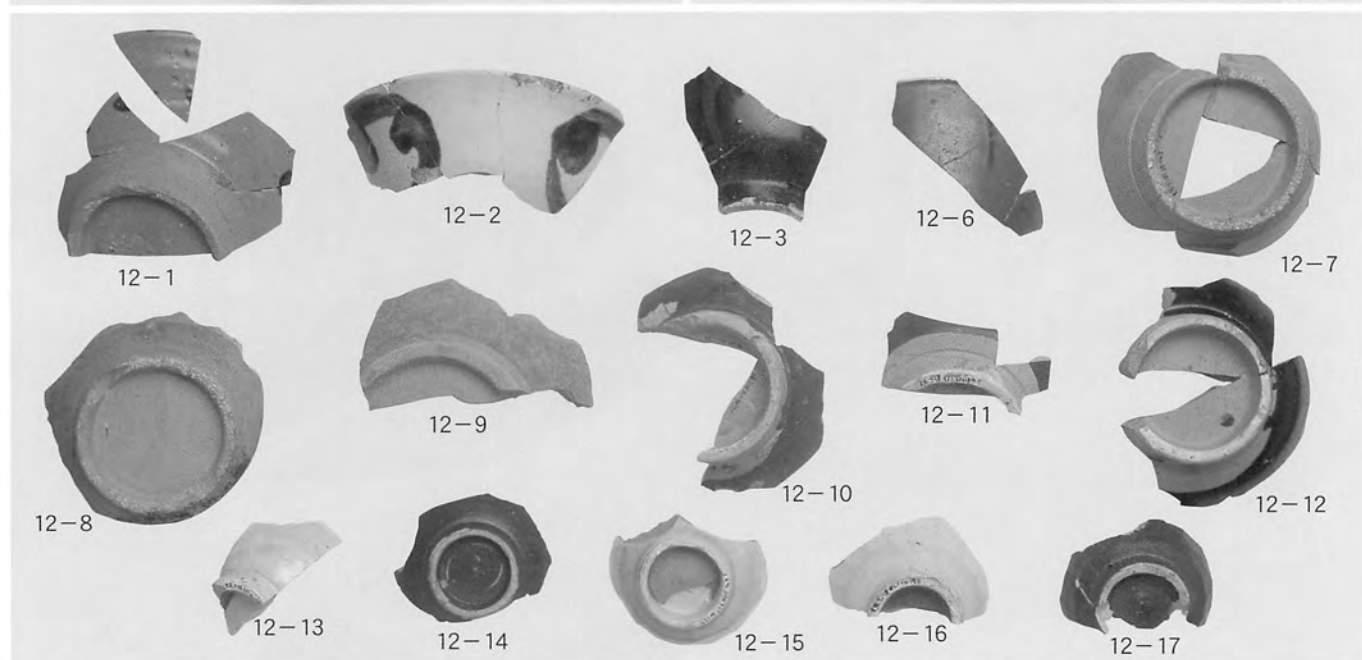
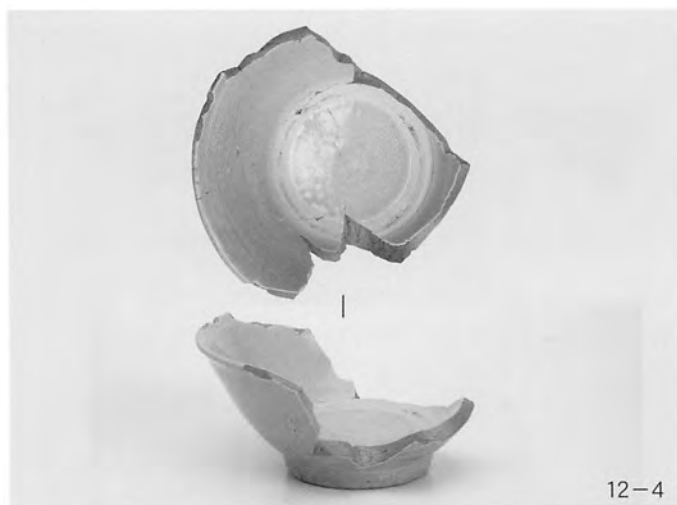
図版18 タイ産褐釉陶器出土状況 (21-9, III層)



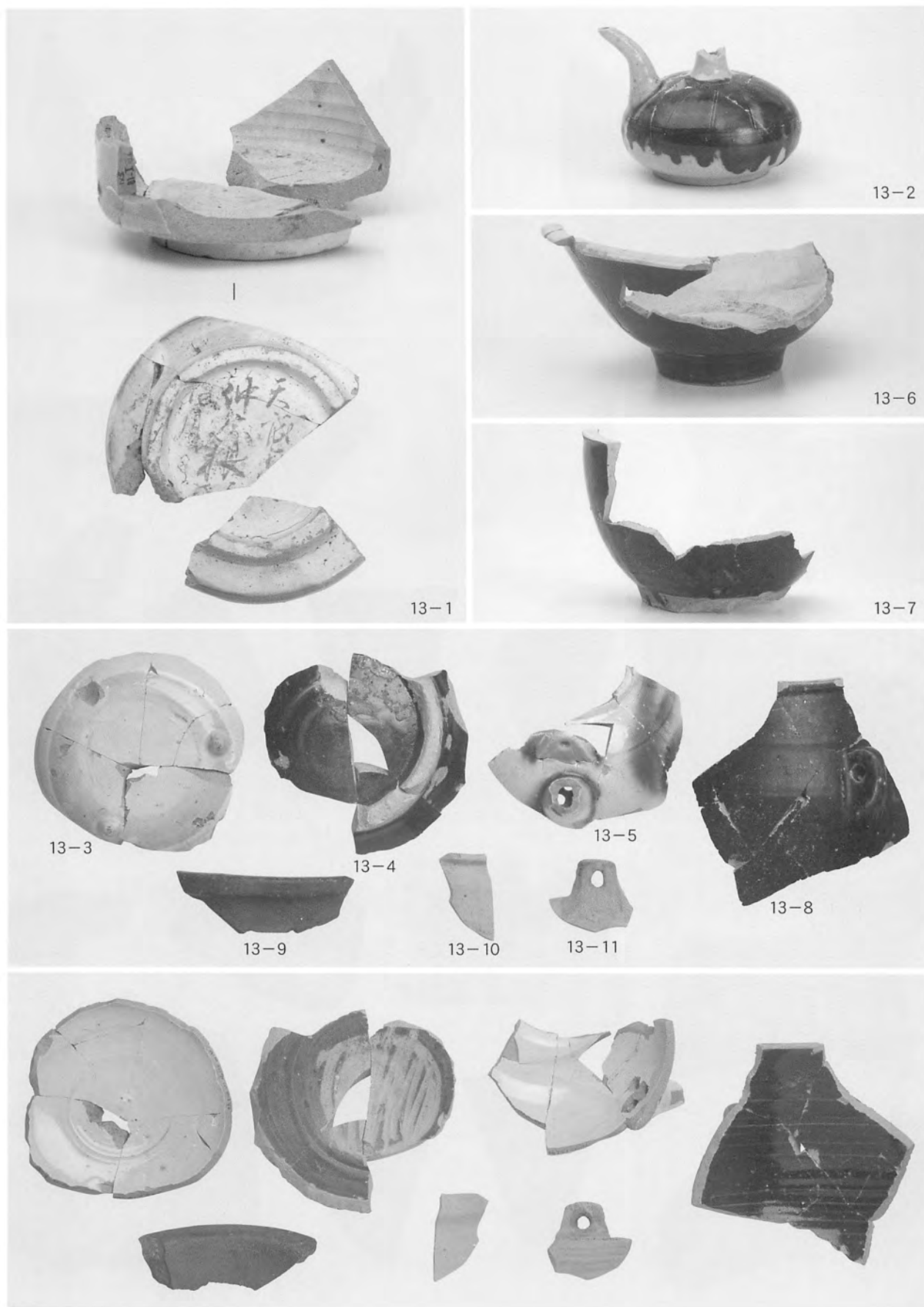
図版19 SK661 出土遺物



図版20 SX1 出土遺物 (1)



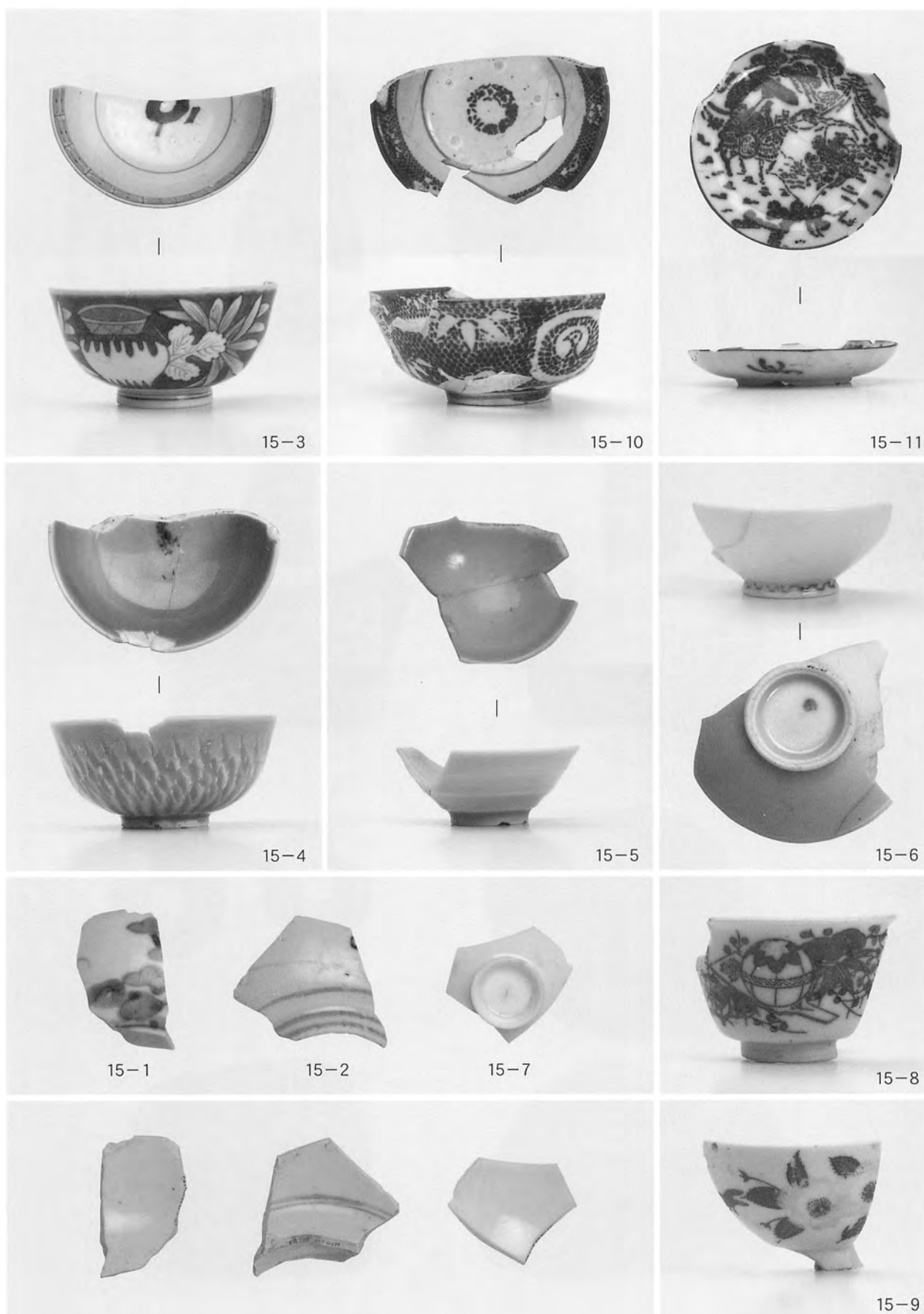
図版21 SX1 出土遺物（2）



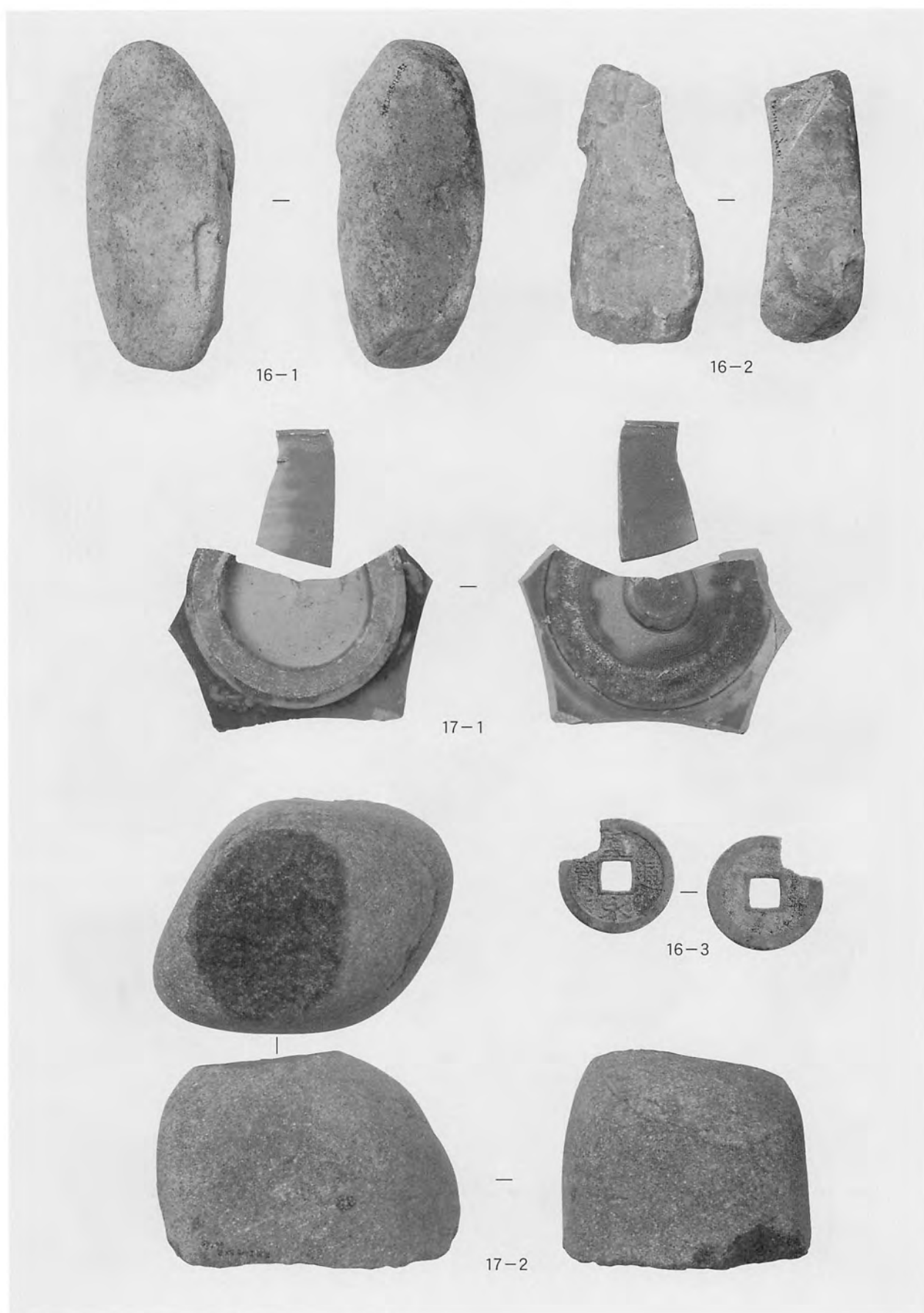
图版22 SX1 出土遺物 (3)



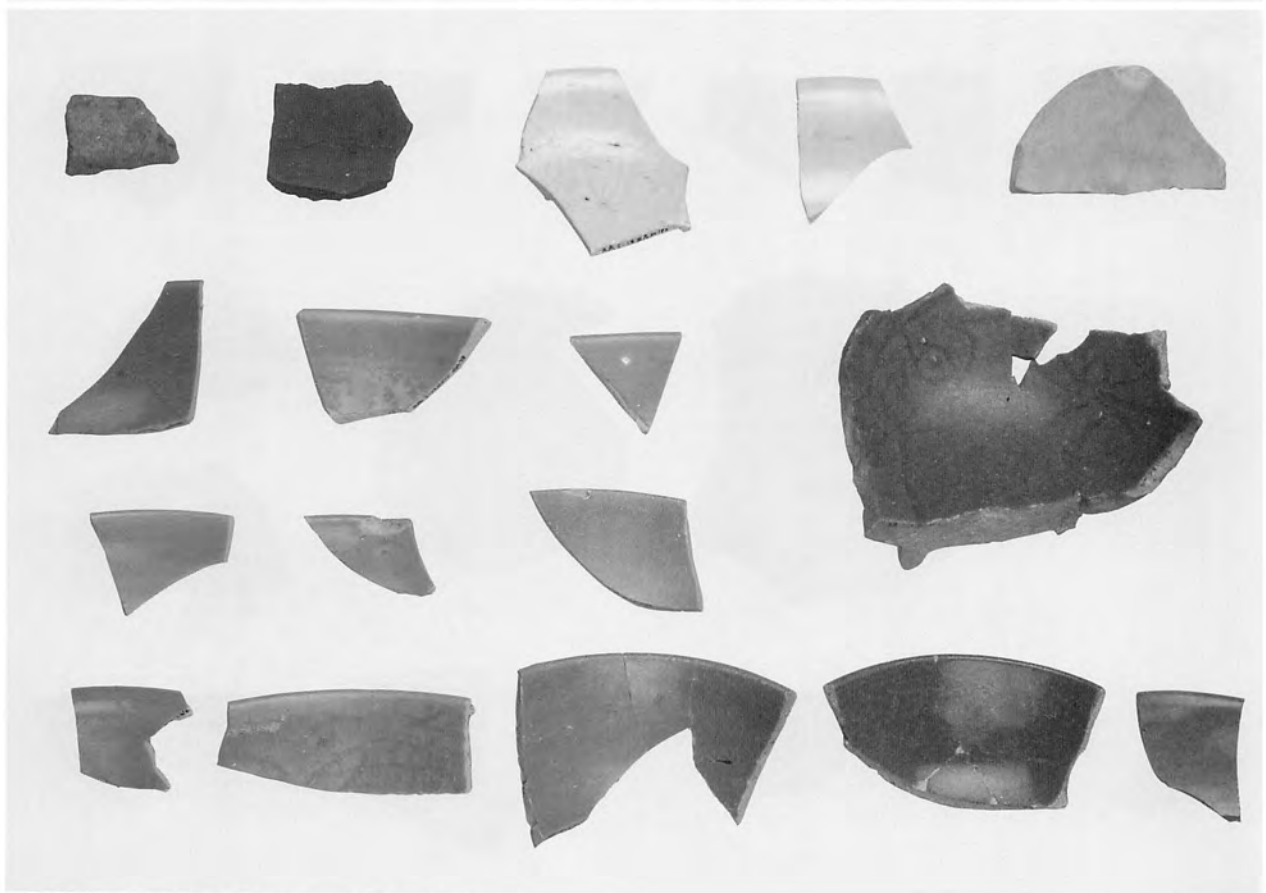
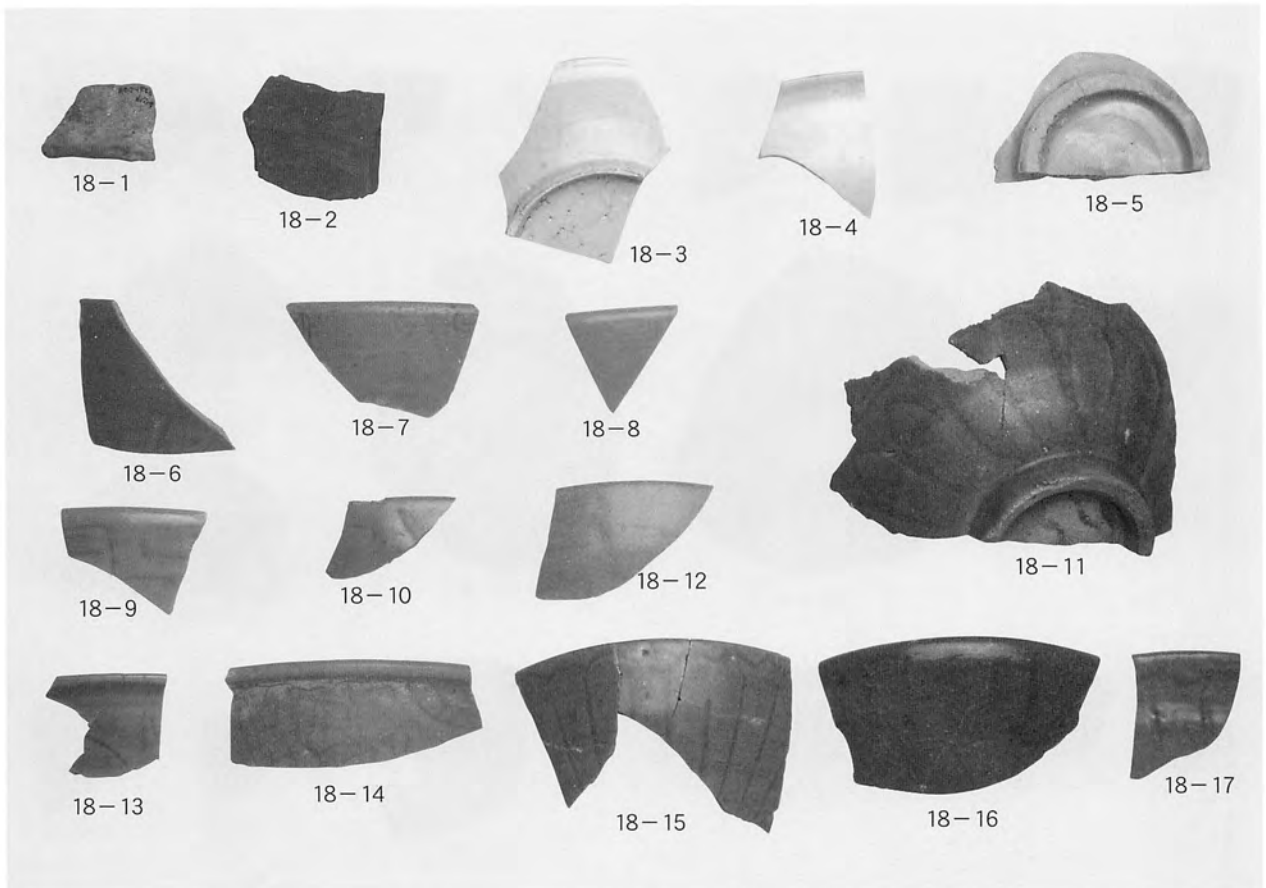
図版23 SX1 出土遺物（4）



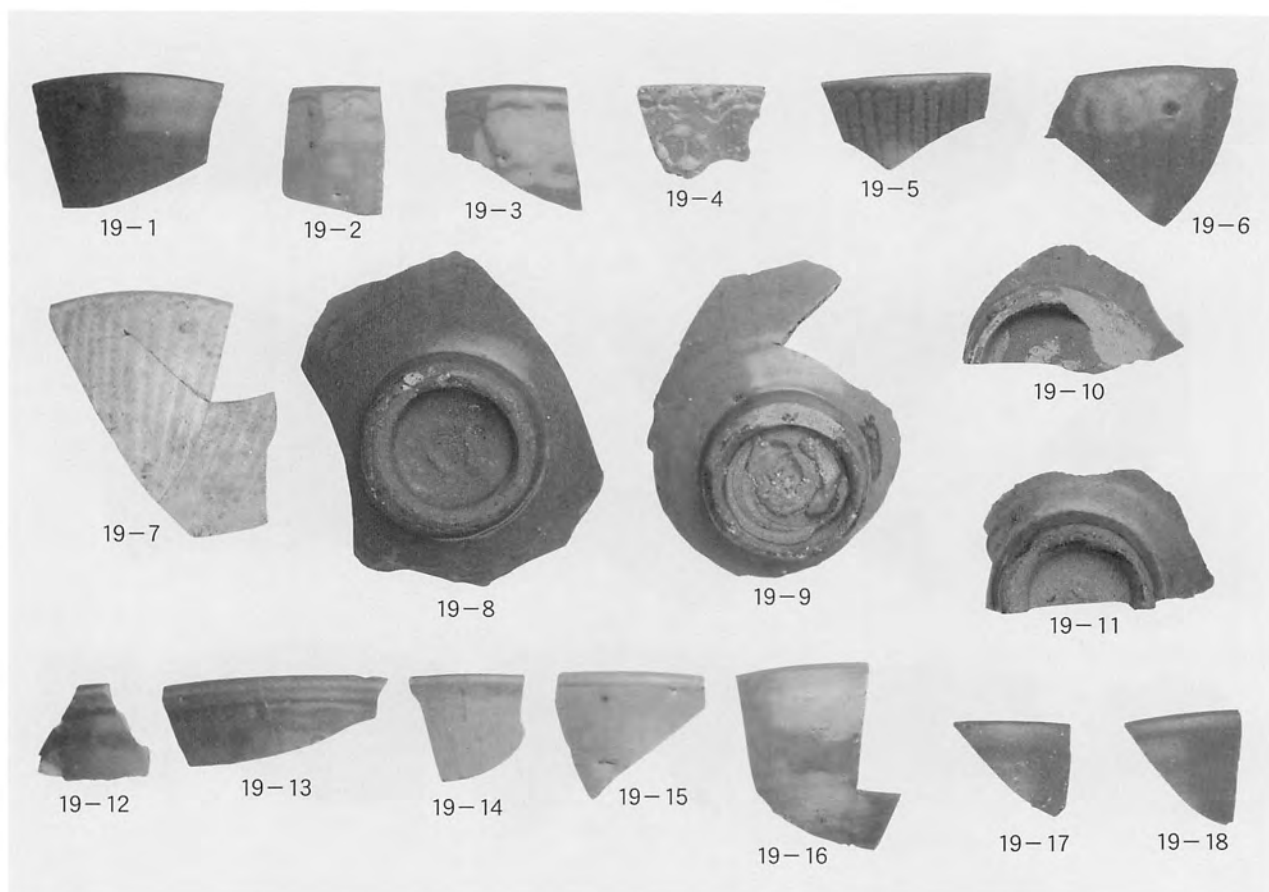
图版24 SX1 出土遺物 (5)



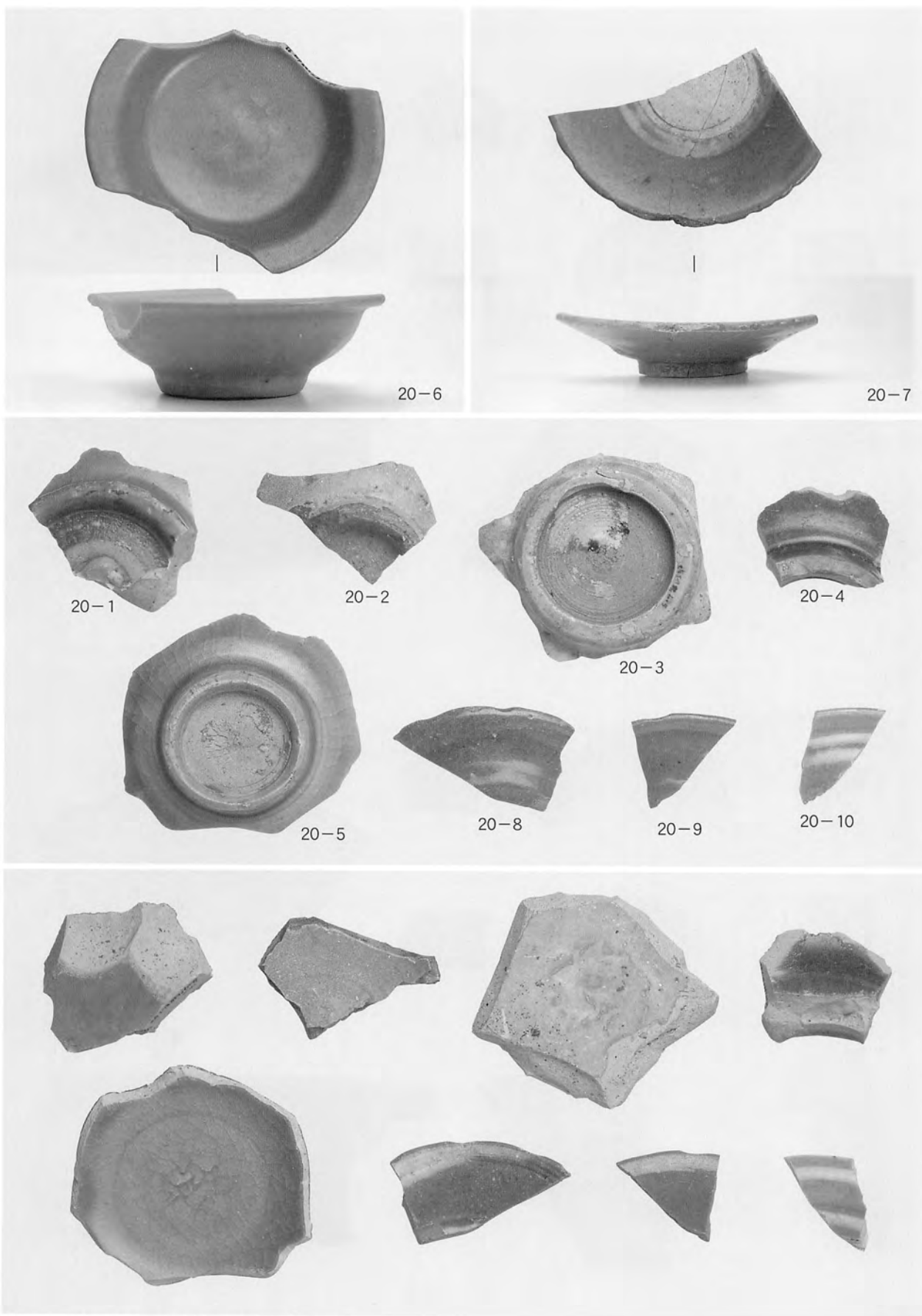
図版25 SX1 出土遺物 (6)・SX2 出土遺物



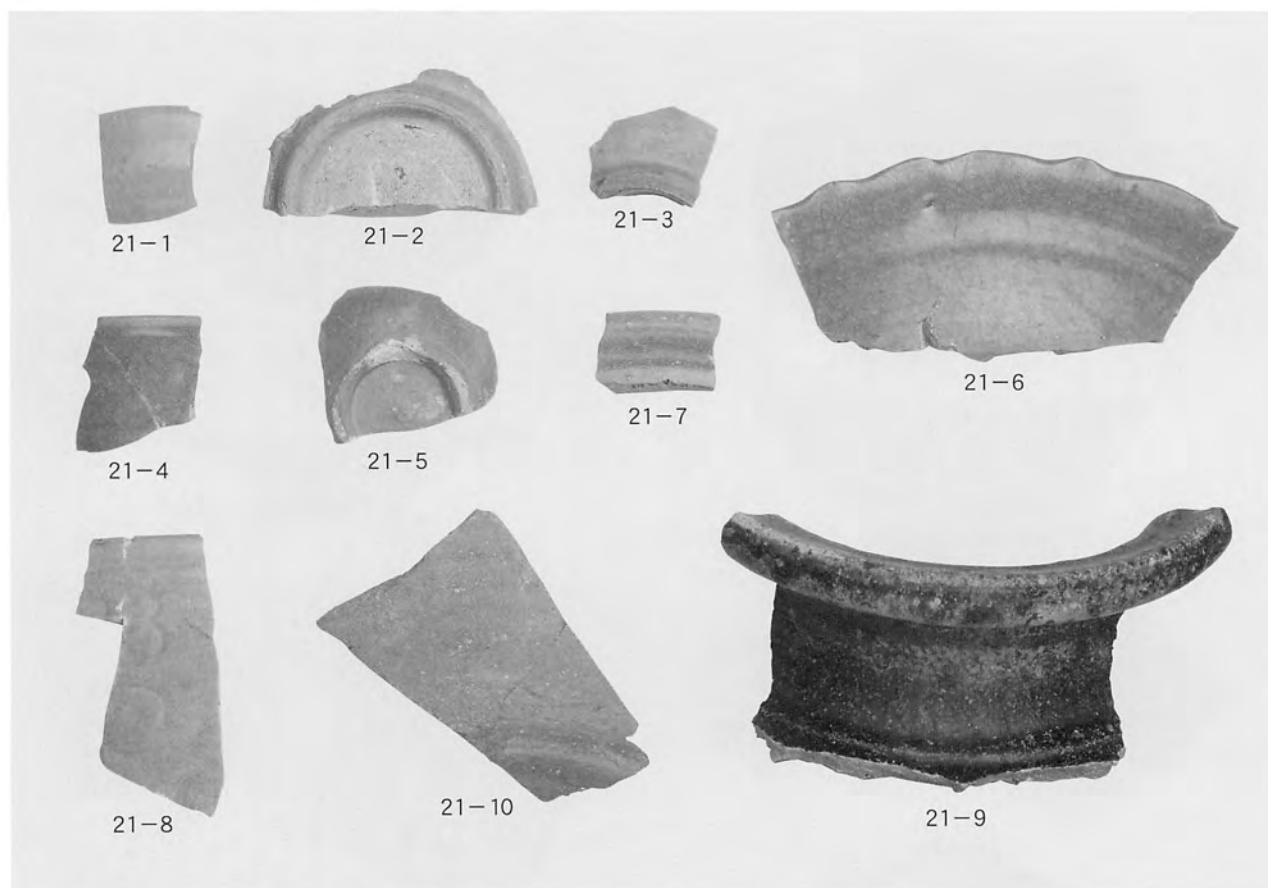
図版26 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（1）



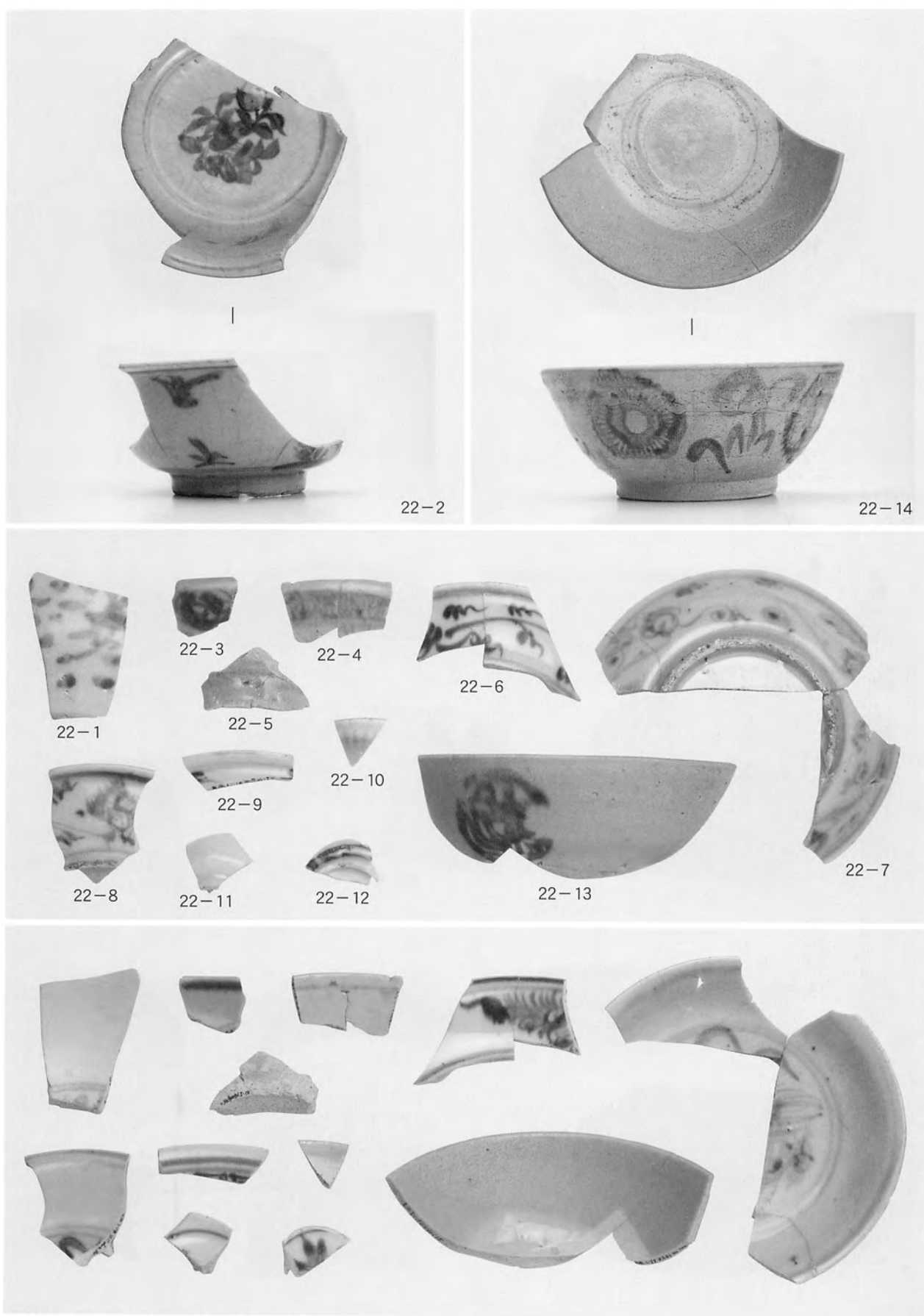
図版27 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（2）



図版28 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（3）



図版29 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（4）



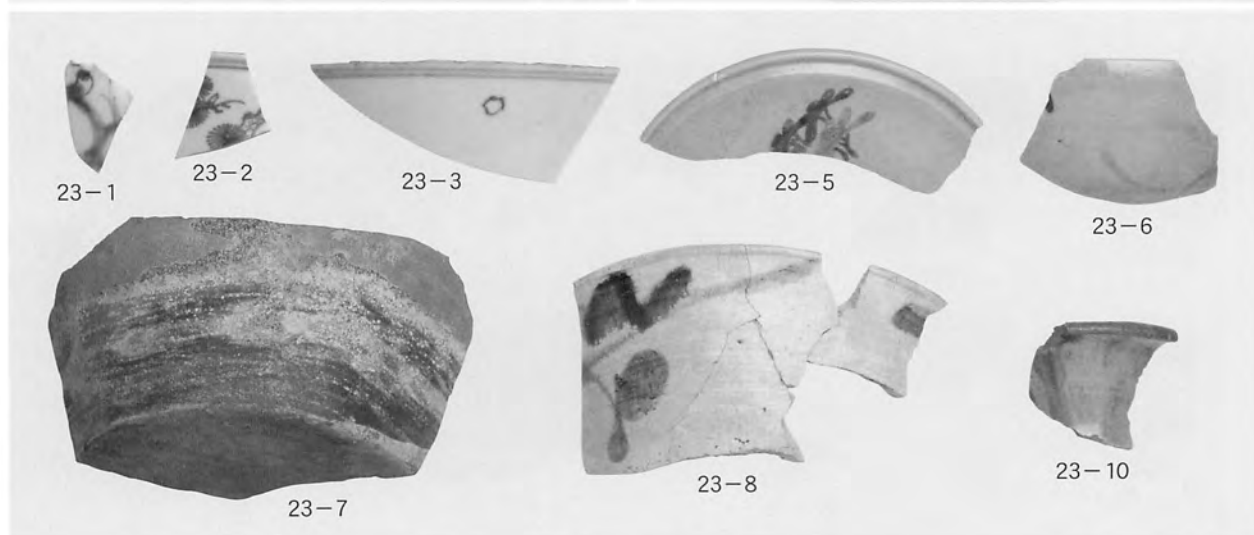
図版30 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（5）



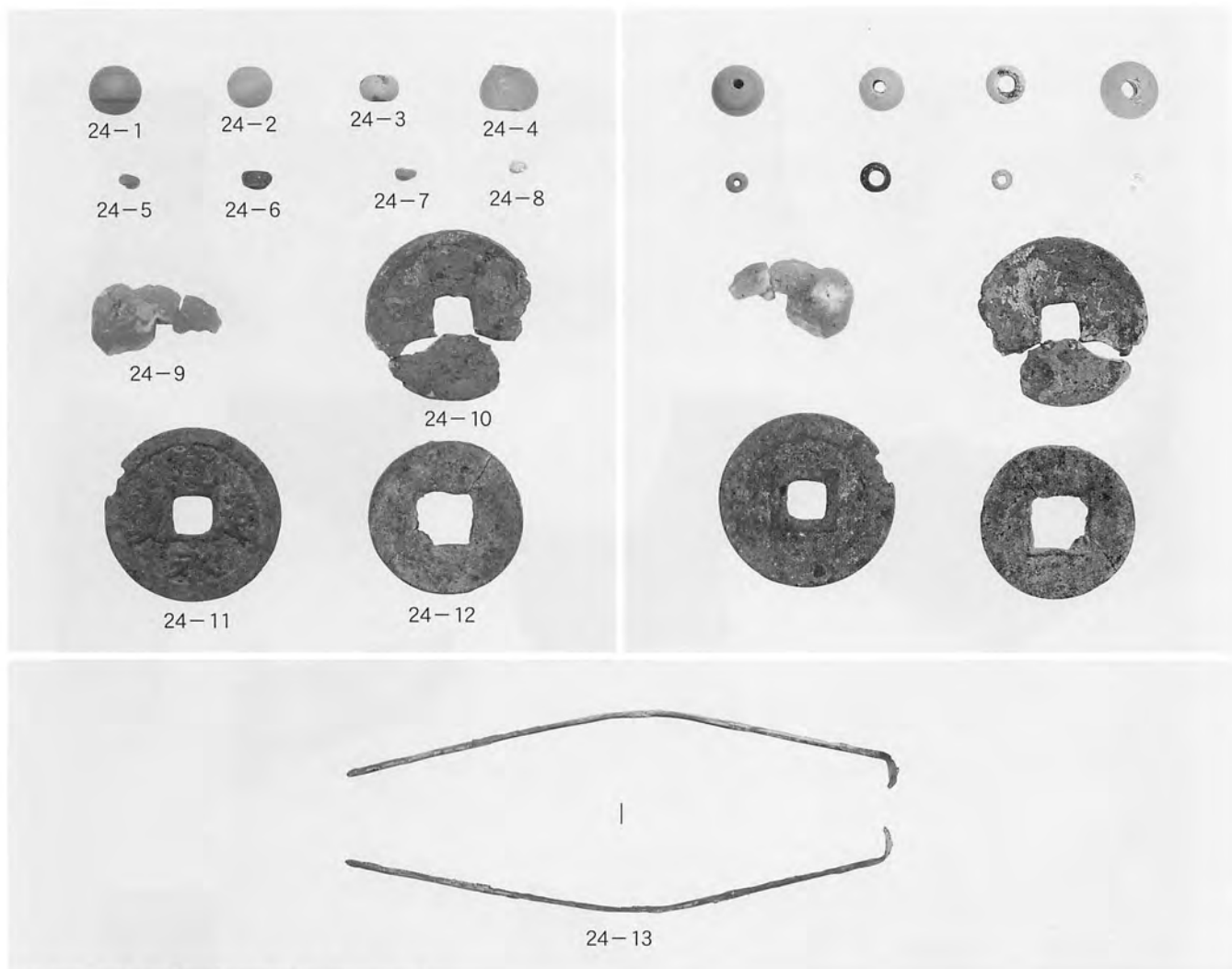
23-4



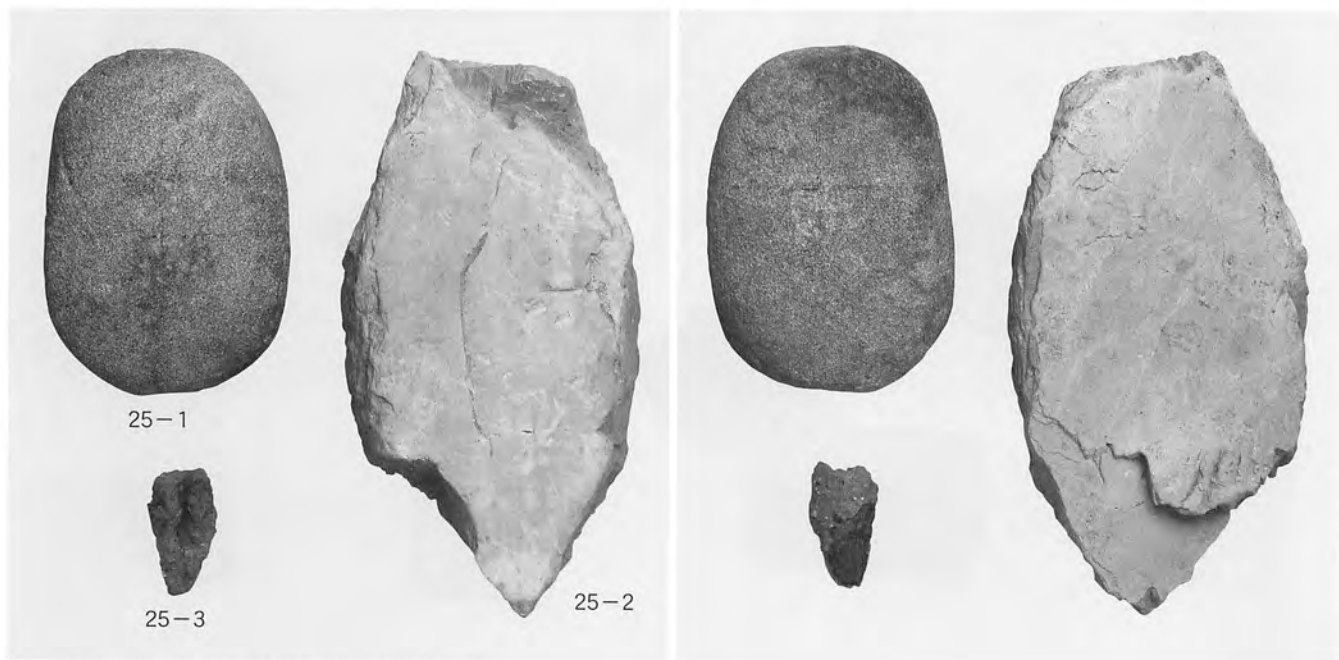
23-9



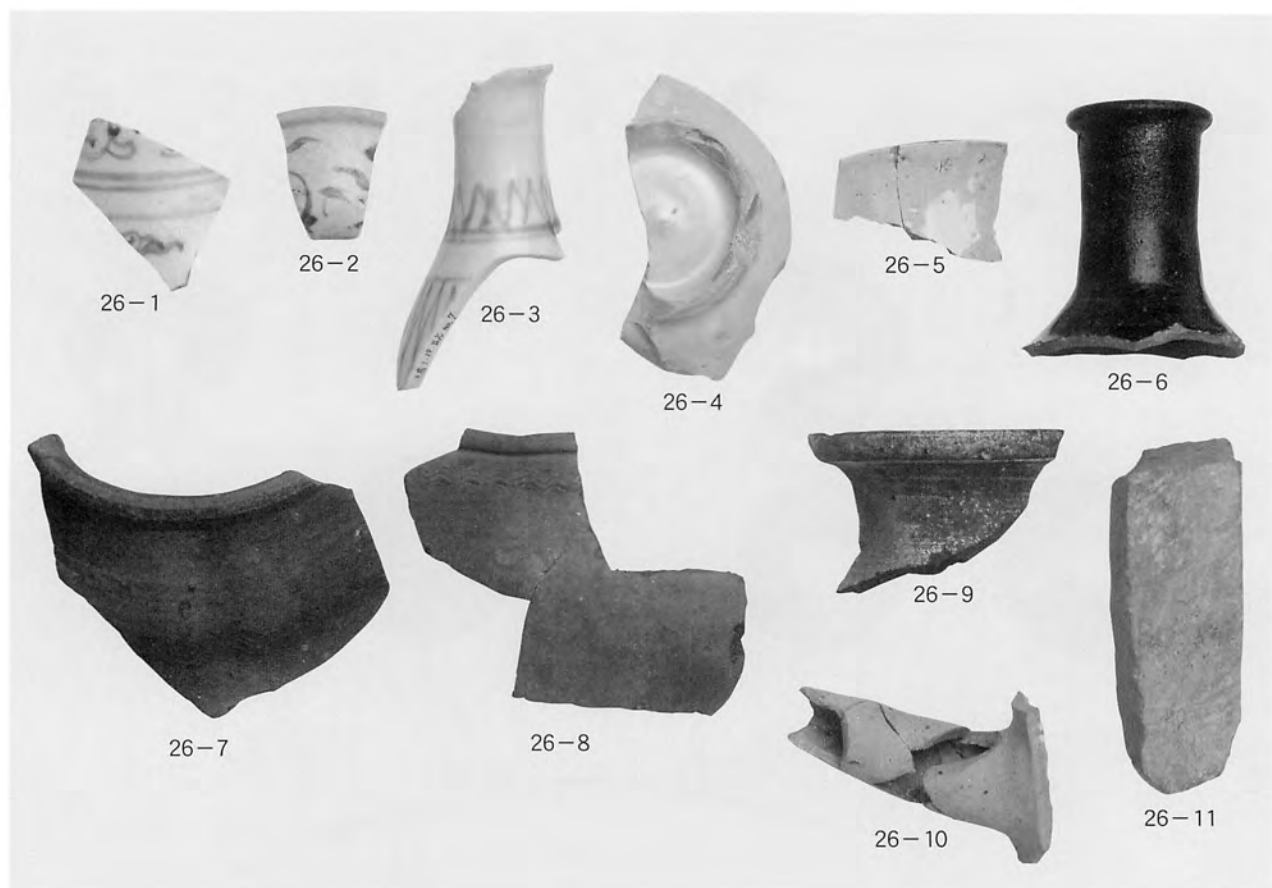
図版31 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（6）



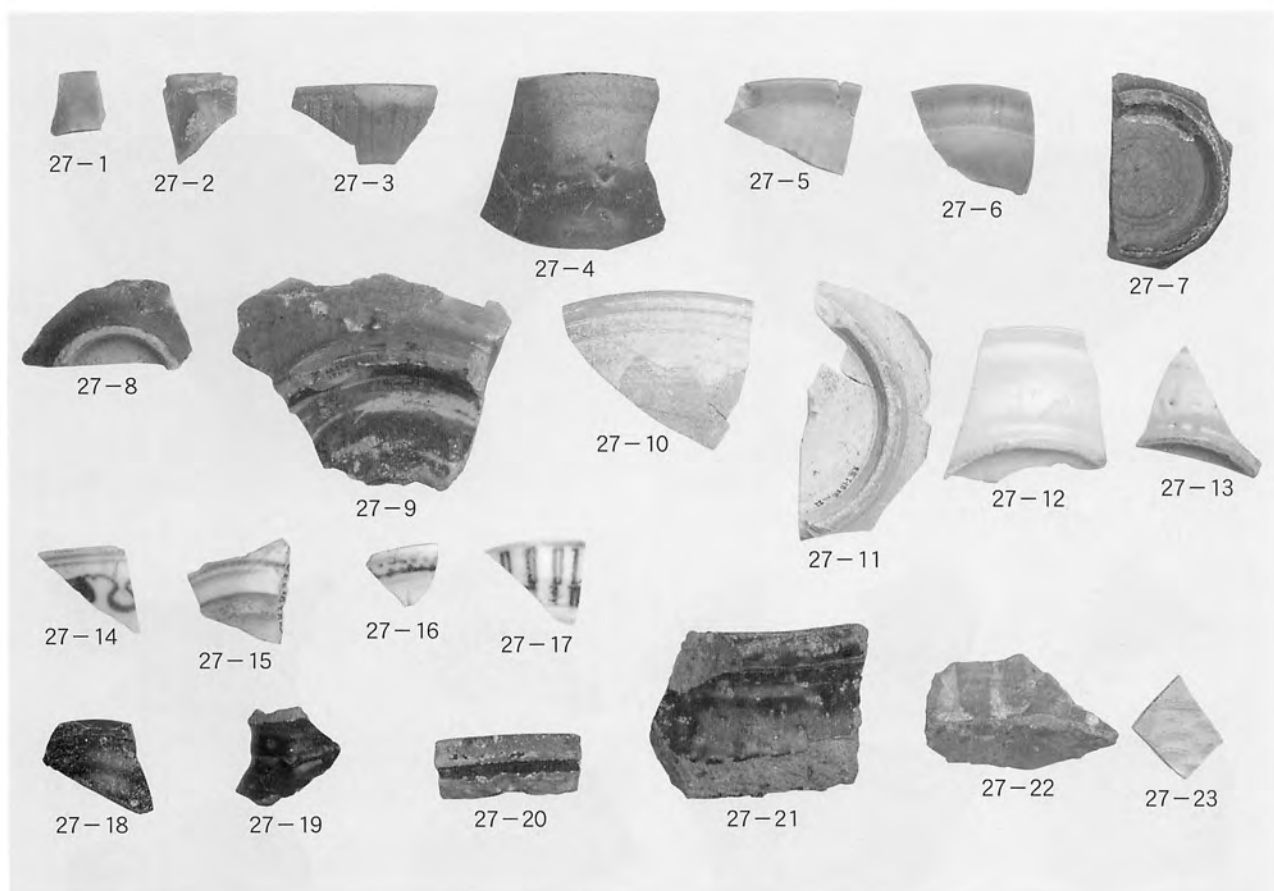
図版32 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（7）



図版33 Ⅲ層及び遺構内出土遺物（8）



图版34 II層出土遺物



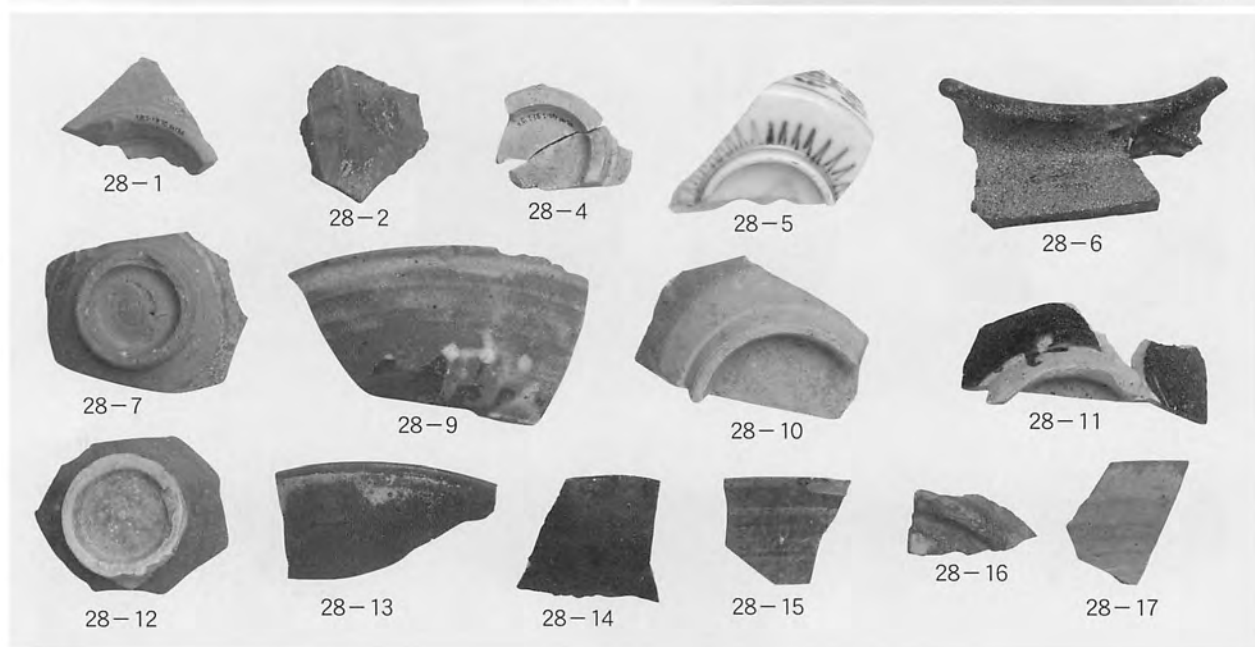
图版35 I層出土遺物(1)



28-3



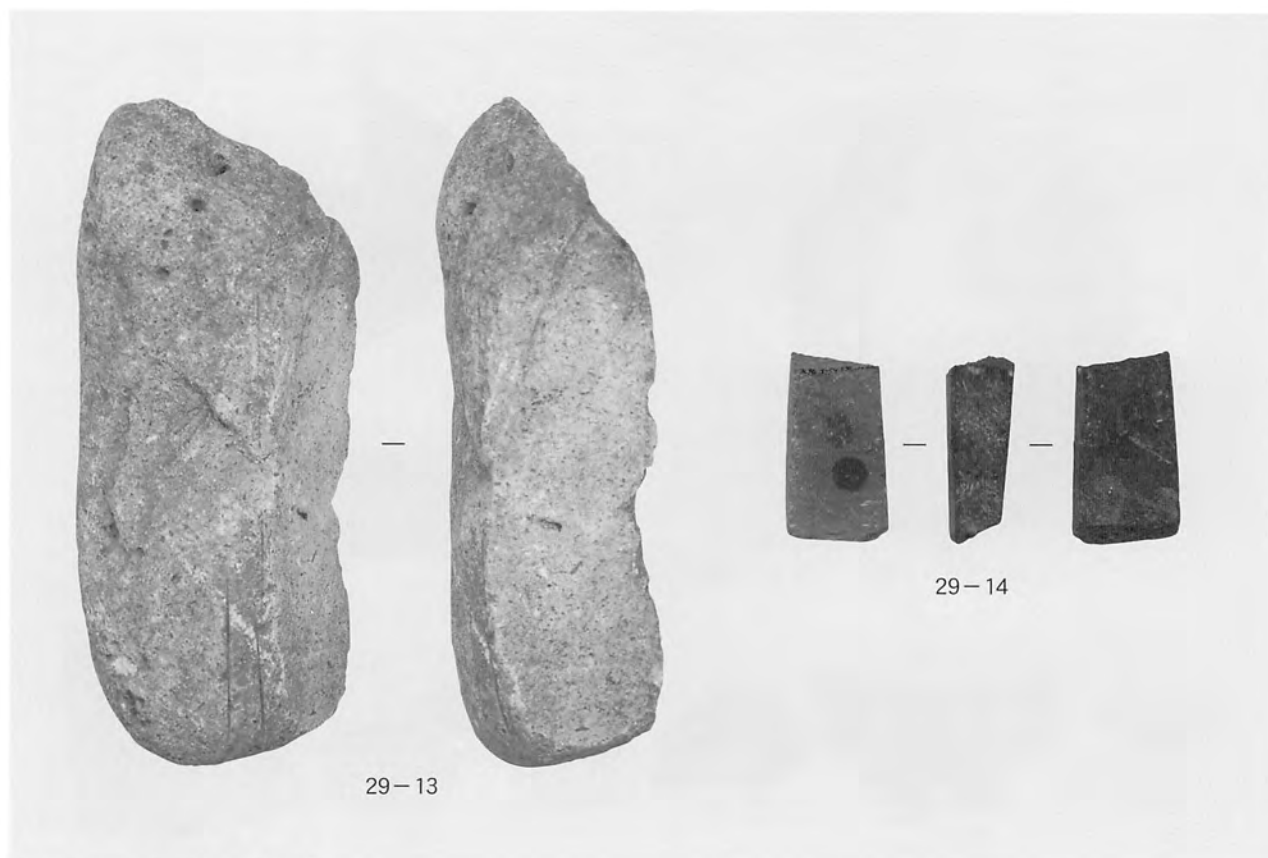
28-8



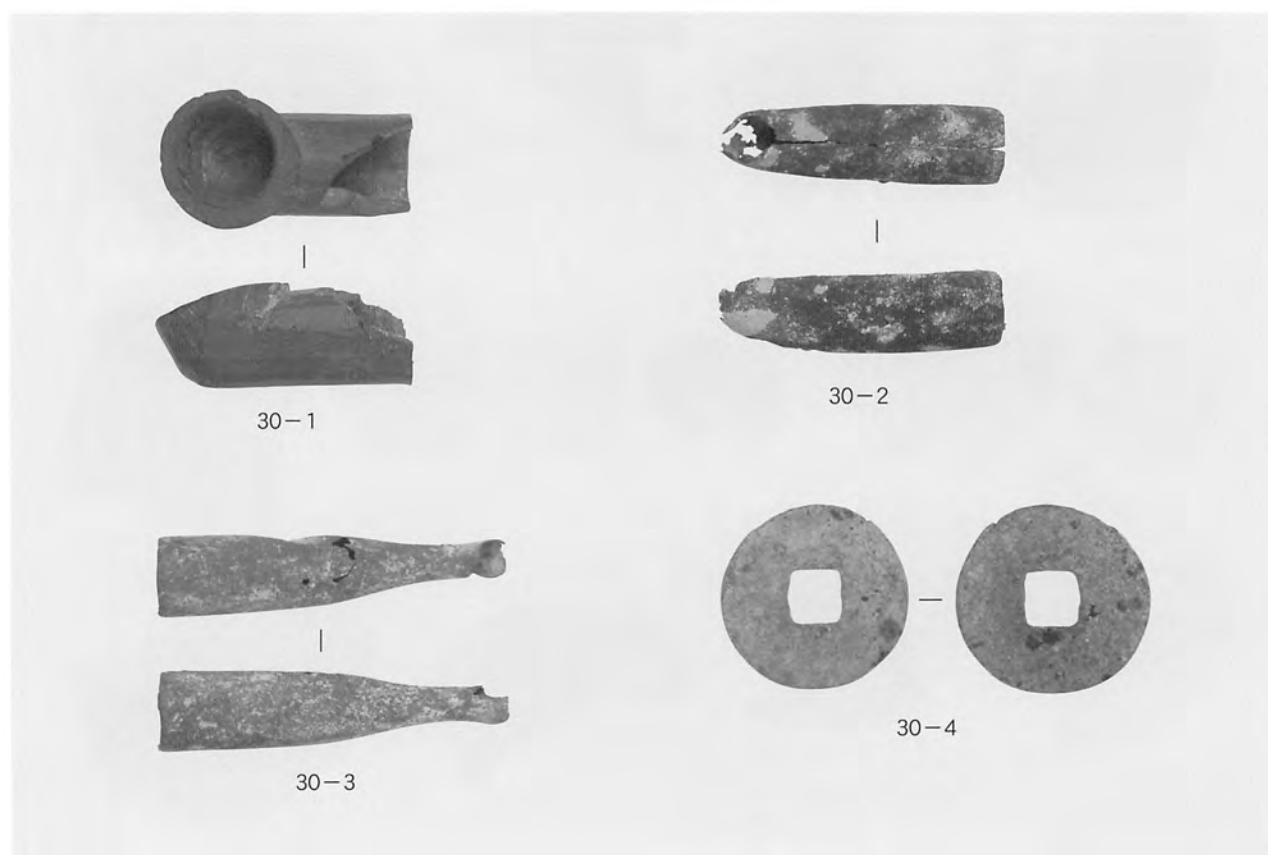
図版36 I層出土遺物(2)



图版37 I 層出土遺物 (3)



図版38 I層出土遺物（3）



図版39 I層出土遺物（4）

報 告 書 抄 録

ふ り が な		あめそこくしばるいせき						
書 名		天底後原遺跡						
副 書 名		－屋我地仲宗根線道路新設工事に係る緊急発掘調査－						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		今帰仁村文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第21集						
編 著 者 名		玉城靖・宮城弘樹						
発 行 機 関		今帰仁村教育委員会						
所 在 地		〒905-0592 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL 0980－56－3201						
発 行 年 日		西暦2006年2月28日（平成18年）						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
あめそこくしばるいせき 天底後原遺跡	な き じん 今帰仁村字 あめそこ 天底565 " 566 " 567 " 568	473065		26°40′07″	127°58′51″	16年度 2004.8.1 ～ 2005.2.28 17年度 2005.5.27 ～ 2006.2.28	400㎡	屋我地仲宗根線 道路新設工事に 係る緊急発掘調 査
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
天底後原遺跡		集落	グスク時代 (15世紀から 16世紀) 琉球王朝時代 (17世紀 後半から20 世紀初頭)	掘立柱建物跡 土坑 集石遺構		土器 カムイヤキ須恵器 中国陶器磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 タイ陶磁 褐釉陶器 ベトナム陶磁 白磁 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 本土産陶磁器 玉類 銭貨 金属製品 石器		

今帰仁村文化財調査報告書 第21集

天底後原遺跡

発行 2006年2月28日
今帰仁村教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232
TEL 0980-56-3201

印刷 文進印刷株式会社
沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14
TEL 098-994-5777
